
ユーノの恋愛を本気で応援してみた

観光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ユーノの恋愛を本気で応援してみた

【Nコード】

N3285T

【作者名】

観光

【あらすじ】

こんにちは、主人公の総一です。何か知らないけど神様がチートにして魔法少女リリカルなのはに送ってくれて言うからいろいろねだった。超魔力。魔力無効。どんなものでも一撃粉碎。きたこれなら勝てる。と思ってたらまさかの　ただし効果範囲は人差し指のみ。ごめん無理だわ。というわけで自分は原作に介入せずに隅っこのほうで友達のユーノの恋を応援してやろうじゃないか！
！　　そんなこんなで原作非介入、非チートの主人公（あれ、これってただの一般人じゃね？）が織りなすユーノの初恋を

ブローグ」

ただし人差し指のみ」(前書き)

チートな能力だけど絶対に目の目をみなそうな能力。

敵をバツタバツタ場ぎ倒して爽快な気分を味わえるなんてことは絶対にありません。

ついでに言うとは原作には表だって介入はしません。

してもユーノの初恋を応援するために裏であれこれするだけです。そして一話あたりが短いです。でもそれが仕様なんです。

最後にもう一度言います。絶対にチートなことはおきんぞ。

プロローグ 「

ただし人差し指のみ」

ユーノ・スクライア

彼を表す言葉があるのならば、頭脳明晰、文武両道といった言葉がふさわしいだろう。

若干九歳にして空戦Aランクを所得、十を数えるころには当時利用価値の少なかった無限書庫の利用方法に改革を起こし、現在では無限書庫のトップである無限書庫司書長に就任し日夜求められる情報を検索。その役所柄今では管理局にはなくてはならない存在だと呼ばれている。

彼は仕事の合間を縫って書いた歴史についてのレポートを出しており、その点でも考古学者として非常に高い評価を受けている。

一方、彼の評価できる点は能力だけではない。彼は誠実で人柄もよく、周りの人に非常に高い信頼を受けている。また容姿も優れている点もあるだろう。女性のようにも見える細い体かと思えば、実にたくましい肉体を持っている。さらに頬笑みをたたえた彼の表情は同性であろうとも見惚れることは間違いない。その美貌は多くの女性管理局員に思いを寄せられており、”彼氏にしたい管理局員”では毎年五位以内に必ずランクインしてもいる。雑誌の一面を飾る彼の甘いマスクにいったい何人の女性が盲目的な恋のハリケーンにさらわれたのだろう。もう数える気にすらならない。

さて、非常に有料物件である彼だがあまり異性関係の噂というのは流れない。

それはなぜか？ 簡単な理由だ。

ユーノ・スクライアは幼いころずっと想ってきた女性がいる。

この話はそんな彼女と彼女 高町なのは が近づいていく過程が綴られたある人の記録である。

プロローグ 「ただし人差し指のみ」

転生という言葉をご存じだろうか。

そう、あれだ。あれだよ明智君。死んだあとにまた生まれるって奴さ。

俺こと内田総一ウチタソウイチはよくわからないうちに死んでしまっ、また生まれた。正確には再生されたってところか。

真っ白な場所で自称神様に出会っていろいろ願いを叶えてもらってこの世界に来たってわけ。別に子供からやりたいとは思ってないから、この世界　魔法少女リリカルなのはの主人公と同じくらいの年齢にしてくれてお願いがちゃんとかなったようで、今の俺はユ一ノみたいな顔してる。ちゃんとお願いがかなって何よりだ。うん。

ぺちぺちと瑞々しい子供の肌に感動を覚えつつ、神様からもらった能力を確認しようか。

俺が目覚めた場所のすぐ横にあった紙切れを広げる。神様からの手紙らしい。

ふふふ。聞いて驚くなよ？

なんか知らんが特典でもらえるようになったチート能力に俺はいつさい妥協しなかったからな。

えっと、なにになに？

『こんにちは、総一君。君が望んだ通りの能力を用意した。

まず、不老不死となり、君の要望にあったそれなりのイケメンに変えておいた。今君がいる場所はスクライアの部族がいる場所の近くですぐに誰かが通りがかり君を引き取ってくれるだろう。

さて君が一番聞きたいことである能力だが、あらゆる魔力を無効化し周囲の魔力を吸収することで永久に変わらない魔力量を保有するようにした。さらに触れたものを強制で粉碎する能力もサービスだ』

……ふはっ。

駄目だ。笑っちまう。

「うへへへへ……くはっ」

ここまでお膳立てしてくれるとは。口元が怪しくゆがんでるよ。間違いない周りの人が俺のこと見たら気味悪がって逃げるくらい。

というかこれだけのチートがあればもう怖いものはない!!

勝つる。これで勝つる!!

原作ブレイク上等だっぜ!!

ぐっと握りこぶしを作って立ち上がる。

「うっしやあああああああああ!!! 人生バラ色キターー
————!!!」

あふれるパトスを抑えるつもりもなく、いい年こいてダンシング。無性に体を動かして喜びのポーズ。なんだこれ。

とテンションに身を任せている俺の手元から一枚の紙が落ちた。
神様の手紙の二枚目らしい。

別に読む必要もないかなあ。

いや、いかんいかん。チートといえど慢心はいけないよな。……チ
ート、うはっ。

えつと、どれどれ。

『ただし能力の範囲は

人差し指のみ』

え？

ブログ「

ただし人差し指のみ」(後書き)

しばらくは毎日更新しようと思ってる。

第一話 「チートエ」……………」

こんにちは、チート主人公にはなれないと思い知った総一です。

いやね、まさかチートできるのは俺の人差し指だけだとは思わなかったよ。

ほんとびっくり。うん、びっくり……

一話 「チートエ」……………」

神様あ…………ちゃん仕事しろよ…………

そう口走ってしばらく呆然とした俺は何も悪くない。

あ、ちなみにあの衝撃の事実には呆然としていた俺は無事スクライアに保護されました。保護してくれたおねえさんいわく、まるで捨てられた事実が認められなくて魂が死んだ人間のようなだった、とのこと。あんまりにもかわいそうで思わず引き取ってしまったらし

い。

運がいいのか悪いのか、あの事実のおかげでスクライアに保護されたというのはちよつと納得いかないがそれは置いておこう。

とりあえずあれから三年たつて思い返しているのが今の状況なんだけど、ちよつと面倒だからダイジェストでお知らせするのを許してほしい。異論は三文字までなら認めよう。

さて、あれから魂が抜け出たようにぼおーつとしていた俺だがお姉さんの献身的な努力のおかげで立ち直り、無事に復帰を果たした。とりあえずお世話になっているから働かなくちゃいけないんだろうけど、どうにも人差し指から先だけだチートという事実を認めたくなくて一人森の奥へと隠れて実験してみた。

結果

人差し指どころか、第一関節までがチートでした。

超意味ねえ。余計に狭くなつてどうすんだよ。

知ってる？ リンカーコアって胸の部分にあるんだよ。つまり魔力を操るなら胸の部分のリンカーコアを介して操作するんだけど……人差し指に魔力があつても意味無いよね。

そうだよ。俺は魔力チートできなかったんだよ。

魔力を無効化にする能力は？ もっと意味無いって。だってこの世

界の魔導師の魔力弾って銃弾みたいなものだぜ。魔力で強化もできない俺が銃弾を正確に人差し指で触ることなんてできやしないって男女平等パンチこと幻想殺しよりも狭い範囲とかこれなんて縛りプレイ？

不老不死なんだからいいじゃん？　おいおい人差し指だけ不老不死になってどうすんだよ。他の部分は老いていくのに一部分だけピッチピチと怖いだろ。

俺が死んだ後も人差し指だけは脈打ってるとか何それ怖い。

あつ、ちなみに唯一使えそうなんでも粉碎する能力だけ……一番いらない。

「解せぬ……………」

俺が手に取ったティーカップ（お茶入り）が触った瞬間粉碎される。

「あつつつつつつ！！」

落ちたお茶が熱い！　やっぱりお茶じゃなくて紅茶を入れるべきだったかつ！　ごめんね、ティーカップちゃん！！

とまあこんな感じで触れると全部粉碎するのでめちゃくちゃ困る。ちなみに生き物は粉碎できません。

「はあ……………」

ほんと世の中上手くいかない。

人生バラ色と思ってたけどそう上手くいかないのね。

というかうへっ、ってなんだよ。チート手に入れたからって喜びす

ぎだろ。自分で言うのもなんだけどキモイわ。

あゝ誰にも見られなくてよかったよ。黒歴史確定だったわ。そういえば他にもあったな。

「あ~~~~~!!!!」

あまりの恥ずかしさに頭を押さえて地面をごろごろする。やったねカーペットが綺麗になるよ！

どうにか思い出をたたきだして、なぜか頭に思い浮かんできた三年間のダイジェストにさようならを告げておく。もう来んなよ。

さて三年という月日がたった今日。なぜこんな記憶が俺のところへ迷子になって現れたのか？俺を苦しめるため？残念だけどそういうわけではない。

それは目の前にあるものが原因だ。

とりあえず聞いてくれ。実はやっとこさ族長から一人前と認められ遺跡探索への同行許可が出たんだ。

初めてなのでそれなりに緊張する。実際俺は戦闘なんて一切できない魔導師ランクDだしね。

しかし、俺より年下のユーノが自信満々に発掘しているのを見るとヘマをするわけにもいくまい。というわけで頑張った。

うっかり遺跡の壁に右手で触れて粉碎して怒られたり、安置されていた物品にも思わず手が伸びて粉碎して怒鳴られたり。な、結構俺も頑張ってるだろ？

さて初めての探索で発見されたものののだが、最深部に安置されていたのは青い魔力結晶体だった。

つまりはあれだよトソン君。ジュエルシードだよ。

それに付随するように原作の知識を思い出して、黒歴史も思い出したというわけさ。

さすがに感慨深くなった俺が、吸い込まれるように深い青を内に湛えるそれを見つめていると、危険だからとユーノに起こられた。

つうか、あのやろう……遺跡への同行はそっちが先輩だが、年齢的にはこっちのほうが年上なんだぞ。

もう少し年上を敬えと小一時間説教してやりたい。

と思ってたらあいつの乗ってる船が事故ってやんの。

ザマあ。

第一話 「チートエ……………」 (後書き)

まだまだしばらく毎日更新します。
四話からが恋愛応援となります。

第二話 「頼むから、お前帰ってくんな。いやわりとマジで」

ユーノ、ザマあ。

と思っていた自分を殴ってやりたいと、今真剣に思ってる。

何やってんだよ……俺！？　せつかく美少女の海にいけるチャンスだったのに……！

フラグがあ……幼馴染フラグがほしいよおお……っ！！

あ、でも原作介入はするつもりは一切ないよ。キラッ

第二話 「頼むから、お前帰ってくんな。いやわりとマジで」

ユーノの乗る船が落とされて、あいつが責任感マックスで管理外世界にいったという報告が入ったのが昨日。
族長なんかそりゃあもう慌ててさ、いろいろ話し合ったんだけど。
結局、

「若いなあ……………」

の一言でユーノの支援は無くなりました。
これから若さゆえの過ちつてのを経験しておくのもいいだろうってことらしい。さりげなスパルタ教育に軟弱ものの俺が何時さらされるかガクガクブルブルなんだが。

さて、一応ユーノがいなくなったことによる弊害を見てみようか。
実は遺跡発掘という危険な仕事をする一族だからこそ部族内での結びつきが強いことで有名なスクライアー族。
ゆえに将来一族を引っ張っていくとされたユーノの行方不明の知らせは大きなショックを与えた
おもに女の子たちに。

大変だった。

やれ、私はユーノ君のお嫁さんになるって約束したのに……とか、私が付いて行かなかったからだ……とか。

とにかく女の子が泣くせいで家事は滞り、仕方なく慰めることに。

はいはい妄想乙。テーマがついて行っても意味ねーよ、って言いそうになったのはここだけの秘密だ。

一応精神年齢の高い俺は兄貴分としてスクライアの年少組のリーダーぽいのになっている。だから慰める役目は親か俺の見たいなのに回ってきた。まあ仕方ないよな。

そう言えばユーノも俺のことを慕ってくれてたりするんだぜ。ちょっと鼻が高い。ちなみに俺はユーノより三歳年上だ。神様あ……ちゃんと仕事しようよお……

というか、あいつだけ行方不明になったのは男たちからの天罰じゃ。雷だけに。

それにしてもあいつは将来ハーレムでも作るつもりだったのだろうか？

一ヶ月後。

何にもない日常が三十回もすぎると、みんなユーノの名前を忘れていた。

時空管理局から連絡があつてから、ああ、あいつか、と思い出したくらいだ。

何でも管理外世界にいてジュエルシードを探索、回収していたらしい。それを聞くと今までユーノのことを忘れていたはずなのに、やれさすがスクライアの男だなんだとばかり騒ぎ。ほんとこの大人つて調子いいよな。

でも小規模次元振の影響で航路が安定しないせいで帰るのはもっと後になるそうだ。

とりあえず無事でよかった。

二ヶ月後。

ちよつと魔導師ランク上げてくる。ミッドまでいちいち行くのめんどくせー。

〓六ヶ月後。

魔導師ランク取ろうと必死こいてる間にユーノは一度スクライアに帰ってきた。

俺も久しぶりに会いたいと思っていたので残念である。

なーんて思っていたらユーノから連絡がきた。

無限書庫で調べものをしたいから力を貸してくれとかなんとか……

無限書庫？ はっ！ 行くわけないし。

あそこはバカみたいに資料があるくせにぜんぜん整理されて無いせいで、ちよつとした物調べるのにもやたらと苦労することて有名なのだ。そのため利用価値が低く給料も安い。あそこで働いてるやつはよっぽどな物好きか、世捨て人だけだ。

なんて考えていたのに、俺と同年代のやつらは心よくok。

馬鹿め、無限書庫地獄を味わうがいい。

く八ヶ月後。

遺跡発掘の給料を財布にいれ町へ繰り出す。

行きつけのカフェでのコーヒー。最近気になってきた笑顔がかわいいウエイトレス。

これが俺の荒んだ心を癒してくれる。

しかし俺の理想郷の周りがなにやら騒がしい。

何かと思いふと眼を向けたTVではニュースキャスターが鼻息を荒くしてなにやら報道している。

どうやらあの闇の書事件が解決したらしい。
功労者の中にはユーノの名前もあつて

おかわりはどう

ぶつづつううつーーーーーっ!!

気になるあの子の顔面にスプラッシュ。

もうここにはこれない。

く九ヶ月後。

無限書庫に行っていたやつらが帰ってきた。

仕事が終わってから帰ってくるのが遅かったので理由を聞けば観光をしてきたらしい。

よくもまあそんな金があるなあ、もつと将来のためにためろ、そして働けと年長として説教してやろつ。

おいおい、おまいら。いくら無限書庫の仕事が辛くて観光で気分をリフレッシュしたいからって、二週間も観光行ってくんなよ。

えっ？別にそんなに辛くなかった？むしろユーノが一人でやつてくれた？

はっ、どちらにしても働け。そんな簡単な仕事なら給料だって雀の涙みてーなもん……

別にそうじゃない？ 実りもよかった？ 給料 万円っ！？
ユーノがほとんどやったのに！！？ きたねーぞ、半分寄越（ry

第二話 「頼むから、お前帰ってくんないやわりとヌジで」(後書き)

まだまだ毎日続きます。

第三話 「記念パーティー……やべ、やらかした」

……もうすぐ闇の書事件の後始末も終わりユーノが帰ってくるらしい。

歴史に残る事件を解決することに貢献したユーノに皆でお疲れ様会みたいなのをやってやろうって話があがった。

確かにユーノががんばったのは事実だしな。ここは幹事として一肌脱いでやりませんか。

第三話 「記念パーティー……やべ、やらかした」

最後にユーノと直接会ってから半年近い年月が過ぎた。

この時期の子供は成長が早い。二つも事件にかかわっていたんだ。きつとさらに男らしく、素晴らしいイケメンへの道を歩んでいるん

だろう。うらやましい……

ユーノとその協力者を転送ポートに迎えに行っている間、最近幹事の一人として頑張りすぎてリーダーに抜擢された自分は会場と料理の最終確認。

調子に乗って人を集めまくったらスクライア全員の都合がうまくかみ合い、めったに会わないような人も含めた一族全員集合になってしまったのだ。

前にも言ったがスクライアは一族の結びつきが家族並みに強い。そのため、長老のような老人からすればみんな孫みたいな感じで……うん……孫自慢って老後の楽しみだもんね……

でもさ……だからって……管理局のお偉いさんとか呼ぶなよおおおッ！！

おかげで内々でやるはずだったパーティーが一流ホテルでやる羽目になったじゃねーか！！

この金誰が払うんだよ！！　たぶんリーダーの俺だよ！！　くっそっ！！

さて、入り口から騒ぎ声が聞こえる。主賓が来たのだろう。しかしそれにしては男の野太い歓声が大きい気がするが……あ、その人クラッカー配り終えた？よし。準備は完璧だな。

準備が終わったのを見計らったかのように、ロビーの奥から花とどりの集団が来る。とつても目に優しい光景だ。周りの男たちが動揺した理由がよくわかる。

そしてその中心にユーノがいるのもまた脳に情報として送られてきた。

瞬間、俺の体はかつて無い速度で走り出していた。

視覚情報が脳に伝達されるとともに、脳が命令を送るよりも早く俺の手足は動き始めていた。
流れていく景色は白と黒へ、瞳に映し出されるのユーノだけ。

ユーノ……

踏み出す一步一步と共に溢れ出た意志はひとつの形へと収束していく。

一瞬でも早く彼の元へ。

お前ってヤツは……………っ！

久しぶりに会う、一回りも大きくなって帰ってきたあいつへのこの感情を人はなんと表すのだろうか。

あつ、久しぶりー。もしかしてこれって君がやってくれたの？とか声が聞こえるが俺のマルチタスクにそんな言葉の入る隙は無い。なぜならば脳のすべてのメモリを次の行動へ割り振っているからだ。

あと数歩のところで一気に踏み切り、この身を空に躍らせる。
この胸に秘める思いを彼にぶつけるために。
そしてそのまま俺はユーノに

ドロップキックをお見舞いしてやった。

そうだ、きつとこの感情は嫉妬と呼ぶのだろう。

有り余る憎悪を物理的破壊力に変換された蹴りはユーノを吹き飛ばし、壁にめり込ませた。

ユーノは壁にもたれかかりつつ、説明を要求する！と視線に乗せつつこちらを見ていた。

わからんのか、いいだろう。説明してやろうじゃないか。

「いいか！！

お前みたいなモテ男がいるから俺みたいにあぶれた男が生まれるんだ！！

よく聞け！！

俺はお前のようなやつハーレム形成など断じて

認めないッ！！

そんな理不尽な……を最後の言葉に気絶するユーノを見届けて、八つ当たりが完了したのを確認すると、俺はもう一度彼女たちを見る。

見よ。彼女たちのなんと美しいことが。

凜とした佇まいの紫色の髪をした侍。

包容力のある金髪の女性。

厳しい目つきでこつちを睨んでいるけど、ウサギを抱えているので
やっぱりかわいい幼女。

健気にもユーノを心配する心優しい茶髪の女の子。

いきなり攻撃されて怖いのか、茶髪の女の子の後ろに隠れているち
よつと天然入ってそうな金髪の女の子。

車椅子に乗りながらなぜかおなかを抱えている少女
そして犬。

まさに彼女たちは失われた理想郷（コーヒー屋）に変わる新たなエ
デン。

思わず蹴りを入れた俺は悪くない。

ふと視線を感じ後ろをむくと、そこにはお偉いさんの方々が手にク
ラッカーを持って啞然としていた。

客観的に考えてみよう。

主賓 ユーノ 気絶中。

司会者 俺 主賓に蹴りを入れた後、わけのわからんこ
とを口走る。

やっ
ちまっ
たな、
俺。

第三話 「記念パーティー……やべ、やらかした」(後書き)

まだまだ毎日更新。

次の話から恋愛の応援となります。

第四話 「僕の好きな子、本気の気持ち」

主役のいないパーティーだったが、ユーノが連れてきたうるわしの姫たちの登場でかなり盛り上がった。

見れば誰もが美しいというだけの少女と美女の群れは集まったオスたちをハアハア言わせるのに十分な破壊力をしめしていた。俺もその中の一人だったが。

ユーノが医務室で寝ている間こっちは知ったこっちゃねえとばか騒ぎに発展。なかなか楽しい一夜だったといろいろな人に言われてうれしかった。

族長もユーノのことは忘れて、結構俺を褒めてくれた。

うん、いい思い出だ。

とはさすがに言えない。

ユーノの歓迎会は成功したとはいえ、すでにそれは違うパーティーだった。ユーノ親衛隊のみんなには終わった後にフルボッコにされたわ。……鎖骨がつ！

というか俺も結構反省してるんだけどね。今度お詫びにどっか旅行につれて行ってやろうと思ってる。

さてさて、そんなユーノと俺の仲だがそれなりにいいんだ。どれくらいかって？

そりゃあ

恋愛相談されるくらいだよ。

第四話 「僕の好きな子、本気の気持ち」

さて、目の前にはかつてないほどに真剣なユーノ。どれくらいかと言われればスクライアで初めて行われた性教育くらい真剣だ。そこまでの情熱をかけるにふさわしいことなのか、ユーノよ。

「僕が性教育に興味があるような言い方はやめてくれないかな!!」

「えっ、無いの?……それはまずいぞ! みんな……!! 大変だああ! ユーノって実は男にしか」

「わああああああ!! 違うよ……!」

必死で反応するユーノ。

そこまで反応されると怪しいぞ……

「もういいよ。どういっても男色にされちゃうんだろお……!」

珍しく弱気なユーノ。

これは珍しい。

「で、どうしたんだ？」

俺は机に身を乗り出すと、ユーノと視線を合わせて話を聞く体勢をとった。

ここまで弱気になっているのだ。これは本当にユーノが助けを求めているのだろとあたりをつけてわくわくしながら続きを待つ。

ユーノも俺が本気で聞く体勢をとったことに気がついたのだろ。少しの躊躇いをみせるも、結局は話すことにしたようだ。

机のうえで腕を組んで顔を隠しながらもボツボツと話し始めた。

「僕は地球に行っているいろあつたんだ。たくさんの出会いと経験をできた。族長にも言われたけど僕はあの事件で確かに成長したと思う」

俯くユーノの表情は全く見えない。

後悔をしているわけでもない。ならばこの後の話が本番なのだろう。原作知識を知っている俺は詳しく知っているから今のユーノの感情が割と簡単に想像できる。少なくとも話を聞くだけよりはわかるだろう。

「闇の諸事件でも僕は無限図書館で働いて、みんなに褒めてもらって……不満なことなんて一つもないんだ」

不満なことなんて一つもないんだ、ね。

そうなら俺の所へ来てこんな話をしようなんて思わないだろうに。

「そうかい。それでどうしたんだよ」

ギリリと歯を噛み締める音が聞こえた。
思わずビクリとしてしまう。

それはユーノの気配に怒りを感じたからだ。

「僕は……どうしようもなく自分が憎い。僕は結局のところあの二つの事件で何もしてないんだ。みんなは僕によくやったっていうけれど………本当に頑張ったのは僕じゃない。傷つきながらも前に進んでいたのは僕じゃないんだ」

三年という月日のなかで一度も感じたことのない、背筋が冷たくなるほどの殺意。

それも 自分へ向けた純粋な殺意。

「あのとき。僕が助けを求めなければ……もっと周りの人に助けを求めてから回収に向かえば 　　あの子を巻き込むことなんてなかったんだ」

初めて俺は殺意というものを肌で感じた。
今まで命を削るような発掘の現場にスクライアの一人としていたが、ユーノのような殺意を感じたことはない。

「なにより僕が許せないのは 　　巻き込んだ僕が彼女をどうしようもなく好きになったことなんだ……！」

つまりはそういうこと。

魔法という本来ならばあの亜麻色の髪の少女が手に入れるはずのない力を与えたことに。あの才能ゆえにこれから経験していくであろう血と殺意の世界に巻き込んだことに。それ以上に巻き込んだ自分が彼女、高町なのはを好きと誤ってしまっていることが 　　許せないのだ。

「僕はどうすればいいの……？　僕はどうすればいいのかな……？」

一転し弱々しい声が届く。

鼓膜を震わせていたフォルテッシモは消え去り、セミピアノへ。

「……………なあ、ユーノはどうしたいのかわからないんだろ？」

「……………うん」

正直に言おう。

俺は恋愛なんてものをしたことがない。

だがそれでも今のユーノを放っておくことはできない。できるわけがないんだ。

「じゃあさ、考えてみてくれよ」

俺が思っていた以上に彼は成長して帰ってきた。

俺の弟分がこれほど大きな奴になってくるとは……………こうなった以上、俺は一肌脱いでやるしかないだろう。だって俺は
んだから。　　　　　兄貴分な

「ユーノはあの子に会えなくなってもいいのか？」

うずくまったままかすかに頭をふるった。

「あの子のそばにいたいと思わないのか？」

「……………傍に……………いたいさ……………」

絞り出した声は俺まで届かないほど小さかった。

チクタクと音をならす時計の音にも負けてしまうような音。

「お前は……諦めるのか、あの子の笑顔を見るのを」

「そんなこと、できるわけ……………」

笑顔をみることができない。

それだけの言葉でユーノは顔を上げた。その瞳には涙が溜まっていた。

「できるわけないだろ……………っ!!」

俺を見据える強い瞳。

その目の奥にはぐつぐつと独占欲が渦巻いていた。これまでずっと必死で押さえていたのだろう。俺から諭されることで抑えたかったのだろう。

でもそのリミッターはもう外れた。もう彼は止まらない。

「僕は なのはのことが好きなんだ!」

決壊したダムからあふれる水のように、もう彼はそれを抑えられないだろう。

でもそれでいい。それでいいんだよ、ユーノ。

「そうか。なら 突っ走れよ」

それが初恋の味なんだよ。

だから我慢なんてなくていい。初恋はいつだって実りにくいんだから。精一杯に背を伸ばさなきゃ実るだけの日は当たらない。我慢してたら絶対に伸びなんかしないんだ。

「巻き込んだとか、危険だとか、そんなちんけな理由はいらねえん

だ。お前がなのはって奴が好きならそれでいいじゃんか」
「ソーイチ……………」

そんな呆然とした顔をするなよ。

俺は兄貴だぞ？ 弟を鼓舞するのが仕事なのさ。

ユーノが何かを耐えるように俯いたのを見て、俺はゆっくりと立ち上がりドアに手をかけた。

「なに、周りが何と言おうと俺は味方さ。だから、安心してそいつにアタックして来い」

開いたドアの向こうは少し眩しい。

「そうだね。……………」ありがとう」

ユーノがごしごしと服で顔をぬぐう音がした。

俺はその音を聞かなかったふりをしてそっと部屋を出ていった。

第四話 「僕の好きな子、本気の気持ち」(後書き)

ようやく始まった物語をこれからもよろしくお願いします。

第五話 「いやいや、だから俺恋愛したことないって」

さてさて、ユーノの恋愛相談から早三日。

あれから俺は特に何でもない日常を送っていた。

だって特にやることもないし。

そう言えば最近デバイスマスターの資格って持つてると便利だって聞いたんだけどほんと？

第五話 「いやいや、だから俺恋愛したことないって」

「頼みがあるんだ!!!」

スクライアの部族のみんなが出張している時に使うテントの中で、俺はユーノに押し倒されていた。

え？ なにこの超展開。

「まてまて！ 俺にそんな趣味は無いぞ!!」

「何のこと言ってるんだ!? 僕は純粹に好きだから聞きに來てるんだ!!」

「もつとまずいわばけえええええ!!」

と肉体言語での話し合いが行われた結果、ユーノがなのはともつと仲良くなるために協力してくれということだった。

なるほどもつと早くにそれを言いなさい。

まったく恋は盲目とはよく言ったもんだ。

さて、どうするか。

目の前で孔明の策を待っているユーノ。

しかし悪いが俺はチエリーだ。肉体的にも恋愛的にも。

はつきり言って中学生レベルでも経験したことのない、もはやチエリーブロッサム。精神年齢的には枯れるのは早いかもしれないが、もうすぐ散ってしまうかもしれない。

とにかく何を言えいいのかさっぱりだよ。 c hのみんなオラに力をっ!

……というかまずは相談するより突っ走ってみろよ。もしかしたら

OKもらえるかもしれないぞ？

「でも……もし嫌われたら……」

なるほど。……この意気地なしめ！！！！

そんな気概で人の心をわしづかみにできるものか！！

「……………！！！！」

といいつつ俺も告白した後に断られるのが怖くて告白しなかったただけだね。

人は人、俺は俺。実に便利な言葉とは思わない？

「が、いきなり告白をしても怖がられるかもしれない」

とりあえず助け船を出すことにした。

決して俺の中学時代を思い出して悲しくなったわけではない。純粹に弟分に俺と同じミスをしないでほしいだけさ。

「というわけでこれをやろう」

俺が懐から出したのは二枚のチケット。

最近話題の遊園地のチケットだ。ミッドチルダに新しくできたそれなりに有名な遊園地で、なんでもジェットコースターが無くていろいろと女の子がメインで楽しめる場所が多いらしい。これならのはも楽しめるんじゃないだろうか。

「こ、これを……僕に？」

実は最近価値が上がってきてなかなか手に入らないチケットだが、

俺は魔導師試験の時に仲良くなった従業員にもらったので別に懐は痛くもない。

どうぞどうぞ。二人で楽しんできな。

「もちろん」

「あ、ありがとう！」

ユーノは話のネタができたことを喜び俺のテントから飛び出していった。

うん。君が喜んでもらって俺もうれしい。さて、そろそろやるか。

腕を掲げて、指を高らかに鳴らす。

「おい、聞いたか。ユーノが今度デートに行くそうだぞ？」

背後に現れた影にいう。

彼らが出す物音は何一つなく、かすかに口元から、リア充爆発しろ、と聞こえるだけであった。

「どうするんだ？」

そう、彼らは将来有望なスクライアの女の子をユーノに独り占めされて割を食った男たち。いつだって気のある女の子を励ましたりしていた猛者たちだ。

好きな女の子に、ユーノ君って何が好きなのかな？ と聞かれるたびに が好きだってこないだ言ってたよ、と言えるだけの精神力を持っている。

俺が世界に誇れる仲間たち。

そんな彼らの目が据わっている。紅くなっている。胸の仲に渦巻くのはひとしく 嫉妬。

おもに、あの野郎スクライアでいい思いするだけでなく、事件の先でもいい思いしやがって……ゆるさねえ。これに尽きた。つまり

「ああ、言わなくても分かっているさ。もちろん レッツ、スニーキングだろ？」

ここにユーノの恋愛の失敗を暴露し隊が結成された。

第五話 「いやいや、だから俺恋愛したことないって」(後書き)

もうちっとだけ毎日投稿つづくんじゃよ

第六話 「……ヘタレ」

「明日……だな」

俺の隣にいた幼馴染 コール・スクライアがつぶやいた。

こいつは一応俺と同じ年の幼馴染（男）でなかなかに乗りのいい奴だ。俺はもっぱらこいつとつるむことが多い。

で、今回もこいつとつることにした。

俺たちの弟分が本気の恋愛をしていると言っことで、その願い叶えてやろうじゃないか。ということ……

なのはとユーノのデートが開催される今日。それについて二人のデートを面白おかしくしてやろうじゃないか。

第六話 「……ヘタレ」

雄とはいったい何だろうな。

雌と反対の生き物とでもいうのか？

じゃあ何が違うんだよ。それはな、遣伝子に刻まれた闘争本能と自分のものを奪わせまいとする独占欲さ。

いつだって優秀な雄は優秀な女を手に入れてきた。

もちろん、優秀な生き物同士での駆け引きって奴もあるさ。

でもな、駆け引き云々の前にまずは前に進まなきゃ、手に入れるためにレースにすら出馬できないのさ。

おっと、いきなり変なこと話して悪いな。

つまり俺が言いたいのは

「ユーノはヘタレ」

目の前で机に突っ伏している男の哀れな姿を雄と認めるわけにはいかないよ。ということだ。

「だって……なのはをいざ誘おうとすると、緊張しちゃって……」

……
「ヘタレは帰れ」

コールがつぶやいた。

その独特の赤色と金色が混じった髪の毛がさらさらと流れる。

それなりのイケメンだが、ユーノには勝てずに部族のなかで今まで一度も彼女ができたことがない。

そんなこいつはユーノの初デートを楽しみにしていたのだ。みんなで結成した団体で撮影班を担当していたのに……ユーノがヘタレすぎて誘えなかった所為で計画はオジャンさ。

「だって……」

まったく。こんなウジウジしている奴のどこがいいんだ。

コールの呟きにはまったくもって同意だ。

といってもあの部族のなかだと保護欲を誘うらしい。

イケメンならなんでもいいのか。

「はいはい、結局チケットは期限切れで使えないと。お前あれ一カ月は期限が残ってただろ？ なにやってたんだよ」

「……まず誘おうと決心するのに三週間かった」

あ、コールが吹いた。

腹を押さえておかしそうにしている。

「ちょ、おまつ、それはない」

笑いすぎてお腹が痛いそうだ。

俺は笑うんじゃなくて呆れたけどな……弟分ながら悲しすぎるぞ。

三週間も使わないと決心できないとか……………お前は小学生か！
……あ、そういえば九歳だったよね。

「それじゃあ、残りの一週間はどうしたんだよ」

「……………会いに行くのを決心してたら期限が切れてた」

もう我慢できないとばかりにコールがげらげらと笑い始める。

ユーノは机に突っ伏したままだ。自分で話しておいて情けなくて顔
があげられないのだろう。

「はあ、コール。本人は必死なんだ。あんまり笑ってやるな。とり
あえず……………ユーノ！」

笑われて余計に不貞腐れていたユーノへ声を張り上げる。

「は、はいっ！！」

珍しく俺が声をあげたことが怖かったのか、直立不動で待つ。

「いいか、男なら引いちやいけない時が必ずある！ どうだ！？
今の前は引いてもいいと思ってるのか！？」

「いいえ！」

いいかユーノよ。

所詮この世は弱肉強食の時代だが、早めに行動を起こしておけば弱
者も強者に勝てるんだぜ？

「ならばお前はどつすればいい！？」

イケメンⅡ強者であるユーノが初期の段階で動き出せば幼馴染フラ

グも手伝って落とせない相手なんかいない。
それが本気なら当然だろう。

「僕は……僕は………行ってきます!!」

そうだ。それでいい。

コールと二人で外へと走り出したユーノを見送る。

……男になってみせろよ。

「行っちゃったな……………」

「ああ……………」

コールと弟の成功を祝って、カンッとグラスをぶつける。

さて、白い女神が誰に微笑むのか………できることならあのヘタレな
フェレットにほえんでくれればいいけど。そして初デート邪魔さ
せてください。こっちはこっちで面白おかしく楽しむから。

と二人で黄昏ていた、まさにその時　　っ！

「ソーイチイ、なんて誘えばいいかわかんないよお…………っ！」

走り去ったはずのユーノが戻ってきた……………情けない理由と共に。

今日の俺たちの感想。

ユーノがヘタレすぎて逆に応援したくなった。

第六話 「……ヘタレ」(後書き)

一話あたりが短いのは仕様です
あと五日は毎日投稿です。

第七話 「接触、そいつはあくまで女の子のつもりらしい」

兄貴。

そう呼ばれたことはない。

だってお兄ちゃんのほうが萌えるから。

年下の人々にはそう呼ばせてる。これがもっと大きくなったら兄貴と呼ばれることもやぶさかではない。

だがこんなふくらとしてかわいい子供たちに、「あああにきいいい！」なんて呼ばれたくはないのだ。

そんなロマンをいつだって見据えている俺だが、実は自分のことだと臆病な奴だと自覚している。

逆に人のことだとガンガンいくぜが基本形。

というわけで、俺は今海鳴町に来ています。

第七話 「接触、そいつはあくまで女の子のつもりらしい」

わざわざ貴重な休暇を潰して俺が管理外世界に来ている理由はただ一つ。

ユーノの恋路を応援するためのあれこれをするためさ。

あの後、とんでもないヘタレを見せたユーノをコールと二人で怒りつつ、これはまずいと作戦会議。

このままではユーノは本命と結ばれずに、いつか肉食系に捕まってしまう。

「さすがにそれはかわいそう過ぎる」

「いや、尻に敷かれているユーノはなんだかんだで幸せそうだからいいかな」

「応援してくれんじゃなかったのおおおおおお!？」

という会話の後に俺たちが全力で応援することになった。

ただしユーノ君。かわいい子みつけたら僕たちに紹介するんだよね？

少し前のことを思い出しながら、俺はどこか懐かしい街並みを見ていた。

すでに四年もの歳月をスクライアで暮らしていたが、やはりこっちの方が故郷って気がする。こればかりは魂の奥にでも刻まれているのかもしれない。

別に転生する前の世界に帰りたいと思うわけではない。確かにチートは与えられなかったが、それでもこっちの人生は面白い。

普通はチートなんてものは無いのだ。つまり俺は魔法のある世界に來た普通の人間ということだ。そっちの方が燃えるだろう？ 目的は無いけど。

別に原作に介入する気もない。

というか魔導師ランクCの俺が首を突っ込んだら間違いなく死ぬ。人差し指には世界最高の魔力があっても、実際に自分が扱えるのはリンカーコアに入ってる分だけなんだから。こればかりはどうしようもない。

とはいえ何もしないのもつまらない。
だから俺はユーノの恋を応援するわけだ。

がんばれ若人。君の望みはもうすぐ叶う。叶わせてみようじゃないか。このキューピッド総一が。

ふらふらともらった地図を見ながら歩いていると、とうとう目的地にたどり着いた。

まだ冬真っ盛りで凍える体を両腕で温めながら、喫茶店の中へ足を踏み入れた。

カラン、カラン。

耳に痛くない音が鳴る。

目の前でカップを拭いていた男が顔を上げた。
精悍な顔つきをしたその姿には押されてしまいそうな雰囲気と、信
頼できるだけの何かがにじみ出ていた。

「いらっしやいませ」

原作の通りならば土郎さんであろう人が挨拶をする。

店員のマニュアルではない挨拶もこの人がやるとすごい心に響く
…………… こういうので漢の格が出るんだなあ。

俺もこういう風になりたいよ。

店内を見渡し、ちょうど奥のボックス席が空いているの見てちょう
どいいと口元を釣り上げる。

「あの……………」

それを見たらすぐさま行動。
俺は土郎さんに話しかける。

「どうしました？」

営業とわかっていてもそのスマイルウにやられそうだ。

ふざけた思考をマルチタスクで処理しつつ、今回来た目的を話した。

自分はスクライアの人間で、弟分であるユーノがお世話になりました。
た。

今回特にお世話になったという高町なのはという少女へ直接お礼を

言いたくてここへ来た。

などなど、簡単にだが士郎さんに話すと、

「総一君は真面目なんだな」

と言ってもらえた。

字面だけ見ると馬鹿にされているように感じるが、なかなかにうれしくて、ちよと顔が赤くなる。

「い、いえ」

というか……なぜユーノの恋を応援しに来て男と俺はラブコメってるんだろっ。

ヤバイ。なんかヤバイぞ。

「奥の席でなのはが帰ってくるまで待つてもらってもいいかな？」

ええ、もちろんですとも。

なんか出来上がった不思議空間から脱出をするために、足を向けるが……

「総一君、これはサービスさ。家の自慢のコーヒーなんだ。あとで感想くれるかな？」

とさりげなくコーヒーを差し出してくれた。

士郎さん……掘れそうです（惚れそうです）。

「うめえ……」

前世でもなんとなく飲まなかったコーヒー。
苦いからという理由でさせていた俺がバカらしい。本物はここまで
うまいのか。

軽くトリップしていた。

時計を見れば一時間たっていた。

なのははまだかなあ。

と思っていたら、来た。

亜麻色の髪を二つにまとめて、ひよこひよこ揺れている彼女。そ
の表情は何が楽しいのか、ずっと笑顔だった。

士郎さんと二三言話すと俺の方を向く。

軽く手を振っておいた。

マジでかわいい。

さつき桃子さんを見たけれど、すごくきれいな人だったよ。

ん？……もしかしてユーノは桃子さんみたいになるとわかってい
からなのはに目をつけたのか？ ……やるじゃないかユーノ。正直
見直したよ。

「えっと、ユーノ君のお兄さんですか？」

ゆかりんヴォイス！

俺の重要な内臓器官の一つをハートブレイク。実はファンでした。

「うん。この前までユーノを世話してくれた高町さんだよね？ こ
の前は挨拶もできなくてごめんなさい」

「ええ！ 別に頭を下げなくても大丈夫です！ それに敬語じゃな
くても……」

「そう？　じゃあ、これからはそうするよ。できるなら高町さんもそうしてほしいな？」

「えっと……うん」

初対面の挨拶はこれで終わり。

途中でなのはと呼んでほしい、と言われたけど恐れ多くて名前なんて呼べません。名前で呼ぶ権利よりも、むしろあなたのサインがほしいです。

『全力全開！　星すら砕く　高町なのは！』

……書いてくれたら十年後くらいに高値で売れそうな予感。

とりあえずそれはユーノと付き合い始めたらしよう。普通はそんなこと書いてくれんだろうし。

それなりに身近なことを話して十分ほどたったところに俺は本題を切り出した。

「でだ。こっちとしてはユーノがお世話になったからね。お礼がしたいんだ」

「お礼なんて、そんな」

「いいから。こっちとしてもいろいろ考えたんだよ？　かつこいい魔導師は黙って受け取るもんさ」

俺はなのはの手にチケットを握らせた。

前回のものと同じもの。今度は俺が自腹切って買ってきた。

自分でもちよつと強引だと思うけど、これくらいしなきゃ受け取ってくれなそうだったからなあ。

そして机の上には追加でスクライアのほうでよく作っているお菓子なんかを大量に。

「そこはなかなか評判がいいからね。友達を誘ってみたらどうだい？ こっちのお菓子の方は家族と食べてみて。結構おいしいから」
「えっと。お言葉に甘えて」

なのははぎこちないが、小さくうなずいてくれた。
まだまだこの時は悪魔の片鱗しか見えてないとき。まだまだ女の子だな。

「そうそう。実はユーノなんだけど……」
「ユーノ君がどうかしたんですか？」

結構いい食いつき。

お、これは目があるんじゃないかい、ユーノ君？

「あいつつては部族のほうでも、高町さんにどうやってお礼をすればいいかわかんないって悩んでるみたいなんだ。でこっからが俺の相談。そのチケットであいつのこと誘ってやってくれないか？」

「え、あの」

ちよつと話の展開が変わって混乱している模様。

「今回来たのは純粹にお礼って意味もあるけど、弟分のユーノの悩みも解決したかったんだよ。だから二つのお礼を持ってきたのさ」
「……………」
「たぶんあいつのことだから、誘われればOKって言って、頑張つて高町さんをエスコートしてくれるはずさ」

ちよつと啞然としていたけれど、なのははクスリと笑って、そう言うことなら、と快く俺の頼みを引き受けてくれた。
で、その後もユーノのことを少し話して俺は帰ることに。

士郎さんに感想を言って、いくつかのシュークリームを買ってスクライアの方に帰ったのだった。

……計画通り。

なのはとユーノの遊園地デートはついて行かせてもらっからな。赤面物の動画頼むぜユーノ？
あとでようつべにアップしちやる。

第七話 「接触、そいつはあくまで女の子のつもりらしい」(後書き)

所要により遅れ、24日はもう一回投稿します。

第八話 「キヤー、リリカルまじかる超怖い！」

さてさて、やってきたよ。

とうとうやってきたよ。ユーノという無自覚たらしに正義の鉄槌をくれてやる日が。

みるよ、隣に座ってるコールその他の男の目を。

血走って目と、手に持った小道具一同。そこまでデートをするユーノが憎いのかい？

これこれ、包丁はまだしまっておきなさい。

第八話 「キヤー、リリカルまじかる超怖い！」

真夏日の管理世界のある有名なアミューズメントパークの入場ゲートの前に、白いワンピースを着たかわいらしい少女が立っていた。何度か手にした時計に目を向けているのを見れば、彼女は待ち人を待っているのだろう。

彼女の時計が見せるのは9：05分。約束の時間から5分ばかり過ぎていた。

どうしたんだろう……？

もしかしたら何か事故にあってしまったのかもしれない。まずそう考えて相手を心配できる人間はなかない。そんな聖女のようなのはを待たせている罪人かというと……

「いいから行け！！ 行くだユーノ！！」

ゲートから見えない場所でぐずぐずとうだっていた。

「こ、この格好で大丈夫かな！？」

「お前それ聞くの何度目だよ！ いいから行け！ そして真っ白の灰になって来いって！」

どうにも動かないユーノを必死に待ち合わせ場所まで引っ張ろうとしている。

本来ならば総一は後ろから隠れて全体の指揮をとりつつユーノの初デート（向こうはそう思っていない）を観察して悦に浸る予定だった

のに、ここでもユーノがヘタレた所為で総一がこうして引っ張っているのだ。

「ぐぬううううー!!」

「まってよ、まだ心の準備が!」

さりげなくユーノは身体強化魔法を使って総一に対抗しているので動かすことができない。

優秀なくせにとんでもないヘタレっぷりだった。

「おいおい! 早くしないとあの子が帰っちまうぞ!」

そんな二人の様子と時間に顔を青くしたコールも出てくる。

「あつ、コール! ちょうどいいところに来た! この際ばれてもいいから引っ張っていくぞ!」

「OK任せろ!」

撮影班の責任者であるコールはなのはとユーノが待ち合わせした後、のちよつと目線があつて紅くなるシチュエーションを期待して隠れていたのだ。

「ええ!? なんでコールがいるの とうか担がないで!」

ユーノのことは完全に無視。

まずコールがバインドでユーノを縛り上げると二人で肩に担ぎあげて待ち合わせの場所まで運ぶ。

周りの目が痛いが無関係ない。ここまで二人を焦らしたユーノが悪いのだ。

「こんにちは、お届け者ですー！ー！！」

どさっ、と適当になのはもとに放り投げる。

え、ええ！？　といい感じで混乱しているが二人はそれにかまわずそつと待ち合わせ場所から離れていった。

なのはたちから見えない場所に移る前に、ユーノにはグツと指を立てて、頑張れとエールを送るのを忘れない。なぜか朝日で齒がキラッと光った気がする。

呆然とするのは。

何が何だか全くわかっていない。

いや、わかつたら逆に怖いが、とりあえず思考を放棄したようだ。

ユーノはコールがバインドを解くのを忘れたようでバツバツとまな板の上の鯉を地でやってる。

……とてもデートが始まる雰囲気ではなかった。

ミッションコンプリート！

いやあ、いい汗かいた。

コールはあの後すぐに撮影班の所へ戻って行ったので俺は今一人で双眼鏡を片手に二人を見ていた。

じたばたと暴れるユーノに気がついたなのはがコールのかけたバインドを破壊するのが見える。

自然とバインドに触れるために近くなる顔。二人とも顔が真っ赤だ。うん、なかなかいい雰囲気じゃない？

どこからか、あれは単純に周りに注目されて恥ずかしがっているだけだ！ と聞こえたが聞こえないふりをしておく。そんな真実は聞きたくないのだよ、シャーロック。ようは二人の面白い、もとい初々しい写真が取れば理由はどうでもいいのさ！

さあさあ、二人で仲良く遊園地に入ってこいよ。

と念じていたのだが、立ち上がったユーノが今度ほとんどもない行動を実行しやがった。

「ちっ！ あのバカたれが！」

隠れていた茂みから飛び出るとすぐさまユーノの襟首を掴む。こともあるうちにユーノはなのはの前から逃げ出そうとしたのだ。

「お前何やってんだよ！ デートだろ！？ さっさとエスコートしてこいや！」

「無理だよ！？ というかこんな恥ずかしい状況にしておいてよくそんなセリフが言えるよね！？」

何言っただ、恥ずかしがってたらいつまでたってもバカップルの

仲間入りはできないぞ？

「はいはい、ヘタレのユーノはあつちですよ」

すでに聞く耳持たん。

俺はユーノを引っ張ってなのはがいる場所へと連れて行つた。

「いや、家のユーノがちょっと錯乱したみたいで……悪いね」

なのははいきなりの登場にも驚いていたが、どうやら俺たちはそういうものだと思つたらしい。

「あ、こんにちは！」

普通に挨拶してきた。なかなか精神的に適応力の高い子供らしい。

「あ、こちらこそ」

ユーノが後ろで、なんで僕より挨拶するのが早いのか!? とわめいていた。

「あ、とりあえず今日はユーノを送り届けようと思つてただけだから……これで帰るね?」

なんかほのぼのしそうな雰囲気になつていたらコールから、お前邪魔、と念話が届いた。いい殺気が乗っていた。これはヤバイ。

即座に危険域から脱出しようと会話を切り上げ、なのはへ手を振りながら振り返って走り出そうとする。

が ガシツといい音を出して俺の手が掴まれた。ちなみに

つかんだのはユーノです。

（まって！ 僕を置いていかないで！）

マジで泣きそうな目をしたユーノが俺を見る。

（男なら一人で女の一匹や二匹釣り上げて見せろよ！）

さすがにこれ以上いたら二人の関係のためにもならない。そろそろユーノに男を見せてもらわないと、この後の予定が狂うし、ユーノが本当にヘタレになってしまう。

が、ユーノも必死なのか俺の手を話す様子はない。自然と強い視線が俺とユーノの間で火花を散らす。

……なぜか、隣にいた女の人の鼻息が荒くなってた。どうしたんだろ……いや深くは考えまい。

しかしどうしたもんかな。このままだとマジでユーノが独り立ちできないじゃないか。

「あの！ 一緒に回りませんか？」

悩んでいた俺にかけられた声。

鈴を鳴らしたよな音の羅列は俺の鼓膜にしっかりと届いた。

「あ、はい」

なぜか彼女の声に逆らう気がしない。勝手に俺の体が首を縦に振っていた。

……まずい……………！

頷いてしまいなのはがよかったあ、と声を出していたがそんなものが目に入らなくなるくらい俺の命がヤバかった。背後から伝わる怨嗟の視線と念話。

なんで計画をぶっ壊した上に、お前だけ美少女と遊んでんの？

ビシビシと殺気が感じられた。
やばい。これは詰む気がする。

……………こうなったら……………！！！！

手元の時計を見て一言。

「しまった！ アクション仮面が始まっちゃうー！！」

ダッシュで逃げた。

「……………え？」

危なかったぜ。

あのまま行けば俺は仲間に制裁を受けていただろう。あの瞬間、俺の性格があほだとなのはにインプットされてしまっただろうが、フルボッコになるよりはまだましか。

というか12歳の体だから許されるいいわけだったと思う。精神年齢は結構上だが、あれくらいしか逃げる方法が思い浮かばなかったんだ。許してくれ。

で、あの子の二人だが、何だかんだで雰囲気を持ち直して二人でいろいろと回っているようだ。

最初に水のアトラクションに行つてやけに火薬が使われたショーを見てテンションを上げると、遊園地の目玉のショーも続けて始まりなかなか楽しそうだ。

実際何人かのエージェントたちもその魔性の魅力に取りつかれて持ち場を離れてしまった奴も出てくるくらい。

それにしてもなぜかユーノがさっきからなのはに對してずっと敬語なんだが。そこまで緊張しなくていいだろうに。

なお撮影班の報告ではなかなかいい写真も取れているそうだ。
さて、そろそろ俺たちも何か仕掛けますか。

俺はすぐに更衣室を抑えると背後のスクライアの仲間達に着替えを指示。同時に幻影魔法の得意な仲間をお願いをして全員の顔を変えてユーノにばれないようにする。

さあ、L e t s S h o w T i m e ! !

ずんずんと仲睦まじく歩く二人めがけて俺たちは歩く。ちよつと柄のわるいお兄ちゃんみたいに股を広げて歩く。人相も悪そうに設定してあるので周りの人がそそくさと道を開けてくれる。うむ、楽だ。俺たちの方向へと歩いてくる二人は俺たちに気がつかない。

ユーノがかいがいしく世話をしているが、なのは少し疲れ気味らしい。

そんなところへ追い打ちをかけるようで多少気分はよくないが、これもユーノの恋愛成就のため。我慢してもらうぞ。

「きゃ！」

俺を先頭に歩いていた集団がわざとなのはたちにぶつかった。

「い、ごめんなさい！」

ユーノがすぐに謝ったが、ぶっちゃけそっちは何も悪くない。だが処世術をしってるユーノはすぐさまここで謝っていた方が楽だと悟ったのだろう。

すぐにこの場を離れようとする。

いやいや、違うだろ。そこは男を見せてきちつと言うべきだよユーノ君。まあ普通は言わないけど。

もうわかっただろう。これは俺たちが考えた『ユーノ君かつこいい』計画なのだ。

わざと不良役をした俺たちがユーノの男を見せるのに一役買おうというわけだ。

「ああ〜ん。おいおい、その姉ちゃんはやまんねえーのかよ」

後ろの取り巻き役の男がなのはに声をかけた。

なのはは俯いたまま何も答えない。ヤバい罪悪感が……っ！

「……おい、聞いてんのか！」

が後ろの男は役になりきっているのか、強引になのはの肩に手を乗せるとグイッと引つ張った。

ふっと上がる視線。

それを見た瞬間

「じゃま」

空気が凍った。

青い瞳の中に光を見出すことができず、俺はそこに深海の底を見た。漏れ出した空気は歴戦の戦士。転生をし死を感じたことのある俺がもう一度死んだと思えるほどの殺気。

「あ、ああ……すまねえ」

気がつけばいちゃもんをつけていた男が謝っていた。知らず後ろへと下がる俺たち。

なのははそんな俺たちには一べつたりともくれずに歩いていく。

「行こう。ユーノ君」

容易く俺たちの横を通り過ぎる。もうすでに俺たちに意識を向けることすら無駄とでもいうように。

結局、何もできない俺たちを置いて二人は遊園地の奥へと姿を隠していったのだった。

「……………はああ……………」

彼女の存在を感じれなくなると、不良役の俺たちは全員息を吐いた。

「……………兄貴イ、話が違いますよお……………」

声をかける役だったスクライアの仲間は半泣きだった。

「俺……………殺されるかと思った」

コールは直接的な言葉で自分の状況を言って茶化そうとするが、みんなマジでそう思っていただけに笑えなかった。

「馬に蹴られて死ぬってこういうことをいってたんですねえ」

それとは少し違う気がするけど……………
それにしてもなのははさん、本気で切れてたなあ。そんなにユーノと

の時間をつぶされたのが嫌だったのか。
なんだ。ユーノにはちゃんと目があるじゃないか。

「そうですよねえ。いいなあユーノはあんな女の子を捕まえられて」

その後輩の一人がばやくが、誰も反応しようとはしない。

正直にいつてさっきの出来事だけで疲れ切っていたからだ。

何だかんだでとんでもなく疲れた俺たちはこのままユーノの観察をする気も出ず、撤収することを決めたのだった。

第八話 「キヤー、リリカルまじかる超怖い！」（後書き）

一話あたり千文字の予定が最近三千文字前後になっているんだが……

まあ、いつか。

誤字報告、作品に対する感想ありがとうございます。

第九話 「どっかにでかけない？」

俺たちがしたおちやめなはずらをユーノは気にいってくれなかったらしい。

もう二度としないでくれっ！ と三時間以上にわたる説得をされてしまった。確かに最後のはやりすぎたなあ、と想っている。もう二度とするまい……正確には仲間のみんなから、もうなのはにちよっかいをだすのはやめようと言われているだけなんだが。どんだけ怖がられてるんだよ。

とはいえ個人的にユーノのは鉄板だと思うんだ。兄貴分としても応援するといった以上、きつかけくらいは作ったやりたい。奥手なユーノじゃきつかけすら作れそうにないからな。

じゃあどうするか。そんなん決まってるだろ。

特攻さ。

第九話 「どっかにでかけない？」

「やつほー！。久しぶり……になるかな？」

俺は管理局の本局のカフェテリアでなのはへ話しかけた。

「あ、お久しぶりです。総一さん」

ぺこつと頭を下げるなのは。特徴的になおさが揺れる。

「本局にいるなんて珍しいですね。今日はどんな用事だったんですか？」

「今日？ 今日には遺跡発掘についての定期報告会みたいなやつ。そろそろ俺もでて経験して尾けた族長に追い出されちゃった」

遺跡発掘の報告。今回の発掘では管理局の土地で許可をもらって発掘しているの、それなりに大事なイベントだ。俺たちには本局へ発掘の報告義務なんかがあるわけで……今回はそこまで大きな進展がなかったからこそ、プレゼンターの俺のプレゼン力が試されて余計に肩がこったよ。

ちよつと絵柄的に駄目な気がしたが、なのはに愚痴を言っていると大変ですね、と頷いてくれた。

「いいよなあ、武装隊はそういうのと無縁で……」

ちよつと卑屈な目で見てみた。

「まあ、武装隊は怪我するかも知れないことがたくさんありますから」

「そう言われるとそうなんだけどね」

俺は肩をすくめる。それを見たなのは小さく笑った。

なのはは本局みたいな働く場所では公私混合しない。俺からすれば見事なくらいに分けている。もっとも個人部屋みたいな区切られたプライベートスペースでは別らしいが。これが九歳だというのはだから恐れ入る。まだミッドの言葉を覚え始めて半年しかないのに完全に発音まで完璧だし。同じ元日本人の俺からすればただだけスペースクいいんだよと言いたい。

知ってるか？ 魔力弾一発を自力生成できない魔導師だって今は普通にいるんだぜ。デバイスありがたいです。

「それに私、教導隊に入りたいんです……」

「教導隊？ なんだあんなとこに……そりゃああそこは魔導師の花形部隊だけどさ。……ああでもなんか一回想像してみると高町はそこしかないっ！ って思えてきたかも」

教導隊というのはいろいろ広範囲なことをやっているが、簡単に言えば……平時に戦争の英雄を使う場所つと言った感じが。英雄たちの技術を腐らせないために、また後世へと残していくために教導隊は作られているのだ。

そのためあの部隊には一騎当千の猛者ぞろい。間違いなく部隊対抗で戦えばあそこがぶっちぎりで勝つだろう。実際にはそんなことはないんだけどな。教導隊というのはその性質上出向が多いからあんまり集まらないし、部隊で動くというのはあんまりない。一人であ

「つちつこつちに逝ってしまうから、部隊と言うよりも役職の名前と言った感じの方がしっくりくる。」

「総一さんもそう思います?」

「本当はもつといろいろあるのだが、一般人の俺からすればそんなもの。」

「確かに魔法が好きで、才能をさらに磨きあげているのはにはあそこがいいのかもしれない。まあ素人判断だが。」

「おお。そう思ってるよ。なのはならいい先生になりそうだしな」

「なのはが楽しそうに魔法を教えている姿が一番似合っている気がするのは本当だ。」

「と、ある程度話してから気がついた。」

「……なんでなのはここにいるの? 学校はどうしたよ。」

「実は……さぼっちゃった」

「テヘッと頭に手を当てるなのは。」

「ちよつとかわいいじゃないか。しかし俺は騙されんぞ。」

「おいおい、いいのかよそれ。勉強わかんなくなっても知らないぞ?」

「あ、それは大丈夫です。友達がノート取ってくれてるんで」

「ノートをとればわかるってものでもあるまいに。それはさすがに勉強を舐めてるぞ高町。」

「あのなあ……」

一応前世では塾の講師なんてものをしていた俺としては、そんななのは態度は見過ごせない。

「いいか、月並みな言葉かもしれないけど、勉強は真面目にやっておいた方がいいぞ？ やっぱり勉強できないと後で社会にでてから苦労するし……」

9歳ということは分数の計算を習ったりするところだろう。さすがに分数の計算ができないSランク魔導師というのは恥ずかしいだろ。

「でも私魔導師ですし」

学校の勉強なんて簡単ですよ、と暗に言っていた。

確かに魔導師として勉強をしているのははおそらくすでに大学生なみの勉強力を持っているだろう。理系限りの縛りはあるけれど。だからこそ学校に行く必要を感じないのかもしれない。

「いやそういう問題だけじゃなくて、学校へ行って勉強するからこそわかることもあるだろう？」

まさか金八先生もどきを自分がすることになるとは。

学校の大切さを語るなんてスクライアに生まれた以上ないと思ってたんだがね。

「でも………」

どうやらなのはには完全に学校く魔法という式が成り立っているらしい。

これが最近話題になっている魔導師の低年齢化か。

「いいからこれから家に帰って学校へ行つて来い。まだ高町は学校に行く年齢なんだ。そんなに焦る必要もないだろ？ 友達と思い出作ってこい。」

俺はなのはの肩をもつてまわれ右をさせると、背中をおして転送ポ
ートのほうまで押していく。

「え、ええ、ええっ!？」

何やらなのはが騒いでいるが問題ない。

「いいからいいから。友達は学校へいつてんだろ？ 高町もいつて楽しんで来いつて。魔法もあんまり根詰めると上達しないし。気分転換だと思つていつて来いつて」

しばらく騒いでいたなのはだが、結局俺のこの言葉でアウトになつたのか、おとなしく押されてくれた。

「あ、あの………」
「ん？」

あの後もう少し押していたけれど、周りの目が痛かったのか、なのは自分の足で歩き始める。

特に話すこともなくて二人して黙って歩いていたが、その沈黙を壊すように話したのはなのはだった。すでに転送ポートが見える場所
で、あと1分も歩けばつくだろう。

「ありがとうございます……」

お礼？

特に意識していなかったが、お礼を言われてちょっと肩が落ちた。なんでお礼なん？ 俺は特に何もしてないけど。もしかして説教したお礼？

「いや、別にお礼を言われるようなことをしたわけじゃないけどね」

ただ地球的な一般論を語っただけなんだけどね。

はつきり言ってミッドチルダの低年齢から働ける制度のおかげでなのはが学校へ通わなくてもいいという風潮がこっちにはあるのだ。こっちに憧れをもっているだろうなのはからすれば、その考えは間違っていないし、周りのそうするべきと押してくるだろう。彼らも地球とミッドの風習の違いを知っていてもそんなに気にしやしない。だからよく考えてみれば俺の方が少数意見なのだ。

「いえ、してくれましたよ。……ちゃんと」

「へいへい。そうかい」

なのはは楽しそうに口元に手を当てた。
はいはい、楽しそうでなによりです。

とそうこう話しているうちに転送ポートへ着いてしまった。

「そつだ。今度出かけないか？」

ちようどいいとばかりになのはへ話しかける。

「え！？ お出かけですかっ？」

なのはが驚いたように身をそらした。

「ああ、今度みんなを誘ってさ」

「……」

押し黙ったなのは。ちょっとテンプレすぎやしないか？
いやもしかして……

「なんだ。俺と二人でもよかったのか？」

「えっ……あの……その……」

わたたと胸の前で手をふる。少しだけなのはの顔は赤くなっていた。

ちよつとこんななのはを見ていると将来ストーカーがつきそうで心配だよ。お兄さんは。

こんなかわいい女の子と幼馴染になったユーノがうらやましい。

「はは、冗談だよ。でだ、出かけられそうか？」

俺がそんななのはの様子に満足げに頷いて笑うと、なのははもうっ！ と怒って頬を膨らませた。

「みんなに予定を聞いてみないよわかりません！」

「そんなに怒るなよ。そうだな……とりあえず誘うみんなには俺から声をかけておくよ」

転送ポートのほう騒がしくなってきた。そろそろ時間なのだろうそっちのほうへと視線をはしらせたなのはに大丈夫と伝え、ポートのなかへと入った彼女を見る。

まだ管理局の制服のままだが、きっと帰ってから着替えるのだろう。

今日の彼女の学校が楽しければいいんだけど。

俺は右手を上げる。

昔から挨拶の方法ってのは世界共通、なにも変わっちゃいない。だから俺は大きく手を振る。

また、会えるように。そう願いを込めて。

「またな！」

「はい！」

転送ポートが光に覆われる。カッと光りその眩しさに目をつむり再び開くと……そこには誰もいなかった。

ああ、ちゃんとしたみたいだ。

俺は行ったであろう世界の方向をみて、せいぜい楽しんで来いと念を送ってその日は家に帰ったのだった。

第九話 「どっかにでかけない？」（後書き）

連続投稿はあと二回ですね。

第十話 「ボーリングにいこうか」

「そうだ、ボーリングへ行こう」

ふと思い出したようにコールが言った。

昨日から俺の家に止まって二人で騒いでいたのだが、酒の空き缶を片手にいきなりそんなことをつぶやいたのだ。だが、俺も酔っていただろう。

「なるほど。それは楽しそうだ」

最近はめったに行かないボーリングなんてものに夢をみて賛成をしまっていた。

「久しぶりだなあボーリング。もしかしたらターキーとか取っちゃうかもしれない」

「いやいや、俺はお前がガーターをとると予想しよう」

実際前世でいつてからは行ったことがない。なぜコールがボーリングにいきなり行きたくなったのか理由は謎だが、この際どうでもいい。とにかくボーリングに行きたくなった。

「さすがに二人はさびしいんじゃないか？」

しかし男二人はいやだとコールが騒ぐ。もちろん俺だって男二人は嫌だ。もっとたくさんの友達と騒ぎたい。

「よっしゃまかせろ。とびっきりの美少女を呼んでやろっじゃない

か」

「マジッッ!? ヒューヒュー、さすが兄貴! 待ってましたー!」

携帯を開きつつ、最近何だかんだで会話することの多くなってきたあの少女のアドレスを探す。

あつと、別に探さなくてもリダイヤルでいいや。

「で、だれ?」

コールはひとしきり雰囲気盛り上げると真っ赤になった顔のまま俺の携帯を覗いてくる。

「あ、このこかわうい。呼ぼうぜ」

完全に酔っぱらっているコールは俺の今の仕事の後輩に目をつけたようだ。

「ん? ああこいつか、こいつは後輩だしなあ。ちよつとパス。むしろこつち呼ぼう」

が、残念ながら彼女はこういうことに興味はなさそうだ。勢いで誘ってもいいかもしれないが、今の俺たちの雰囲気についてこれるのかなあ。ちよつと心配なのでパス。

俺は代案とばかりにこの前の集まりで教えてもらったある人物を指さす。一部では甘党なんて呼ばれているあん畜生。めっちゃ美人。息子がいるけどいい女。

「おいおい、熟女好き乙。さすがに砂糖艦長はない。俺がパス」

俺的には外せない選択を軽く流してしまう。この野郎……………

「じゃあ当初の予定通りこの子でいいだろ」

と二人で意見をぶつけ合っていたらいつまでも終わりそうにないので、俺は無難というか二人ともが文句をつけられない人員を選んだ。

「だな。ついでにユーノ呼んでやれよ。あとでばれたら……あ、別にばれてもいいか」

コールがもう一人の弟分を招集しようと声をかけてきた。

なるほど、ユーノか。確かにあの子を誘う以上ちゃんと筋は通すべきだと思っているけれど、別に今の俺がしなくちゃいけないことでもないような。

でも一応いっておいたほうがいいだろう。

「じゃユーノも、と。とすると女の子一人に男三人になるなあ。いっそ女の子の方に読んでももらいますか！」

「おうおう！ 女の子はいつでもいくらでもこっちきんしゃーい！
！」

ガコーン、ガコーンと音がなるうるさい場所。それでも子供心にそこが楽しそうに見えるのは俺の精神が若返ったからか、はたまた退化したのだろうか。まあそんなことは別にどうでもいいんだ。とにかく俺たちの今のテンションはゲージを振り切っている。最高にハイってやつだ。

「ミッドにもボウリングってあったんやなあ。というかテレビでしか中身みたことなかったわ」

車いすにのっている少女がいった。なんでも彼女はボウリング初体験らしい。

「でもこれからはいつでもこられるよね」

その彼女の車いすを押している金髪赤目の少女が声をかける。

「うんうん！ ミッドでは飛行魔法なんかも使っても大丈夫だから、今度からはやてちゃんも遊べるよ！」

さらにその言葉を肯定し、満面の笑みでこたえる少女。
もはや言わなくても誰が誰だかわかってくれるだろう。

上から順番にはやて、フェイト、なのはである。

なのはを誘ったら向こうがちょうどみんなでいたらしいので俺たちの奢りで呼んでみたらなぜか成功。気分は成功するとは思っていなかったナンパが上手くいつてしまったチャラ男。あとは想像してくれ。

「じゃあ私靴選んでくるね？」

「私もいくわ」

「私も」

三人は楽しそうに靴を選びにいった。

「なあ、コール」

「なんだい総一」

俺は微笑ましそうに目を細め、隣に立っていたコールの肩に手を置いた。

「誰行くよ」

コールは青い目をかっと開き、

「フェイト一筋で」

そうなたまった。なるほど、金髪の女の子の方が好みか。

「あのやさしそうな所がいい」

するとユーノが何の話？ と口をはさむ。

「あ？ 決まってるだろ。ペアだよ、ペ・ア」

「ペあ？」

「おう。俺たちがボーリングに行く時は大抵最後に女の子と男でグループになって得点を競い合うんだよ。そっちの方が女の子と仲良くなれるからな！」

「……なんかそつい下心があるまま作戦みたいなのを使うのってどうかと思うけど………」

「……はあ、いいか、お前みたいにイケメンじゃない男たちってのはな、いつだって作戦を使わなきゃ生きていけないんだよ。てなわけで、総一頼むぞ」

OK。まかせな。

となるとユーノがなのはだから、俺は……はやてか。

「できるの？」

何をとほ、聞かれない。

ユーノだって実はなのはと一緒のチームになるのがうれしくせに、興味なさげなふりをしながら聞いてくる。

「まあまあ、任せておきな」

キヤッキヤツと騒がしい女の子の一群を視界に収めたまま俺は自信をもって二人に答えた。

さてはてあれからそれなりの時間がたったころ。
車いすの少女が飛行魔法を用いて地面の上に擬似的にたつことでボ
ーリングを可能としたことで、泣いてしまうハプニングもあったが
それなりに盛り上がって準備運動も終わったのが今。

「さて、と。その大阪少女よ」

「いきなりずいぶんとなれなれしいんとちゃう？」

予想以上にきつついお言葉がきた。

どうにもアニメのイメージが先行している。ちよつと気をつけよう。

「いやあ、ちよつと耳貸して」

ガコーン。

やったーという声のもとを見れば運動神経抜群のフェイトがターキ
ーをだして周りが盛り上がっている。本人は持ち上げられるのが得
意ではないのか紅くなりつつも楽しそうに笑っている。

「なんや。おもしろそうな話し？」

ハードルあげんなよ。

「多分そっちの大阪魂的に乗ってくると思う話さ」

よーし。となのはがフェイトに触発されて意気込む声が聞こえた。

「そか、じゃあ大阪魂的に誘ってな」

一方のはやては俺を胡散臭げな目で見ている。

「実はな、知ってると思うけどユーノってなのはのことが好きなのだけだ」

「そらまあ、見てればわかるわ」

「俺たちとしてはそれを応援しているわけ。今日の集まりもその一環なんだな」

「ふーん」

「でだ、なのはとユーノをカップルにするべく協力してくれない？」

俺ははやてに話を持ちかける。前世の知識的にカップルを作りたければ女の子に協力してもらうのが一番だと思う。

「なるほど。で？」

「いや、でってなんだよ。でって」

これではやてが頷けば終わりだったんだが、大阪的には駄目だったらしい。

「いや、オチは？」

……おお、ミスった。

大阪魂的には話に必ずオチが必要らしい。そんな無茶ぶりな。

「まあ、ええわ。そこまで期待してんかったし」

.....

「ええよ。協力したる」

.....がふつ。

年下の女の子に期待してなかったと言われた.....お兄さんシヨック。

視界の端ではやてがボーリングの球を投げるのが見えた。いつの間にか俺の番でもあったので、急いで球をとるとレーンの前に立つ。

「総一さん、いいとこ見せてなあ」

はやては完全に見の体勢に入っている。

先にレーンの前に立ったのに俺の方を見てから投げるつもりらしいこれ、そこに立ったら投げないとマナー違反なんだぞ。と言いたいが、今回はパスして投げよう。

見せてやるうじゃないか俺のいいところを。

「いいぜ、見てろよおお！　これが必殺のおマグネティック・スクリュウー・チヨオガ・ザンビルじゃー！ー！！」

とにかくすごい投げ方だった B Y はやて

「なあなあ、このまま普通にやっても飽きるからペアわけして競おうぜ！」

「おお、ええなそれ！」

かなり不自然な話題がえを俺はタイミングを見計らって行った。さっきの交渉（笑）でサクラになってもらったはやての助けもここで利用。

男たちはこの流れがわかっていたので苦笑い。反対に女の子たちは半分乗り気。じゃあ半部は何だよって、そりゃ場の流れに乗ってし

まっつけって考えだろ。

となると俺たち六人の中で四人がペアわけに賛成になって、必然的に行われるわけだ。

「じゃあとりあえずアミダで決める？」

「じゃんけんじゃないか？」

俺がすでに仕込んだアミダという凶器を用いてユーノとなのはをくっつけようとするが、残念なことにユーノ自身が他の物を提案してしまった。

……こいつなのはと一緒になる気があるんだろうか？

「じゃんけんってなに？」

コールが純情ぶって首を傾げた。

実際は知っているがミッドの方ではない文化なので知らない人も多いのは事実だ……スクライアでは俺が広めたからみんな知ってるけど。

「え、コール知って」

「なんだコール知らないのか！　じゃあ違うのにしようぜ！」

ユーノにドンつとぶつかる。

（お前死にたいンか？）

ちよつと本気で脅してみた。

するとユーノは顔を青くしてコクコクと頷く。目的を思い出してくれたみたいだ。よかったよかった。

「なにがいい？」

ここでわざとはやてに話をふる。

「そうやなあ……普通に組みたい人とでいいんとちゃう？」

予定通り。

それにしても悩んでる時の顔が全然演技に見えなかったわ。恐ろしい。

「うーん、まあそれでいいか。じゃあ俺と組まない？」

「いいでえ、やるからには負けは許さへんからな」

意見をしっかりと採用しつつ、俺ははやての相手を潰す。コールも話が出た時点でフェイトめがけて歩を進めており、フェイトが後ろを向く前に声をかけていた。

「俺といっしょにどうですか？」

本人はユーノとやりたかったのか、それとも男に慣れていないだけでのうぶな純情か、コールとペアを組むことが恥ずかしいようだ。それでもなのはに押されて結局組んでいた。

鼻の下伸びすぎじゃい。フェイトは今でこそ気が付いていないけど、大人になったらそういうセクハラな目には敏感になるから………捕まんなよ？

「さあて、やりますかー!!」

残りのなのはとユーノは必然的に同じチームに。ユーノは予想通りうれしそうにしている。

うむ、はやてに協力を頼んでおいてよかったでござる。

「やるからには勝ちにいくで」

「もちろん。はやてだって負けるのが好きなわけじゃないだろ？」

勝ちにいく。

冷静な目で見ればフェイトが一番うまく時点が俺。はやてが一番慣れていない以上、俺たちが勝つのはかなり厳しいだろう。

しかしそれがわかっていても勝ちに行くという意識があるだけで、ゲームは盛り上がりを見せる。ならば諦めるわけにはいくまい。俺はボーリングを楽しみに来ているのだから。

俺ははやてに発破をかけるような言葉を選んでいった。

するとはやては楽しそうな笑みを浮かべて、俺を下からのぞき見る。

「それならチーム戦とは別に何かかける？」

愉悦の色をもつ瞳が俺を射ぬく。

「いいのか？ 俺に勝てるとでも？」

「さっきの言葉を返すで。もちろんや」

俺はわざと車いすに乗るはやての視線と高さを合わせる。しゃがむように見るとはやてからすれば上から憐みを駆けてるようにも感じるはずだ。

「OK。罰ゲームは？」

はやては俺がわざとそんなポーズをとった意味をよくわかっていた。

「そつやな……馬に蹴られるってのはどうや？」

返すようにはやてはなのはたちの方へと視線を向ける。

……………死ねと？

「そんなくらいやないと罰ゲームにならんやろ。別にガムテープですね毛を抜くんでもええよ」

「どっちも嫌だっつーの！ 後半はともかく前半はユーノとの約束を破ることになるから駄目。八神もあんまり手を出さないでくれよ」
「ちえー、つまらんわー」

はやては机の上に体を投げ出す。
恨めしげに俺を睨む。

「他になにがあるん？」

「そつだなあ……飯を奢るとかでいいんじゃないか」

「却下や。つまらん。オチもない」

「だまれエセ関西人」

いつでもオチが必要なんか。

その前にはやては関西に住んだ経験ないだろ。

「ちやいますー、私はエセではないですうーだ！」

あれ、そうだっけ？

と思いつつ俺は便利だから習得した並列思考を用いて視界の端に映るユーノとなのはの二人を見ていた。

なにやら運動音痴でガーター連発のなのはにユーノが投げ方を教えているらしい。

「むずかしいよお」

といいつつもユーノの言うとおりに投げようと努力していた。基本的に負けず嫌いなんだよね、あの子はさ。

「もうちよつと……こうかな」

「こう？」

「うーん、こう！ だね」

ユーノはなのはに正しい姿勢を教えるために所々手を出していた………ほう。

べたべたとまではいかないけれど、なかなかきわどいところを触ってますね。思わずコールと視線を合わせてニヤニヤしてしまった。まだ子供とはいえ……ふふふ。

いつか二人が付き合い始めたら土郎さんに、なのはにユーノが手を出し始めたのはこのころでしたねえ、なんて言ってみよう。きっと血だるまになるはずだから。

にしても、ほんとになのはは魔法使ってる時とは違って、運動できないんだなあ。

まあこの年じゃ筋力がないせいでそう上手くは上げられないんだけど。それに大人用のようにパワーでどうにかすることもできないし。

「やった！」

あ、飛び跳ねる横の金髪さんは別だよ。

九歳でカーブまでを自由自在にやってのけるこの子は例外。今だってカウンターから見ている店員が目丸くしてるし。

「私らもそろそろやるか」

見ていたはやてが俺の腕を引く。

今はすべてのチームがゲーム練習ということにしてある。まだはやてが慣れなくて練習したいと言い張ったからだ。

「なあなあ、こんな感じ？」

はやては空中に浮きながらボールを持ってポーズを作る。

俺はそれにちよつとした指摘をしながら投げさせた。

しばらく練習するとして10回目、ガコーンという音と共に7本倒れた。

「んゝ、いまいちな」

自分の成績表と俺の成績を見比べてる。

「よし！あとは任せた」

「おいこら。戦力外自主通告は認めんぞ」

はやてはあごに手を当ててそんなことをのたまった。

残念だがそんなことを認められるわけがない。

「どけち」

なんのことかな。

「さてそろそろ勝負でも始めますかね。コール、そっちはどうだ！

」？」

「いつでもいいぞ！」

俺が他のチームに終わったかを尋ねると大丈夫と声が帰ってきた。
フェイトとコールは自身があるのか不敵な目をしている。反対にな
のはとユーノのペアはなのはが涙目だ。……なにがあっただろう？

「うん、実はなのはがボーリングの球を投げようとして自分の足の
上に」

落としたのか！？

それはちよつと洒落にならんぞ。今すぐ病院に行かないと！

「落としかけた、だよ。それでちよつと怖くなっちゃった
みたいで………」

はぁ、と安堵のため息を吐く。

そうだな。もし落としてたらもつと騒いでるもんな。

俺は早とちりをしないように心掛けることを決めた。

「あはは、なのはちゃんは相変わらずやなあ」

はやてはなのはが運動できないことを知っていたのか、笑っている。

……そう言えば怪我しても今ははやてやユーノみたいな回復魔法が
使える魔導師がいるから大丈夫なのか。

「よかった。変な心配させんなよ」

「総一が勝手に勘違いしただけだよ」

ぬ……そういわれると弱いな。

「まあまあ始めようぜ」

とそれまで空気だったコールが言う。

俺はそれもそうだと思い返して、声を張り上げ気合いを入れた。

「そうだなちゃっちゃんとやりますか!!」

みんなもだんだんと乗り気になっていたようだ。

俺の声におう、と返事を返す。うん、やっぱりノリって大事だよな。そう思った1日だったとさ。

第十話 「ボーリングにいこうか」(後書き)

カリマントン島と同じくらい妙に頭に残る言葉。

『マグネティック・スクリュー・チョーガ・ザンビル』

元ネタがなんだったのかさえ覚えていないが、知ってる人いたら教えてくだされ。

予告。

まだまだ毎日続くようだ。

第十一話 「よけいなフラグを立てた気がする」

ボーリングから一カ月たった。

勝敗は256という驚異的なスコアを出したフェイト率いるチームBが勝利を飾った。あまりにも圧倒的なスペック差を見せつけられた気がした。しかし俺の脳内にはフェイトが喜ぶ微笑ましい姿よりも、俺の後ろにいた車いす少女の、あかんっ神様不公平やろ、とフェイトの胸を凝視しながらの言葉のほうに印象深い。さすが魔導師。そういった情緒の発達も早いらしい。

ちなみに俺とはやての賭けだが、もちろん俺が勝った。そりゃ大人げなく完膚なきまでに叩きのめしたさ。

それで今度はやてに飯でもたかろうと思って連絡をつけたら、はやてはボルケンリッターの前で泣き真似をするもんだからさあ大変。はやても泣くだけで守護騎士になんの説明もしないから余計に彼らが激怒して……………

あれだよ、シャマルさん。ニコニコ頬笑みながら僕の大事な部分の時の鏡でロックオンしないでください。え？ いつでももげるわよ？ やだな冗談きついよ。

ん？ どうしたんだいヴィータちゃん。…………… ちょっと待ちたまえ。それで私の後ろの穴を掘るのはやめよう。それは洒落にならないって！！！！

第十一話 「よけいなフラグを立てた気がする」

「あ、総一さんこんにちは」

俺が本局にデバイスマスターの免許を取ろうと資料請求をしていた時、はやてが後ろから声をかけてきた。

「今なにしています？」

さすがに周りの視線があるここでははやてが俺に敬語を使ってくる。つい1週間前のボーリング大会では完全にため口だったが、ちゃんと使い分けができる子らしい。

ふむ、なかなか世渡りのうまそうな子だね。

「ちょっと気になった資格があつてね」

「資格ですか？ 私もいくつか取ろうと思ってるんですよ」

……なんか関西弁じゃないと違和感あり。まあこういう所で敬語を使わないのは問題だけど、なんか逆に関西弁でしゃべってほしい気がする……っ！

「例えば？」

「そうですね……指揮官適性があるそうなのでそれ関連のものなんかですかね、今は」

「ふーん」

「ふーん、ってあんまり驚かないんですね、私が指揮官になることに」

驚けつていつてもねえ？

原作ではバリバリ指揮官してたのを知ってるし。

いくらこの世界が原作とは別も世界かもしれないと頭ではわかっていても、それに準拠した流れをしている以上そのあたりは一緒なんだなあって予想はしてたし。

だから驚けと言われてもあんまりビビッと来ないんだよね。

「まあ、八神さんは才能がありそうな気がしてたから」

「もう、お世辞はいいです……！」

ぶんぶんと拗ねるはやて。なんだか年下の妹みたいだ。

一人っ子政策を推奨していた前世の親のおかげでとうとう兄弟に恵まれなかった俺としては、なんかこの狸かわいい、って感じだよ。

「ほんとだつて」

「……はあ、もういいです。………そう言えば前に頼まれたなの

「はちゃんとユーノ君の仲ですけど」

「ちょっと前のボーリングで賭けに勝った俺ははやてにユーノとなのはをくつつけるキューピッド役を手伝ってもらったことにした。その報告らしい。」

「俺ははやての方の目的の本の題名を聞くと二人で協力して探し始めた。」

「ん、どうなった？ ボウリングでちょっとは進展あった？」

「いえ、もう2週間連絡すら取ってないそうです」

「あちゃー……」

「思わず俺は空を仰いだ。」

「まさかユーノの奴仕事がある日は疲れているだろうからとか、適当な紳士パワーを発揮して電話とかしないようにしてるんだろ。まったく、初恋は実りにくいって知らんのか。」

「これじゃあ、まだ俺の方が連絡取ってるぞ。」

「ボーリングから1カ月がたち、ちよくちよく連絡をしあってお互いに二人で出掛けていれば言うことなしだったんだが。」

「ユーノはやっぱリヘタレだな。もしかしたらリンカーコアに直接ヘタレと刻んであるのかもしれない。」

「そっか……どうすっかなあ。この後はやっぱり……」

「プールとかどうですか？」

「……………それはいいかもしれん。」

「でもこのあたりで夏の観光ができる世界なんてあったっけ？」

「別に温水プールでもいいと思うんですけど」

「それでもいいけど、できるなら外がいいだろ。いやむしろ海行くか」

「海なら53管理世界が綺麗ですよ。一回行きましたけどすごいです」

53管理世界か。ちょっと遠いな。

「それだとみんなの休暇が合わないし、無理だろ」

「そうなんですよねえ。あ、でもユーノ君となのはちゃんだけなら予定が会うんじゃないですか？」

「はっ、無理無理。ユーノにそんな勇気があつたら二人とも付き合ってるって」

今度ははやてがあちやーと顔を仰いだ。

「やつかいやなあ……」

「敬語敬語」

「あ、すいません」

ほんととはこんなに厳しくしなくてもいいけど、はやては元闇の書の主という立場的にも結構微妙なところにいるから。ちよつとしたことでいちゃもんつけられたりして、変なところで弱みを作らないようにしないといけんだろ。

「ちゃんと気をつけとけよ。一応大変な立場なんだし」

「それは……そうですね」

俺ははやてのお目当ての本を見つけた。それを棚から引き抜くとそのままはやての頭の上に置く。

「俺は当事者じゃないから、こう、適当なことしか言えないけどさ」

あわわ、と落とさないようにはやてが慌てた。

それをくくく、と笑いながら見る。車いすを操作しながらやるのは大変そうだ。

「意地が悪いんじゃないんですか？」

まあまあ落ち着けて。

俺ははやての頭の上を撫でる。そのままはやての肩に手を置いた。ちよつと彼女は拗ねていて、その表情の奥には悲しみの色がある。笑ったのはさすがにやりすぎだったようだ。仕方ない。ちよつと励ましてやりますか。

「頑張つていればいいことだつてきつとあるさ。そう思いながらやつてみな」

きつとこうしている意味はないのだろう。彼女は主人公の一人。これから何があるともその信念と友情の力で世界を変えていく子供たちだ。

俺が励まさなくとも彼女は前へと歩いて行くのだ。

「それが人生を楽しむコツつてやつさ」

それでも俺は彼女に何かをしたくなった。別にいいことを言つてやるうとか思つたわけでも、預言者を気取ろうというわけでもない。ただ、彼女の人生という本がより面白いものになればいいと思つただけさ。

「……そうですね。私もそういう気持ちを……忘れてたのかも

しません」

クスッと笑った。

「私も昔一人の時はなんでも楽しもうとしてたんですけどね」

きつとそれは一人の時の記憶。彼女は自分の命が長くないことを悟り、だからこそ残りの時間をなるべく楽しもうと生きていた時のこと。

「まだまだ昔を懐かしむのは早いんじゃないか？」

そんなに若い時から昔を思い返していたら、年寄りになった時の話の種が無くなってしまうじゃないか。

「そうですね。私も老後の楽しみに取っておきます」

「おう。じゃあ、八神さんの目的の本も見つかったことだし俺は帰るよ」

時計を見ながら俺はそう言った。

割と時間が押していたのだ。この後にはスクライアのほうで発掘がある。それに参加しないと給料がもらえない以上遅刻できないだろ。

「はい。今度は家の子たちを紹介します」

「ん。じゅあな」

車いすを押して行ってやりたかったがそんな時間はない。

はやてに手を振りつつ、俺はマナー違反を承知で転送ポートまで走ったのだった。

「あれ………なんであのひと私が闇の書の主だったって知っとるんやろか？」

第十一話 「よけいなフラグを立てた気がする」(後書き)

まったりとした日常の話。

今日はちよつと筆が乗ったので早めに投稿。

とくにオチなし。やまなし。伏線ばらまきおいしいです。

まだまだ続くよ。 毎日更新。

第十二話 「ちょっとやりすぎだつて！」

桜色の残光が視界を染め上げる。

極光の柱となったそれは空を切り裂くように突き進み雲を突き破る。

「させへんよ！」

しかしそれに相対するように白銀の光球がいくつも生まれ、桜色と激突しはじける。桜色も負けじと空を走っていたが、白銀の光球の連発の前に碎け散る。

「さすがやなっ！」

その桜色が消えるまでの合間に紫炎をまとった女性が懷まで入り込む。

彼女の体の後ろに隠すように持つものは剣。すべてを焼き尽くさんと燃えたぎる炎で刀身を包み、今まさに振らんとする。

「シッ！！」

桜色の魔導師は魔法後の硬直で動けず、また魔法障壁を張る時間もない。

鞘に抑えられた剣が炎があふれんとする爆発的な力を解放し、加速された刀身が魔導師に迫る。

「させない！」

しかしその音速の剣は横から飛び出すように割り込んだ魔導師に邪魔をされた。

剣線をずらすように横から力を与えられたことで見当違いの所を切ってしまう。

「っち！」

紫炎の魔導師は舌打ちを一つ。同時に届いた念話に従って後方へ跳躍した。

「でかいのいくで！！」

背後に控えていた白銀の魔導師が杖を金色と桜色の魔導師に向けた。

「私が前になるよ！！」

「お願い！」

魔力の大きなうねりを感じる。大気を強大な魔力が現れたとき独特の感覚が伝わる。

それに桜色の魔導師が前になることで防御重視のフォーメーションを組んだことで対抗しようとする。

「そんなんで防げるかい！　いくで、デアボリック・エミッション！！」

瞬間、広範囲の空間を潰さんと黒球が生まれ一気に広がった。この球が莫大な魔力の塊だ。それが広がることで広範囲を潰す大規模魔法。

世界の色を塗りつぶさんと黒が広がる。その様は終わりを見る人に

みせた。

だが彼女たちはこの魔法を耐えきってみせるだろう。これまでの経験と魔導師の直感が警報を鳴らす。

しかし白銀の魔力光の少女は魔法を撃った直後に肩で息をしながら膝をついた。あれほどの魔法が簡単にできるわけがなかったのだ。ましてや時間短縮のために無理をしている。その無理が体に來たのだ。

「頼むで　っ！」

それでも最後にやることは変わらない。白銀の魔導師は腹に力をいれて、自分の信頼する家族にダメ押しの一撃を任せた。

「ええ、その期待に答えてみせましょう！」

ピンクの髪を風になびかせながら彼女は剣を鞘に納めて　すぐに引き抜いた。

同時にデバイスが変化する。直剣の形をとっていたはずのものが、蛇を思わせるような連結剣に変化した。

「行くぞ！　飛龍　　一閃！！！」

持ち主の気概を呼んだデバイスが自動でカートリッジをロード。さなる威力の向上を目指し、そしてそれは爆心地へとうねりを上げて迫る。

それはオーバーキルのようにも見えただろう。しかし当人たちは違う。彼らが必ずこのままでは終わらないと知っているからこそ、この場面でも手加減はしないのだ。

特に紫炎の魔導師はその身をもって彼女たちの強さを知ってるがゆえに、彼女は持てる最高の一撃を撃ち放った。

魔力がはじけた地点。煙が包むそこから 連結剣のそばを駆け抜けるように一人の魔導師が飛び出した。

「あああああああああ！！！」

バリアジャケットはぼろぼろだ。部分的に装甲が剥げてしまっていた。元々防御系の魔法が得意でなかった彼女の装甲は薄いのだ。しかしその分速い。

紫炎の魔導師は擦れ違い様の一閃を、飛龍一閃を中断し刃をある程度戻しなら受け流し防いだ。

視界を巡らせて着弾地点のあたりを見れば、桜色の魔導師が肩を押さえて飛んでいた。彼女は二人が戦闘不能に近い状態になるよりも金色の魔導師だけでも動けるようにしたのだろう。おそらく桜色の魔導師が防御のすべてを担当したはず。それならばすでに限界であるのが見て取れるほどに憔悴している理由もわかる。しかしもう何もできないだろう。

となれば2対2の戦いであつたことから、今の状況はお互いで戦い勝った方が勝者となる。

白銀の魔導師も気がついたのだろう。彼女は無言で紫炎へと視線を送った。

それを受けて紫色の魔導師が口元がつりあがるのを抑えきれない。

敵は自分が全力を出すことに何の躊躇もいない相手。さらには勝負の行方が自分に委ねられ、主は勝利を所望している。

この状況で燃えないなんて嘘だ。

高速で旋回し二撃目を加えんとする金色の魔導師。それを紫炎の魔導師は足元に発生させたシールドを蹴ることで難なく回避。

体の芯から熱くなる。
もう止まる気はない。

金髪の魔導師が再びこちらへ向かってくる。

その姿に紫炎の魔導師も迎え撃たんと上段で構えた。金色の魔導師が攻撃を加えるのが先か、それとも振り下ろされた剣が突っ込む魔導師を真つ二つにするのが先か。

さあ

「勝負!!」

第十二話 「ちょっとやりすぎだつて!」

「それで？ 一般の観客もいるのにも関わらず訓練室を吹き飛ばしたと？」

妙にトゲトゲしたバリアジャケットをまとった青年　クロノがこめかみに青筋を立てていた。

「えつとね、お兄ちゃん。ちょっと夢中になっちゃって……………」

とさりげなくいいわけをしているのがフェイト。

さっきまで高レベルの模擬戦をしていたとは思えないくらいに綺麗な人だ。肌に傷一つなく、つやつやとした髪をたなびかせている。

「すまん。すこし力んだようだ」

そういつて俺に謝っている姉ちゃんはシグナム。変換するとシグナムなのに、メツチャボイン。超あるじゃん。

おっと脱線。というか意味不明。

「まあ別に本気になるのが悪いわけでもないんだし、いいだろ」

そして怒るクロノをなだめているのが俺、総一である。

そして今いる場所は模擬戦の会場から一番近い医務室。そしてそのベッドの上である。一応言っておくが決して彼女たちが怪我をした

わけではない。

あのあと白熱しすぎた模擬戦のおかげで結果ごと周りを吹き飛ばし、ちょうど運悪く観戦をしていた俺が大ダメージを受けたのだ。なぜか中にいた魔導師組は全くダメージらしいダメージはない。本当に魔導師って奴は俺と同じ人間なのだろうか。

ベッドの上で片手につけられたギブスカゆいとカリカリしながら思う。

「にしてもや。総一さんがレアスキル持ちだとは思わんかったわ」

「うん。私も総一さんは普通の人だと思ってたから、びっくりしたよ」

「まあ、あんまり意味のない奴だけだな」

ここで殺気発覚した情報。はやてとフェイトが俺の体質のことを持ち上げる。しかし勘違いしないように言っておこう。マジで意味のないスキルだと。

考えてみてほしい。かの幻想殺しには回復系の魔術が使えなかったことを。

そう、そうなのだ。俺の体は他人からの回復魔法を受付けないのだ！

なんてこったい。魔法を無力化しない癖になぜか回復魔法だけは体全体で拒否しやがる。

ちよつとまで、これはいじめなのか。そう言いたくなるような鬼畜具合だ。もう絶対戦いなんてしないで生きてやる。

ちなみに同じ体に干渉する時の鏡なんかは普通に食らうから。ね、意味ないっしょ？

「それでもレアスキルではある」

クロノが口をはさむ。

喧嘩売ってんのだろうか。まあ買わないけどね！

「まあ、ちょうどいいか。なのは、今日は訓練を中止して総一さんのそばで安静にしろ。最近は訓練をしすぎだ」

「え……でも」

「今日の模擬戦の時だってそうだ。あんなハードな訓練をしていれはすぐに駄目になってしまう」

「……………」

「いいかい？」

なのは小さくコクンと頷いた。

クロノはそれに満足すると部屋を出ていく。

それに付随して仕事の残っているフェイトとシグナムがでていく。

「じゃあ、うちももう行くわ。なのはちゃん今日は安静にしろんやで」

はやては少し俺たちと話してから最後に部屋を出て行った。

さっきまでは人がたくさんいたのに、今は二人だけ。

「はあ、みんな帰っちゃったな」

「うん……………」

さて、どうするか。

周りにたすけは求められない。というのに俺たちは二人きり。これはユーノに殺されるかもしれん。

いやいやあいつもそこまで鬼ではないだろう。しかし俺があいつにとって敵ではないと教えるためにここは再び一肌脱いで見るとする

か。

「そついえば高町さんって、最近訓練忙しいの？」

「え……ううん！ そつじゃないよ！？ ただ魔法の練習が楽しくって。それにみんな忙しくて遊べないから」

「忙しい？ はやてはキャリア試験をしてるって聞いたから知ってるけど、他の友達もか？」

「うん。フェイトちゃんは執務官になるんだって勉強してるよ」

「そつか。それはちよつと遊びに誘うのは迷うな。でも他にも友達くらいいるだろ」

「学校の間も今年は六年生だから受験する子はするし、ちよつとピリピリしてる気がするから」

あゝ。わかる気がする。大学受験前の学校みたいになってるわけだ。小学校が。

なんかそれって怖いわ。

そついうことなら……仕方ないかな。とは言わんぞ。

「ならユーノあたりを頼ってみたらどうだ？ あいつならきつと全力で仕事終わらせて駆けつけてくれるはず」

なんせ好きな女の子からのお誘いだからな。

「ん、でもユーノ君にはあんまり迷惑させたくないし……」

しかしなのは的には誰かに迷惑をかけるというのが嫌なのか、自分から誘う気はないようだ。

だがなのはよ、その考えは間違っているぞ！

俺は眉間に眉をひそめたなのは目の前で指をチツチツチツと振った。

「何いつてんだよ。男の子ってのはな、女の子に頼られるだけであれしくなるもんなんだぜ？　大丈夫だって、気にすんな！」

サムズアップしながらなのはユーノへのイメージに頼れる男をすりこんでおく。

いつか彼女の悩みをユーノが解決して惚れるかもしれないからな。

「そうなのかな……」

「そうそう。お兄さんの言うことは信じなさい！」

こういう小さな積み重ねがいつか実を結ばいいんだけどねえ。

「そう言えば最近なんかいいことあった？」

とりあえず場が停滞しないように適当な話を振る。普通結構親しくないとかんな話の振り方はできないけど、俺たちは結構な付き合いだ。

なのは特に疑問も持たずに質問に答えてくれようとしていた。が、特にないようだ。頭をひねって話題を作ろうとしているのがよくわかる。

ここで彼女がいつも何をしているかを聞いて、ユーノに情報を横流ししてやろうと思ったが失敗か。

「この前、レイジングハートをアップデートしたんだって？　ユーノが言ってたよ」

あんまりにも頑張っているの、邪まな考えを持っていたことが恥ずかしくなってきたので俺から話題を提供。

ユーノの定例となったグチで言っていたことを聞いてみた。

するとなのは少し驚いたが、うん、と肯定する。

「一応ミッドの最新型だよ！ パフォーマンスが4・2%も上がったんだって」

「”も”ってなんだよ。最新型はそまでのしぎをけずってんのかよ」

「え、このくらい普通でしょ？」

いやいや。一般人は何千万もするデバイスは持ってないですから。知ってる？ なのはのデバイスは前線で使っていることもあるし、Sランクのデバイスってこともあって機密情報の塊になってるってこと。それって高性能を出すためにとんでもない金かかってるんだぜ？

「はあ……知らぬは当人ばかり……と」

「なんか馬鹿にされた気分なの」

なのなの。馬鹿にしましたなの。

「総一さん？」

何でもないっす。

「やっぱりさ、なのはって

魔法が好きなのか？」

あれから時間もたったころ、俺は本当に聞きたかったことを切り出す。

なのは俺の唐突な質問に驚いていたが、本気になった俺の顔を見てたらずまいを正した。

「なのははさ、魔法ってものをどう思ってるんだ？」

魔法。

確かにそれは特別な力だ。たった一人で何でもできるようになる力だ。

特になのは突然変異で生まれた存在。とんでもないくらい魔法に才能がある。それは物語のことが関わってるのか、それともそれが彼女の力なのか。運命なのかもしれない、魔法に愛されることが。

「私は……」

彼女は俺が質問した意味をよくわかっていない。

俺がどれだけ頑張って腹の底に沈めてきた疑問なのか知らないから

仕方ないのかもしれない。

彼女は良くも悪くも正直で、本当のことしか言えないのだ。

だからその返答を聞く前に言葉を重ねる。

「魔法は怖い力だよ。今だって魔法を使った戦争はそこいらで当たり前に起きてる。そして管理局っていうのはそう言った戦争に介入する時だってある」

管理局はやりすぎた戦争行為が起きたとき、もしくはロストログアの不正使用を起こしたときのみ戦争に介入する。
もちろん武装隊のなのはには招集がかかるだろう。

「そんなときなのはは怖くないの？ 誰かを傷つける力を手に入れて本当に後悔していないのか？」

ユーノは愚痴を言う時は決まって最後に付け加える言葉がある。

なのはを巻き込んだのは僕なんだ……………

いつまでも気にしてんな。と俺は励ましをかけるようにはしているがそれでもユーノはそれを言うのを忘れない。

どれだけ後悔しているのだろう。今まで彼はそんな感情を表面に出したことなくない。でも心の底ではそう思っているのだ。

もしかしたらその後悔があるからこそ、ユーノはスクライアを出て無限書庫へ行ったのかもしれない。少しでも彼女の力になりたいからと、すべてを投げ出してここへ来たのかもしれない。

「どつ……………なんだ」

小鳥がつぶやくような声だった。

でも仕方ないと思う。だって俺が聞いたことはなのはの心の中を覗くことと同じなんだから。

しばしの沈黙。

何も言わない彼女の顔を見れない。

なんていうのか分からないから、顔を上げなかった。
バクバクなる心臓にうるさいと抗議をしながら待つ。

ポスッ。

そんな俺の頭の上に感触があった。何かを乗せられたようだ。

足の先に向けていた視線を起こす。するとそこには俺の頭をなでるなのはの姿があった。

なぜか満面の笑みを向けてくれていた。

「ユーノ君が言ってたの？」

しかしその唇からはじき出された質問はなかなか俺の急所をえぐっている。聖女のような笑みとのアンバランスさにやられてしまいそうだ。

「いや……俺もそう思ってただけで……」

「そっか。でもありがとう。心配してくれて」

未だに俺の頭を撫で続けるなのは。

少しか俺の方が頭の位置が高いからなのはは自分の座る所から身を乗り出すように手を伸ばして撫でていた。そこまで撫でたいんかい。お前たちの所為で髪の毛は泥だらけなんだけどな。

「別に汚くなんてないよ。ちゃんとすべすべしてる。でもまだちょっとユーノ君の方がさわり心地はいいかな」

さりげなくのろけられた。

別に同じ男と比べられてもうれしくないもん。俺はなんとなくそっぽを向いた。

「私はね。魔法に出会えてよかったって思ってる。ユーノ君とも会えてよかったって胸を張って言えるよ。ジュエルシードは確かに怖かったけど……それでも私は後悔なんてしてないし、これからもしない」

くすくすと笑ったなのはが語りだす。

それは少し前の記憶。時がたてば摩耗し何時かは記憶の海に沈んで思い出せなくなるような記憶。

それでも確かな光を放つ大切な思い出。なのはにとってあの経験は大切な思い出なのだ。

「……………そうかい」

俺は他になにも言えなかった。

他に何と言えば良かったのか。

回らない頭を必死でこねくり回しても俺にはこんな陳腐なことしか言えない頭なのさ。

「うん。そうなんだ。だから私は魔法を使い続けるよ。だって……」

……」

ずらしていた視線へとなのはの瞳が現れた。

慌ててまた反対にずらそうとするが、間に合わない。澄んだ空のような瞳に捕まった。

楽しそうだ。何がそんなに楽しそうなのか。俺には分からない。それでも俺も楽しい気になってきた。だってそうだろ。この空みたいな女の子が笑ってるんだ。なら俺も笑っていた方が幸せな気がするんだよ。

ああ、これがカリスマか。これが主人公か。

物語にはいつだって主人公は一人で、目の前には『魔法少女』で『主人公』がもういるのか。

くそ。道理で俺がチート主人公に慣れないわけだ。

彼女が笑う。

人差し指を自分に向けて、唇を湿らせた少女が、妖しく妖艶に笑う。さもそれが自然のように。そう今だって

「だって、私は 魔法少女だもん」

俺の骨まで溶かしつくしそうな笑みを浮かべるのだっ

た。

第十二話 「ちょっとやりすぎだって!」 (後書き)

あと二日は毎日投稿する予定。

第十三話 「……………きっと何かの歯車がかみ合わなかったただけなんだよ」(前)

しばらくシリアス。ギャグはなし。

第十三話 「……………きつと何かの歯車がかみ合わなかったただけなんだよ」

三年。

人はこの積み重ねた月日にどれくらいの価値をつけるのだろうか。少なくとも俺にとってこの三年はこの世界に俺が生きているということ、この世界で生きていくんだということを教えてくれた。転生というわけのわからんものでいまいち遊びの感覚が抜けていなかった俺に現実というものを刻みつけたのだ。

あれからスクライアの集落をでて、管理局に入局してデバイスの整備班としての役所に入った。

別に腕がいいわけではないからデバイスの開発を任されているわけじゃない。ああいうのはA級の奴らの独占場だよ。俺みたいな平凡凡の男が入っていい場所じゃない。

一応必死こいてB級取ったけどな。大体いつもは局員たちが使ってるデバイスの整備をずっとやってる。A級は開発。B級は整備。開発は大切だけど、そういう人が必要な整備も大切なんだよ。だからそういうもん。

日本でいうなら下請けのサラリーマンみたいな奴やってます。

デバイスを開発する夢があったわけではない。ただスクライアの外に出たくなっただけなんだ。それで結局現実是这样。何がやりたかったんだろっね俺は。

第十三話 「……………きつと何かの歯車がかみ合わなかったただけなんだよ」

さて、三年という月日でなのはとユーノの関係はどうなったのか？
実は なにも変わらなかった。

どうにも俺が後押しをしてなのはとユーノが出かけても普通に遊んできて終了らしく、一切先に進まなかった。

コールなんかは、キスだ！ キスをしてから始まる恋だっであるさ！ といっていた。

正直ここまでわかりやすいユーノに気がつかないなのはの鈍感ぶりには殺意を覚える。

ユーノってばものすごく頑張ってるんだよ……………！ なのに気がつかないって……………もはや法律で鈍感な罪にすべきだと思う今日この頃。
そろそろコールの言っていた案に俺も賛成したい。いけ！ 肉食系にジョブチェンジだ！

けれどもあのヘタレは、そんなこととして嫌われたらどうするんだ！
といって実行に移す気はなさそうだ。

おいおい、嫌われる程度ならそもそも恋愛はいつになったってできないぞ。

なぜか現実を認めたくないのか、ユーノは半月にいつぺんくらい俺のところへ愚痴に来る。正直こっちは毎日忙しいんだ。来るな。といっても話を聞いてしまう俺は日本人らしい偽善パワーを発揮してしまうのがいつものこと。なんか最後までユーノの悩みを聞いてちやうんだよなあ。

しかし

何も変わらないものなんてない。

それは部族に帰った時に感じる前とは違った空気。

それはふとした時に見せるユーノの身長。

それは俺が鏡を見ると年々前の顔に近づいていく過程。

どれも時が過ぎるごとに俺の見えない場所で変わっていつて。特に俺の顔。最初はユーノみたいなさうとした顔だったのに、なぜか今はだんだんと縄文顔に変化していつてるんだが。所詮DNAはだませないということなのか……！

そうして時が過ぎることによって周りが変われば自分もまた変わらなくてはいけない。

俺がデバイスマスターの試験を受けたのだってそう。

世界は刻一刻と変化を続けている。

そう、今 この時も変化をしているんだ。

特にどんなことが大きな変化をもたらすんだろうな。

そう考えるときがあった。そしてそれは今なのだろう。

高町なのはが『落ちた』。

一般的に空戦魔導師が落ちたというのは 撃墜されたという
こと。

その程度は変わるとはいえ、前線に出ていた高町が落ちたということとは……重体ということ。聞いた話では……もう、飛べない。

彼女はどれだけのショックを受けたのだろうか。

以前聞いたことがある。

空を飛ぶことは怖くないのか？ と。

彼女は笑って、何も言わなかったが、その笑みだけで彼女がどれだけ空を飛ぶのが好きなのか分かる。

今、どう思ってるんだろうな。

もう飛べないということは体のどこかしらに障害を負ったというのではなく、純粹にリンカーコアの異常があったのだろう。

つまり、彼女がこれからも魔法を使うことができる可能性は……低い。

ユーノとの出会で手に入れた魔法という力。

それを知った彼女はそれ手放すことができるのか？

気がつけば俺は病院目指して走っていた。

よくよく考えれば誰かに車を借りればよかったのに、そんなことも考えずにただ病院を目指して走っていた。

降り始めた雨の中、すべてを振り切って走った。

体が濡れることなんてかまわない。冷たくなって感覚の無くなって

いく体とは別に、ふつふつと芯が燃えていた。

一刻も早く。

一瞬でも早く。

俺はあの生意気な弟分の想い人の元へと駆けつけたかった。電車や車のなかでなんてじっとしてられない。バシャバシャと音をならして水がはねる。泥と混じって濁った水が俺のジーンズにしみ込んだ。水を吸い込んだそれは肌にすると痛かった。

それでも俺は足を止めない。目的地はわかってる。ただひたすらにそれを目指していた。

なんでここまでしてるんだろうか。

いや、理由はいいわけせずともわかってる。俺はあの子が気になっっているんだ。

三つ年下のあの子が生意気にも俺に突っかけてくるあの時が俺は楽しかった。だからこそ、彼女から魔法という力が無くなって笑顔が無くなるかもしれないことがどうしても嫌だったんだ。

もれる息は熱い。

白く染まる息は俺の中で気が付いていなかった思いがあふれているようだ。

俺はあの眩しいほどの笑顔を持っていた少女が　好きだったんだ。歳の差なんて関係ない。あの太陽のような少女を前にして好きにならないような奴がいるとは思えない。

でもそれは……あんまりにも遅い自覚。あれだけユーノを応援していたのに……ユーノとの仲を深めるためと言って、俺はいつも自分の欲望に従っていたってわけだ。

少しでもいいから一緒にいたいと、そう心の底では思っていたからこ

そ、俺は懲りずにユーノとなのはのデートをセッティングするために出かけていたのか。

なんて情けない。

俺はユーノにずっと嫉妬をしていて、そんなことにかまっているからなのはの撃墜を防げなかったのだ。

なんて間抜けなんだよ、俺は。

原作の知識と照らし合わせればすぐにわかったじゃないか。なのはの撃墜の可能性に俺は、俺だけは気がつかなくてはいけなかったんじゃないのか。

しかもそれに気がつかなかった理由が醜い男の嫉妬とは。そんな小さなこととは……………俺だってユーノに偉そうなことは言えないじゃないか。

自分という存在が嫌いになるのを止められそうにない。自分が自分で嫌いになるよ。

……………だからだろう。

必死の思いで走って病院内が濡れるのをかまわずぶぬれで病院へ着いた俺が俯いてじっとしていたユーノを見たとき なんと
も言えない感情に襲われたのは。

「……………ユーノ」

「！……………ソーイチ……………か」

声をかけられたユーノは一度だけ体を震わせた。その顔が上がることはない。

誰もいないなのは病室の近くの廊下で彼は一人で座っていたのだ。ほんの少し先の角の向こう側には何人かの人の気配がした。おそらくみんなはあそこにいてなのはのを見ているのだろう。

ならば なぜこいつはここにいるのだろう。

「なのはは……………どうなんだ？」

いつもの俺なら声をかけただろうが、そんなことよりも今はなのはの体の方が気になっていた。

ユーノとなのはのお出かけの件で何度か面会して仲良くなったフェイトさんの情報が正しいのならば……

「君が知ってる通りだよ……………」

わずかな希望をもって声を出した俺をユーノはたたき壊すようにそっけなく言った。

「なのははもう……………飛べないんだって。無敵のエアスオブエアも……………もう空に行くことはないよ」

もう一度ユーノはその手に持った言葉という名のハンマーを振り下ろす。俺は確かに心の底にあった何かを粉碎される音を聞いた。

「そっか……………」

足が震える。視界がぐらぐらと揺れた。まるで自分が自分じゃないような。いつもとは全く違う世界に生きているような気がした。情けなく震える膝が折れると、俺は壁に背中を当てて、ズルズルと姿勢を崩した。

「そうかい……………」

俺がけがをしたわけじゃない。それでも俺の手は顔の前に置かれていた。

「……………くっそ……………」

グングンと圧迫された視界。ゆがんでいた視界に圧迫感まで感じてきた。

零れ落ちる雫。とうとう俺の目はポンコツになっちまったらしい。どこに力を入れたって出てくるそれを抑えようと顔を押さえていた手に冷たさを感じる。

……………どうしようもないな。

俺はこんなときでもこれを涙と認めることができないらしい。

現実はまだ俺たちに追いついた。

すでになのはは現実と言う世界の底に落ちた。魔法を使えなくなった彼女はすでに底から上がるすべを持たない。ならば彼女はその後どうするのだろう。

俺はグツとあふれるものを我慢することをやめて、純粹に精神力で立ち上がった。あふれ出した涙をよそに俺は自分の足でしっかりと地面を踏み締める。

俺がここにいる意味はすでにないと悟ったから。俺は少しでも近くでなのは意識が戻ることを祈るしかない。

「ユーノ……………行くぞ」

こんなところで一人でウジウジしてもなにも変わらないのだ。なら

少しでも近くにいたかった。
俺はユーノの手を引っ張る。しかし

「僕はいかないよ」

明確な拒絶。

俺につかまれた手は強く払われ、俺はバランスを崩す。

「なっ！ ユーノお前……」

慌てて転びそうになった体を押さえながら俺は呆然とした視線でユーノを見た。

ユーノの顔を未だに青白く生気の欠片もなさそうに見える。それでも彼はしっかりと両足で立っていた。

「今更……僕はあそこには行けないよ」

「……っ!？」

俺は何か言おうとした。でも声にする前に抑えた。俺はユーノの言葉を最後まで聞かなくちゃいけない、そう思ったからだ。

「今更……どんな顔していけばいいんだ……なのはが怪我をしたのは……僕の所為なのに……」

一人、俯き言葉を落とす。ぽつぽつと断片的に落ちていく言葉は後悔と、なのはへの罪悪感にまみれて地を這っていた。

「僕が……僕がなのはに出会わなければ……」

なぜこれほどまでにユーノの言葉に嫌悪感を覚えるのだろうか。
いや、もうわかってている。こいつの言葉が汚いと、そう感じる理由
なんて十全にわかってるさ。
ぶるぶると震える腕を抑える。ユーノは俺のそんな姿に気がつかず、
言葉を続けた。

「僕の所為で……………っっ!!」

その言葉に、もう 抑えられそうになかった。

気がつけば俺は振りかぶった腕でユーノの顔面を殴り飛ばしていた。
それでも俺の腹の底からあふれ出してくる怒りが無くなるわけがな
い。

俺の腹の中にあった黒い感情をあふれ出した怒りがぐつぐつと煮込
まれていく。

「てめえ……………なにいつてんだよ」

拳を振りきったまま、呆然と頬を抑えるユーノを見る。
何で殴られたのか分かっていない。もしかしたらあいつは自分が頼
りないから殴られたとも思っているのかもしれない。
でもそれは違う。

俺が怒っているのはそんなところじゃない。頼りなかるうが何だろ
うが関係ない。そんなことで俺は切れているわけじゃないんだ。

「ああ？ 僕の所為で……………だと？」

私は空を飛ぶのが好きなんだ。

そう言っていた一人の少女。白く美しい彼女はそう言って笑ったのだ。

しかしその少女に心奪われた少年はその言葉の意味をわかっていない。だからこんなことを口走るのだ。

「……………そうさ。僕の……………僕のせいなんだよ。僕が彼女に魔法を教えたから　　っっ！！??？」

今度は蹴りをくれてやった。

ユーノがごろごろと床を転がる。

「てめえ、ふざけんのも大概にしろよ……………！」

まったくもって腹立たしい。俺はこんな奴をなのはとくつつけようとしていたのか。

「何が僕の所為だと……………っ！　なのはがいつお前の所為で怪我をしたんだよ!？」

俺の眼前が真っ赤に染まっていく。

比喩表現ではない。俺がユーノの顔面を殴ってその返り血が顔に付いたのだ。

「あれはてめえがやったんじゃないやねえ！　なのはが自分で戦いにいつて落とされたんだ!」

もう一度殴った。

自分の好きな人のことの覚悟をわかってない馬鹿野郎に手加減をす

る必要もない。

「……！ そんな言い方ないだろ！」

ほれ見る。

今ユーノはこう思っているはずだ。

俺がなのは馬鹿にしているって。

でもそうじゃないんだ。馬鹿にしてるはお前なんだよ、ユーノ。

「真実はそうだろう！ てめえが巻き込んだ戦いじゃない！ あれはなのはが自分で覚悟して挑んだ戦いなんだよ！」

ユーノは殴られながらも俺を睨む。

「なに……言ってるのか分からないよ！！」

ユーノは血だらけで泣きそうな表情のまま、俺を殴る。でも、そんな拳痛くも何ともなかった。

俺は振りきったユーノを手でつかむ。振り払おうと力を入れるが俺の万力のような力で掴まれた手は離れない。

ユーノが外そうと苦心している間に、さらにもう一方の手もつかむ。ギリギリと音が鳴るほどに力を込めた。自然と向かい合う体勢に。

俺は俺が今持つすべての激情を視線へと込めて、大きく頭を引いて

「いっぺん死んでこい」

ユーノの頭に振り下ろした。

ゴンツ！ と鈍い音が響く。

激しい揺れに脳の平衡感覚に障害が発生したのか、ユーノが膝から崩れ落ちる。意識はしっかりとしているのに、俺は立つこともままならない。

「いいか、ユーノ」

がくがくと震える足に必死に力を入れようとしているのが見えた。

歯を食いしばってユーノが立ち上がろうとしている でも足

は動いてくれなかった。

「確かにジュエルシードの時はお前が巻き込んだ。それは認めてやつてもいい。闇の書もなのはが巻き込まれたことを認めよう」

俺の目の前で床につぶして動かないことをいいことに、俺は腹の中にあるものをぶちまける。

そうでもない、俺はもっとひどいことをしそうだった。

「でもな、他は違う。他はな、全部なのは自身が自分から戦いに巻き込まれていったんだよ。それも全部 自分以外の誰かが泣いているのを止めたくてだ！！！」

ギュツと握りこぶしを作った。

引きつるような痛みが頬にある。喋るのが少し辛い。それで言葉を吐き出すことをやめようとは思わない。

「あれはなのはの意思だ！　なのはの想いだ！　……お前はそれをわかってねえ。もうなのははお前が見てなくちゃいけないような子供じゃないんだよ！！」

つまるところ。俺が聞いたのはそれだった。

いつまでこいつはなのはの保護者を気取っているのか。なのはがユーノを頼らなくてはいけなかった子供の時代はとくに終わったというのに。

なのははもう立派に一人で立っている。

「……………それは……………」

「考えたこともなかったか？」

俺はユーノに背中を向けた。

もう何も言うことはない。

コツコツと音が妙に響く廊下を歩きだした。

背後で息をのむ声が聞こえた。何かを言いたいのだろう。でも声が出ないのか、それとも何を言えればいいのか分からないのか。どっちだっていい。俺は答える気もない。

「僕は……………僕は……………っっ！！」

必死に絞り出した声がかすかに俺の耳へ届く。だが、俺はそれに反応をすることもなく、なのはのいる病室へと足を向けて廊下の角をまがったのだった。

……曲がる時の一瞬。かすかに見えたユーノの表情は、悔しそうに、辛そうに、苦しそうに、形容しがたい色に彩られていた。

第十三話 「……………きっと何かの歯車がかみ合わなかったただけなんだよ」(後

しばらく題名に喧嘩を売るような、というよりも嘘あり！ な展開
が繰り広げられますが、ちゃんと最後は題名通りになるのでご安心
ください。

まだまだ毎日投稿

第十四話 「沈黙の果実」

静かな病室。

規則正しく心音を刻む機械音が響くなかで一人の少女が横たわっていた。

彼女の体にはいくつものコードがつながっている。それだけではない。最先端の技術であるいくつもの機械が直接体に密着してその体の治癒力を上げている。特に彼女の怪我がひどかった腹部は念入りに治療がなされていた。

真っ白な病室で今も眠り続ける少女の名は 高町なのは。

すでに彼女が撃墜されてから三日。依然彼女が目を覚ます予兆はない。

背後から彼女の腹部を貫いた一撃により、脊髄を損傷。さらにリンカーコアに傷が入ったことにより彼女は魔法を使えなくなった。ミッドの先端技術で歩けるようになるとはいえ、リンカーコアは未だに謎の多い器官だ。彼女が魔法を使えるようになる可能性は少ないと家族や親しいものに説明がされていた。

今も薬によってリンカーコアの痛みを一時的に緩和していなければ彼女は苦しんでいただろう。一見すればおとなしく寝ているように見えていても、今の彼女の体はボロボロ。生きていることがすでに苦痛の段階にある。

まさに絶望的な状況。

彼女の家族も駆け付けて彼女の姿を見るや、泣きだしてしまっていた。

……まだ12の女の子なのに。かわいそうよね。

そう病院にきていた他の患者が言っていた。

それを聞いて思い出したさ。まだ彼女が子供なんだって。

俺は彼女のことを知った気になってユーノに怒鳴りちらしたけど、俺も見当違いのことを言っていた。俺だって間違ってたんだ。きつとあのとき、俺は純粹に心の中にあつた砕かれた希望の欠片を吐き出したかったんだろう。それでもしないと俺の心が守れなかった。

本当に俺は弱い。

なんでこんなに弱いのかわからないよ。

目の前で眠ったままなのは強い心を持っているのに。

主人公だからなのか、彼女だから主人公なのか。それはわからない。

ただ、そんなどうでもいいことよりも、この手を握り伝わる温かさが無くならないことを、彼女が早くその目を開けることを、俺は神様に願っていた。

第十四話 「沈黙の果実」

すでになのはが落ちてから二週間。

彼女が落ちてからというものの、入れ替わるようにたくさんの人が彼女を見まいに来る。彼女がどれだけ愛されていたのかよくわかるというものだ。

俺は普通なら仕事に手を追われていける時間なんてないはずだが、全力全開で仕事を定時前に終わらせてなのは所へ見まいに行っていた。

「こんにちわ、総一さん」

すでに定例となった挨拶をなのはの担当の看護師としながら、俺は病室に入る。そこには変わらず彼女がいた。

体中にチューブがつながれた痛々しい姿。満足に栄養も取れず、運動もできない彼女の体は日に日にやせ細っていく。すでに以前の面影は消え始めている。俺は荷物を横に置くと、なのはの横に座った。そつと彼女の手を握る。

人よりもすこしだけ冷たくなったその手を握り、温かくなるようにと願いを込めて。しかし俺の手が彼女に触れても返事はなく、反応もない。いつも俺はこの瞬間になのはの目が覚めるような気がして、結局目が覚めないことに落ち込んでいた。視界を上げて彼女の顔を見るも半分が呼吸維持装置に覆われて、太陽のような笑顔を見せていた口元すら見ることは叶わない。

「……………なのは……………」

目が……………覚めてほしい。

そう思わずにはいられない。
少しだけ握る手に力が入った。

静かに上下する彼女の胸だけがこの部屋で動くものだった。

目をつぶる。

鼓動をならす機械音とかすかな彼女の吐息が聞こえる。外からは人があわただしく動く音が遠い世界のことにように思えた。

同時に考えることはユーノのこと。

彼はあの後からなのはのところへ顔を出すことはなかった。みんなはユーノの晴れた顔を見て何かを悟ったのか、それについて何かを言うことはなかったが、俺に聞いたそうな顔をする。俺はそれを話

すつもりはなくて、ユーノもそうだった。俺はあいつがあの後何をしているのか知らないし、知ろうとも思わない。

それでも、彼にはなのはの所へ来てほしかった。

俺はあんなことをやってユーノを突き飛ばしたけれど、ユーノは俺のいうことなんて無視して彼女の所へ来るとずっと思っていた。

心の底ではユーノのことを認めていたのだ。だからこそ、彼が今まで彼女の所へ一度も訪れていないということが腹立たしい。

……なあ、お前は何やってるんだよ。

確かに俺は彼女のそばにいただけだ。

そこに何の生産性もなく、人は意味のないことと言いかもしれない。自己満足なのかもしれない。それでも一度も来ないことはおかしいと思う。ユーノが本当になのはのことが好きなんだったら、一度でいい。なのはに声をかけてほしかった。暗闇の中、一人でいる彼女へと声を聞かせてほしかった。

感傷かな。これは。

俺の中に言葉に表せない感情がある。

それはなのはへの想いだったり、ユーノへの感情の渦であったり、俺の将来の姿への不安だったり。他のものと密接に重なりあい、複雑に絡み合って難解な数学のように解けないものとなって俺の中に存在している。それらは俺に、どうしたいのか、とあいまいな問題を投げかけている。もしかしたら数学とは違って明確な答えはないのかもしれない。案外その可能性のほうが高そうだ。

けれど、俺はその答えを探している。見つからないとしても、それが俺の器以上のものだとしても、俺は今と言う状況を打破するため

の答えをほしがっているのだから。

「……………俺は」

握っていた手を離す。

滑らかな肌の感触を名残惜しく思いながらも、その手にしばしの別れを告げる。

左手につけた時計に目を落とせばすでに面会を始めてから2時間以上が継続していた。

そろそろ面会禁止時間へと変わってしまう。もう少しここにいたい
が家族でもない俺がここにすることはできない。

急いで横に置いたバックを拾い上げると、俺はドアの前に立ち、扉をあける。電気を消してから最後に振りかえってなのはの方へと顔を向けて、またくる、と返事のない言葉を残すと部屋を出ていくのであった。

第十四話 「沈黙の果実」(後書き)

あと二回は毎日投稿できそう……かな。

そしてシリアスもあと三回くらいで終わる予定。そのあとは基本的にお気楽ですヨ。

追伸

原作非介入 〃 原作の流れを変えようとしないこと、原作に関わるうとしないこと。

と作者は考えております。はい。

第十五話 「諦めてなんてほしくないんだ」

それは月の満ち欠けが一巡したころのことだった。

最近俺が極限まで集中している所為なのか、デバイスの整備速度、技術が共に上がり仕事の量が増え始めた。本当はそんなに仕事が多いわけではないが、俺の最低限の賃金のためには会社の命令には従わなくてはいけない。

とはいえ、さすがに毎日定時に終わらせることはできずに、残業をしながら残りのノルマの整備をしていた時のことだった。

周りが大方帰り始め俺も今日はさすがに面会時間内に行けそうにないと、諦めかけていた時にそれはきた。

プルルルル……プルルルル……

俺の携帯の着信音だった。

整備のしすぎで疲れた腕をのろのろと動かし、携帯の液晶を確認すると、それはフェイトからだった。

……俺に電話？

なんでフェイトが俺に連絡をしてきたのかはわからなかったが、俺はそれに特に疑問を持つこともなく携帯に出る。

「はい、総一ですけ『総一！！ なのは目が覚めた！！』」

っ！！ 本当か！ それ！！」

ガタン、と座っていた椅子を吹き飛ばして立ち上がる。フェイトが

そんなたちの悪いウソをつくわけがないと知っていても、俺はその連絡を信じられずに真偽を問うていた。

『うん、うん。ほんと……ほんとうに目が、さめたんだよお』

よく聞けば彼女の声は涙交じりではないか。背後でも騒がしく声が聞こえるところを聞けば、背後に一緒に見舞いにきた誰かがいるのだろう。

薄手のコートに袖を通しながらフェイトの報告を聞く。

なんでも彼女が目を覚ましたのはフェイトが部屋に来る少し前。彼女たちが部屋に入った時はすでに目を開けていたらしい。そこから急いでなのはに検査を受けさせて、その結果が出てきたところでようやくみんなに知らせることを思い出したようだ。申し訳なさそうに謝ってくる。別になのはが起きたら俺もそんな反応をする自信があつたのでとやかくは言わなかった。

俺は未だに残る今日の分の仕事の残りを一瞥するとそれを専用デバイスで格納領域の中に格納し、病院目指して走り出したのであった。

第十五話 「諦めてなんてほしくないんだ」

「なのは!!」

俺は全力で病院までの道を走破し病院の一室の前にたどりつく、
ノックもせずに扉を乱暴に開けた。

中にはフェイトとはやて、それに守護騎士のヴィータがいた。
ただここで一言つけると、手にタオルをもったフェイトとなのはの
体を支えるはやて、暖められたお湯が入ったバケツを持っているヴ
ィータ。そして裸のなのは、だ。

「あ、ごめんなさい」

ピシャンッ。と神速で扉を閉めた。同時に記憶領域に今の映像を完
全保存し、両手を耳元に持っていく。

『 つつ! ! ! ! ! 』

病室の中で爆音が生成。音響手榴弾のようににはじけた音が鼓膜を撃つも、手で押さえていたおかげで何とか聴覚の破壊は免れたようだ。

「くらあー、てめええええ!!」

叫びながらドアの中から飛び出したのはロリっ子ヴィータ。手にデバイスを持っていなくとも百戦錬磨の戦士の本気の殺気が俺の肌をさす。

マジで怖くて動けない。

グツと胸元をつかまれると、身長差があるにも関わらずに俺の体が持ち上げられる。

え、あり得なくね？

グイグイと首が閉まる。正直さっきのは悪かったと思うが、まさかロリっ子に殺されそうになるとは思わなかった。

「わあああああ！ ちょっと待て！ 落ち着け、ヴィータ！」

さらに目が細くなった。どうやら俺を許すという選択肢はなかったようだ。彼女の中では弁明も許さず有罪の判定が決まっているらしい。君、弁護士って知ってるかい。

「しらねえよ。てめえはここで壁の染みになれ」

何処にこんなパワーがあるのか知らないが、グイツと一瞬の浮遊感の後に壁に叩きつけられた。

「があっ！ 待てって、洒落にならんわ!!」

肺から空気が抜けて、一瞬の酸欠へ。めちゃくちゃ苦しい。

壁に叩きつけられてうめく俺をよそにヴィータは俺の前に立ちもつ
一度俺の胸元へ手を出そうとし

「こらヴィータ！ やりすぎや！！」

はやての静止のおかげで何とか直前で止まってくれた。
あぶな……………

「……………はやてえ……………だってこいつが……………」

今にもデバイスを起動させそうだったヴィータがいう。

「でももストもないわ。総一さんはなのはちゃんを心配して駆け付けてくれたんやろ。そんなことしたらあかん」

さすがのヴィータもはやての言うことには反論できないのか、うつと身を引いた後になのはのいる病室へと逃げて行った。

おお、さすがはやて。ちゃんと八神家のお母さんしてるわ。ちょっとびっくり。

「ごめんなあ。ヴィータはなのはちゃんが落ちた時のことでちょっと神経質になって……………」

「いや、ノックをしなかった俺が悪かったよ」

はやてが俺に手を貸してくれる。その行為に甘えながらも俺は言った。

なるほど。たしか原作でもなのはが落ちたときに一番近くにいたせいでトラウマになってたな。その所為でなのはのことに敏感になっているのか。

仕方ないっちゃ仕方ないことか。

「……………ははっ」

思わず笑いがこぼれた。

「総一さん……？」

おかしそうに顔をゆがめる俺に不思議そうな顔をしたはやてが尋ねる。俺はそれにこたえることをせずによっこいせ、と掛け声とともに立ち上がった。

そこにいたのはいつも通りの俺だ。

らしくないことをいつまでもウジウジと悩んでいるような俺は何処にもいなかった。

何でだろうね。アホな展開で頭の中にあった焦りとか苛立ちとかがみんな飛んでいったよ。

「さてと……そろそろ入っても大丈夫そう？　というか俺って一回帰った方がよさげ？」

壁に手をついて立ち上がった。

なのははまだ12歳とはいえ、裸を見られたのだ。恥ずかしくて俺に会う気にならないかもしれない。

「うーん、別にかまわないんとちやいますか？」

「そう？　じゃあ、とりあえずちよつと時間をおいてからもう一回会いにくるわ」

ちよつと頭を冷やしてこよう。

俺は今までの冷静じゃなかった、追いつめられていた思考から解放された今の気分を楽しもうと、外へ足を踏み出す。

ふと空を見上げればそこにはいくつもの星が。

以前走った時には曇っていたし、その後も俺は星に目を向けようともしなかったがこうしてみても、この世界の星も綺麗だ。

こうこうと吹く風には季節の香りがした。

地球とは場所も位相も違うこのミッドチルダの世界だが、そういう季節の匂いはあんまり変わらなかった。機械で天候を操作できるようになったミッドの都市部でもちゃんと季節が変わることに俺は安心した。思えば転生してから季節に心を震わせた。

ふと思ったのだが、俺は走って直接病院まできたから何も持つてきていなかった。

これは大人としてどうよ。

頭の中に周辺の地図を思い浮かべると病人がもらってうれしく感じるものをいくつか考える。俺も精神的にはいい年してるんだ。何かこう、気の利いたものをもっていかないとだめだろう。

さて、何を持っていくべきだろうか。

果物？

残念だが、なのはは腹に大穴開いたのでしばらくは食べ物を満足に食べられないそうだし。

花束？

なのはなら喜んでくれそうだが……他の人とかぶりそうだな。なら何にするかな。

まずは反対の気分で考えてみよう。俺がなのはなら……とりあえずベッドの上で暇だと思うだろうな。特にやることもないし。リハビリが始まればまた別の話なんだけどねえ。とりあえずなのはな

らそんな暇なときに何がやりたいとおもつかな。

……やっぱり魔法が使いたいとおもっただろうな。

周りからは魔法を使えなくなるかもしれないっていわれて……でも彼女はあきらめられないだろう。原作でだつてきつと同じようなことを言われて、それでもがんばって魔道師として復帰したんだし。なら俺はどうするべきか。周りのように諫めるべきなのか。いいや違うだろ。

俺は彼女が魔法を使うようになった理由を知っているんだ。ならどうするかなんて決まってるだろ。

目的地は決まった。

俺は少し早くなる脚を抑えるつもりもなく、一目散に近所にあるその場所を目指すのだった。

「よう、気分はどうだ？」

手を上げて陽気な俺を振舞いながら病室に入った。

なのはも一瞬俺を見て顔を紅くしたが、わざと俺が普通の態度を取ったことを機敏に感じたのだろう。落ち着いて向こうも挨拶をしてきた。

今のなのはだが、一ヶ月も寝ていれば傷はそれなりに直ってくる。重症だった腹部の傷と、リンカーコアを抜けばそれなりに元気そうに見える。

「あの、ご心配をおかけしてすみませんでした」

だが、そのリンカーコアが問題だった。

今のなのはどこか落ち込んだ雰囲気をしている。

「いいよ。そつちだって俺が怪我をしたら心配くらいはしてくれる
だろ？ それと同じことだって」

俺はその雰囲気特に何かをすることもなく、病室の壁側に設置されたものを置くスペースに近づくとさっき買ってきたものを置いた。

「あれ、それってなんですか？」

なのははそれに目ざとく気が付いた。

「これか？ とりあえず見舞いの品かな。目の前で見られると恥ずかしいから俺がいなくなったら見てくれ。それまではお楽しみみてことで」

「総一さんが恥ずかしがるなんてところぜんぜん想像できないですけど……」

なのはがいった。

「そやな、総一さんが恥ずかしがるところなんて見てみたいわ。と
いうことでヴィータ、回収や」

「俺がしたのはネタ振りじゃないっての！」

はやての悪乗りに買ってきたものがばれそうになるが、ここは落ち
着いて回避。さりげなく近づいていたヴィータにも釘を刺しておい
た。

「で、体の方はどうなんだ？」

なのはのベッドの横にあつたいすに座り、すでに誰かが持ってきて
いたみかんの皮を剥く。ミッドのみかんもどきは地球にあるものよ
りも一回り大きく、さらに甘い。科学技術の差はこういった植物栽
培にも出ている。皮を剥いた時にみかんに残る白いアレが、いつし
よに剥がれてくれるのが結構親切でうれしい。

「えっと、とりあえず普通に生活するようになるのは大丈夫だそう
です」

俺はあんまり暗くならないように話を振ったのだが、なのはのほう
は落ち込むなというのが土台無理なようで、俯いてしまう。

ヴィータのほうから余計なことすんな！ と強い念話が入ってくる
があえて無視。

「魔法のほうは絶望的……ってことか」

ビクッとなのはの肩がはねる。

俺はすでに医者のほうに聞いていたし、周りの親しい人間も高町家
の家族から聞かされている。だからこそなのはのことにもっと気を

かけてくれないかも。

「それで、本当に魔法は使えなくなったのか？」

「……………」

なのは俯いたまま何もいわない。

途中ヴィータが俺に言葉を割り込ませようとしていたが、それははやてが止めた。俺が何をやるのかはわからなくても、俺を信じて任せてくれたらしい。

彼女は俯いたまま答えない。

ここに来るまでに俺が医者に聞いてきた話では、魔法を使うことはできるが、とても実戦レベルで使えるものではないことと、魔力を対外に放出する際にとんでもない激痛が走ることを聞かされた。はつきりいつてこの結果を聞いた時点でなのは魔道師としての一生は終わったといってもいい。今現在リンカーコアについての明確な治療法は無いのだから。

なのはだってそんなことは分かっているはずだ。それでも俺はこの質問を投げかけなければいけないのだ。

「……………止めるよ」

しかし、そこでとうとう我慢できなくなったヴィータから声がかかる。彼女の肩が震えていた。

「お前はわかんのかよ……………なのはが魔法を今までどう思っ
てきたのかを！」

彼女は俺に怒りをぶつける。なぜなのはを追い詰めるようなことをするのだと。お前になのはの何が分かるのかと。

しかし俺はそれにこう答えよう。

「ああ、知ってるよ」

知ってるさ。三年前に俺は直接魔法をどう思っているのかを聞いた。あのときの答えはあやふやで、何がいたいのかを言葉に表すのは難しい。でも、俺はなんとなく彼女が魔法でやりたいことを感じた。分かったんじゃない。感じたんだ。

それを俺が忘れるはずが無い。しかしその言葉が余計にヴィータの怒りを誘った。

「なら！　なら今そんなこというなよ！　なのはが……！　なのはが……　今どんな気持ちかわかんたろ……！」

言葉とともに打ち付けられたのは殺意。ヴィータは彼女が落ちた場所において、気が付かなくてはいけなかった撃墜の予兆に気が付かなかったことへの罪悪感にその体を縛られている。だからこそ、今俺がなのはを苦しませることを自分ごとのように怒るのだ。

「ああ、分かってる」

カッと彼女の瞳がひときわ大きく開いた。

「　　てめえ！」

研ぎ澄まされた刃のような殺気が、溶岩を思わせる灼熱の激情へと姿を変えた。伸びた手が俺へ迫る。自然災害のような怒りを前に俺は何もする気はない。

しかしそれは俺に何かすることはできなかった。

「
 ヴィータちゃん」

横からヴィータに向けられた言葉は、確かに彼女の激情を冷やしたらしい。ヴィータはなのはの方へなんど視線を送ったが、なのはの顔を見るとしぶしぶと元の椅子へと帰っていった。

「総一さん……………何が、言いたいんですか」

なのはが俺を見た。

その視線に俺の背筋が震える。そこにヴィータ以上の憤怒を感じたからだ。

そうだった。この中で誰が一番魔法を使えないことに憤りを感じているのはその当事者だったのだ。

体のすべてが上位の捕食者を前にしたときのような緊張感を持つ。しかしそんな緊張感の中で俺は内心微笑んだ。

これでいい。

「なのはは、魔法をどう思っているんだ？」

なのはの顔がゆがむ。

なぜそんなことを今聞いてくるのか。そう視線が語っていた。

「なのはは魔法に出会って後悔しているか？」

俺はなのはの答えを待たない。畳み掛けるように質問を重ねる。

彼女は首を横に振った。

こうなったとしても、彼女は魔法に出会って後悔はしていないという。そう、彼女が魔法に出会ったことを後悔するときなんてものは一秒たりともありはしない。それは彼女が魔法をというものを大切だと思っていたからこそ、彼女はそれを裏切ることができない。

「なのはは魔法をどんなことに使いたかった？」

くしゃりと彼女の瞳がゆがんだ。今にも彼女が泣き出しそうだ。

それでも俺は止まらない。あの日の焼き増しをするように俺はなのはの目を見た。

「なのはは 魔法を使ってどんな人になりたいと思ったんだ？」

以前彼女は言った。私は なのだと。

「思い出してほしい。なのはが魔法を手に入れたときに思ったことを。なのはがどうして魔法を使おうと思ったのかを」

なのはの瞳の中にすべてを焼き尽くすような劫火はない。空色の瞳に海の色をした雫が彩りを加えるだけだ。

「忘れないでほしい。なのはは今までしてきたことは魔法だけではない。してきたことじゃないってことを。いつだってなのはがしてきたことは魔法があればできたことじゃないって事を」

なのははいつだって全力で相手にぶつかってきた。それはなのは以外の誰かができることはなかった。魔法の力があればできることではなかったのだ。彼女が相手と話をしてみたいと、彼女が相手と

仲良くなりたいと子供のような、大人になってしまったときに無くしてしまうきれいな思いを持っていたからこそ、相手が助けられたのだ。

俺は彼女に忘れて欲しくなかった。

なくしてしまった力ばかりに目を取られて、今の彼女が持っている大切な何かをなくして欲しくなかった。魔法だけが彼女の魅力ではないんだってことを知っていて欲しかった。

そしてその上で俺は あきらめて欲しくなかった。

「なのは……………なのはにとって魔法はどういうものか、よく分かってるだろ。それを あきらめられるか？」

「……………」

無理だろう。

もう彼女は思い出してしまった。彼女が何をしていたのか。なにを目指していたのか。何をしたかったのか。

彼女はもうすでに、自分の心の底にあった原初の感情を思い出してしまっている。

「なんでいまさら……………そんなこと……………」

こらえるようになのはが声を絞りだす。

「なのは……………」

「……………」

俺がなのはをじっと見ていると、震える声が聞こえた。

「出てって……ください……」

ぼろぼろと流れる涙を抑えることも無く、両手でぎゅっとシーツを握るなのから声が聞こえる。

「……出てって!」

なにを言っているのか一瞬理解出来なかった俺になのはから近くに
あったものが投げられた。

強い否定の言葉とともに投げられた枕が俺の頭を揺らす。

しかし、それだけで彼女は体に痛みが走ったのか肩を抱えるように
体を抱きしめた。

「……出てってよお……っ!」

第十五話 「諦めてなんてほしくないんだ」(後書き)

おかしい。なんでこんなに長いんだ……

明日も投稿できそうです。

第十六話 「私は……………」

「出てって……………ねえ。結構堪えるわ」

ボタンと閉じた扉の向こうで俺は一人立ち尽くす。

扉の向こうではなのはが声をあげて泣いていた。もう手に入らないと周りに言われて、さすがの彼女も諦めていたはずだ。そこで俺の諦めるな、魔法はまだ手に入れられるという言葉は残酷だ。

自ら放棄した希望を俺がもう一度彼女の手に渡してしまったことと同義だからだ。自らに暗示をかけて諦めようとした魔法。それを俺は諦めるなど、辛い現実と戦えと強制したのだから。

俺は原作で彼女が立ち上がることを知っていた。

きっと何もしなくても彼女は一人で立ち上がったはずだ。俺が余計なことをすればその分未来は変わる。もしかしたらこの所為で彼女の未来が変わるかもしれない。それでも俺は彼女に声をかけずにはいられなかった。

なぜか？

好きだから。俺と言う存在が彼女に変化をもたらすということを見てみたかった。

自己満足でしかないことはわかっている。最善の一手でないことなんて百も承知だ。

それでも俺はそうすることしかできなかったのだ。

第十六話 「私は……………」

静まった病室のなか、中心に置かれたベッドの上に一人の少女が眠っている。

周りを見渡すと花瓶に活けられた花束が見える。しかしそれは毎日色合わせが変わるだけで、年頃の少女がいるにはあまりにも退屈な

部屋だ。

とはいえその部屋は他の部屋に比べてかなり上等な部屋だった。完全個室でお金持ちだけが入ることを許された特別病棟。そこに彼女
高町なのははいたのだ。

「……………やだよ……………」

寝ているというのに、彼女の瞳から涙がこぼれた。零れ落ちた雫がシーツをぬらす。
そんな彼女の姿は、いつもの彼女を知っているものからすれば、信じられないような光景だろう。
それは彼女を幼いころから見ていた彼も同様だった。

「……………っ!」

息をのむ。

彼女と直接会う勇気もなく、忍びこむように病室に来て彼女の姿に安心したのもつかの間に、彼女が夢の中で泣き始めたから。

「なのは……………」

一歩間違えば犯罪者として捕まりそうな行為だが、彼はそんなへまをしない。

そつとなのはの額に手を置いた少年の名前は ユーノ・スクライア。

「じゅめん……………」

少年 ユーノはつぶやいた。

それは何について謝ったのだろう。

彼が彼女の覚悟を理解しなかったこと？ それとも彼女の不調の原因について気がつかなかったこと？

特に意識しているわけではないだろう。ただ彼女を前にして自然と言葉が出たのだ。

だが、彼は知っているのだろうか。

時に人は謝罪の先について敏感になるということを。

何を謝っているのか。それを明確にしないことが、時として罪のよくな扱いになることを。

少年はいずれ青年となり、大人へと変わる。

まだそれを知るのは少し早いかもしれない。ならば仕方ないのかもしれない。だが、今彼はそんなことを氣遣えるほど大人ではなかった。

そつと亜麻色の髪をなでる。伝わる感触は以前触った時よりもごわごわとしていた。

長い入院生活で彼女の体から栄養のバランスが崩れたのだろう。彼女は幼いころからのしつけのおかげで、美容にはそれなり以上のこだわりがあったから、鏡を見たときは大層悲しんだ。

「……」

長い付き合いだ。

ユーノには肩を落としたなのはの姿が目には浮かぶ。

椅子に座りながら彼女の寝顔を観察していると、次第になのはの額に汗が浮かび始めた。

「……………！」

次第に体を動かし始める。

もしかして、うなされてる？

ユーノは彼女を落ちつけようとするが、何をすればいいのか分からない。

自分の兄貴分のようなあの男ならこんな時も簡単に納めてしまうのだろうか。弱気な考えが頭に浮かんだ。

僕は……

弱気な続く言葉を飲み込み、頭を振る。

弱気な考えは叩き出せ、言葉は呑み込んで外へ出るな。自分の意思で情けない心を叱咤する。

「……………いや、いやあ！」

次第に声を張り上げるように泣くのは。ユーノはさすがのような気持ちで、必死になのはの手を握った。

僕がここにいるよ。一人じゃないよ。

込めた想いはそれだけ。それだけを込めてなのはの手を握り続ける。

「あ……………」

彼女からこぼれる涙と声が小さくなっていく。

落ち着いたのか、彼女の息も整い始め次第に規則正しいリズムを刻み始める。

はあ……と息を吐くと同時に、自分の心を何かに驚掴みにされるのを感じた。

ユーノはなのはには笑っていてほしかった。でも現実はどうだろう。彼女は怪我をして倒れている。それどころか夢の中でさえ彼女は満足に笑えていないではないか。

総一にあれだけ言われたというのに、未だに考えてしまう。

もしも彼女が自分と出会わなかったら……と。

それはすでにあり得ない物語。遠にその未来への選択肢は終わってしまっている。もう選べない道の先にあった未来なのだ。

どんなに優秀な魔導師であろうとも選ばなかった未来を、切り捨ててしまった未来を選ぶことはできない。

どれだけ望んでも、だ。

「ほんと、馬鹿だよなあ」

そもそも、そのことを知っていながら選ばなかった未来をほしがっていることが愚かしい。

ユーノは自分を笑った。

弱すぎる自分が大っ嫌いになりそうだった。
つい握っていた手に力が入る。

「……………んっ……………」

なのはからうめく声が漏れる。

「……………あつ」

慌てて手から力を抜くが、遅かった。

「あれ……………ユーノくん？」

どこか力の抜けた声が聞こえた。なのはの目が覚めてしまったようだ。

冷静な思考がヤバいとコールレッドを発令しているが、パニックになった大多数の思考の所為で体が動かない。蛇に睨まれたようにユーノの体が固まった。

まずい。

今の状況を冷静に整理してみるとかなりまずい状況だ。

なにせユーノはセキュリティに守られたなのはの部屋に不法侵入しているのだから。

年頃の女の子の部屋に侵入した無限書庫司書。そんなネタはスキヤンダルの種類にしかない。

別にスキヤンダルをされるというのは、別にいい。しかしユーノがらすれば、ここでののはに通報されるということをご遠慮したかった。

好きな女の子通報で豚箱行きなんて確実にトラウマになる。そもそも今の自分は周りから見たらストーカー行為一步手前だ（手前ではありません）。間違ってもなのはにストーカーと思われたくない。

「どうしたの……………？」

しかしなのは持ち前の鈍感のおかげでユーノは最悪の事態が避けられたことを悟った。

寝ぼけているのか、それともこの時間にユーノがこの部屋にいることをおかしいと思わない幼い感性の持ち主なのか。両方っぽいなあ、と一人考えながらユーノは安堵のため息を漏らす。

「……………」

なのは目をこすって眠気をなくそうとしているが、入院生活で体力の落ちた体は睡眠を要求し、それに逆らうのは一苦労のようだ。かなり眠たそうにしている。

「ううん。特にはなにもないよ。ゆっくり寝てなよ」

さらには身を起こそうとしたなのはユーノは押しとどめる。そっと肩を押して彼女を寝台に押しとどめながら、ずれてしまった布団を肩までかけた。

「……………うん」

なのはも眠気には勝てなかったのか、ユーノのリードに従いベッドの上で力を抜いて、眠ろうとした。

ユーノはそれに安心したように目を細めて、もう一度なのは手を握った。

もう彼女がうなされるようなことが無いように、と願いを込めて。

「ユーノくん……………ありがとう」

なのはがお礼を言った。

彼女は眠気でまともに動かない頭でもわかったのだ。ユーノがなのはがうなされていたのを知っていて、不安になったなのはを励まそうと手を握ってくれたことを。

……あったかい。

布団の横から控え目に出された手から伝わるのは部屋の冷たい空気と、ユーノの体温。それは自分が眠っていたときに感じていたものとよく似ていた。

自然と彼女の体が熱を持つ。

自分でも不思議なくらい体がぼかぼかとする。
なんでだろ。

考えようと頭を動かすが、上手く動かない。

そのまま意識がブラックアウトしそうだ。

なのははせめてユーノにお礼を言おうと口を開こうとして、もういつてしまったことに気がついた。ならばと、なのはは考えて、

「ユーノくん……おやすみなさい」

そういった。

そして眠気に負けて白旗を上げる直前、なのはは見た。

ユーノの表情を。

その顔に映ったなのは見える笑顔を。

それはとてもきれいで、そして今まで見ていたなかでも一番うれしそうなお表情だった。

「
おやすみ、
なのは
」

第十六話 「私は……………」（後書き）

入院編は次か、その次で終わりです。はい。

でも明日は投稿できるか微妙です。

第十七話 「これが自業自得ってやつか」

白い光の入る病室。その中心で高町なのははかすかな暖かさの残った手を頬に当てる。

「ユーノくん……」

僅かに残る匂いの残滓と体温。

それがなのはに与えたのは安らぎ。夜の間だけの一時に現れたユーノのおかげでなのは恐ろしい夢を見なかった。

真っ白で冷たい一人の病室でも、なのはは孤独を感じない。

握った手の感触が脳裏に焼き付いている。ずっと誰かが自分が眠っているときに握っていてくれた手のひらの感触が。あ

……ふにふにだったなあ。

あれほど眠かったというのに、なのはの脳裏にはしっかりとユーノの顔が記憶されていた。

……今日もくるかな？

第十七話 「これが自業自得ってやつか」

毎日の日課となったなのは病室へ来ることだが、どうにも今日は顔を出すのをためらう。もちろん昨日のことが理由なんだけれど。

出て行つて……！

別に来るなと言われたわけではない。

自分でも苦しい自己理論で武装を整えるが、どうにも貧弱だ。これなら別の理論武装をした方がいいような気もするが、他には特に思いつかなかった。

とりあえず今日は周りに誰もいないであろう面会時間外にきた。なんとなく他の人がいない時の方がいいような気がしたからだ。

「うんじゃまあ、行きますか」

口に出して引くに引けない状況を作った。

そうでもない俺の二本の足という名のポンコツは動いてくれなそうだった。本当ならオイルをさしてやりたいところだが、そんなものは無い。両手でパチンとたたいてエンジンを起動させて、ようやく動きだせるようになる。

ドアに手をかける。カチャ、と金属のすれる音がした。体の中にある意志力を振り絞って扉をまっすぐに押して開こうとして

「……ユーノくん………？」

なのはが小さくつぶやいた声が、やけに大きく聞こえた。俺の手が止まる。

「……………あ、え……………」

今……彼女は何と言った？

それは俺の名前か。違う。俺の名前はそんなのとは似てもいない。そもそも何で彼女はその名前を今呼んだのだ。

「……………だれ？」

途中で止まったドアを不自然に思ったのだろう。

彼女がいぶかしげに声をかけてくる。

しかし俺の頭には少しもそんな情報は入ってこない。純粹になんてという疑問で埋め尽くされていた。

焦燥感で俺の頭が真っ白になる。立っていられないくらいの衝撃。

……なんで彼女はユーノの名前を？

考える。

何でだ。

わからない。

なら視点を変えろ。

自分がなのはの立場なら、誰の名前を呼ぶ。なのはの今の心境はどんな風になっている。

考える。

なぜだ？

彼女は誰が考えたって、昨日の俺の言葉や事故の影響の所為で不安

定はずだ。

その状態で扉を開いた瞬間にユーノの名前を何で呼ぶんだ？

考えろ。

俺はわかるはずだ。

不安定な状態で人の名前を呼ぶ。それはどんな人の名前だ？

自分が不安なんだから、きっと思わず呼んでしまう人の名前の相手はどんな風に思っている相手なんだ？

……考えろ。

いや、考えるな。その先は考えちゃいけない！

カラカラになったのを無理やり使って声をひねり出しながら、俺は扉を一気に開いてみせた。

「……………よっ！ 起きてるか？」

自分で声が震えるのがわかった。道化になったような気分のまま、わざと間抜けな声を作る。

「あ、総一さん。こんな時間にどうしたんですか？」

俺の姿を見せたとき、彼女は安心したように息をはいた。

「もう、途中で止めないで下さい！ すっごくこわかったんですから！」

しかし俺はなのはの吐く息の中に一種の失望感が混じっているのを

見つけた。

……ユーノであってほしかったんだろう。

「おいおい、見舞いにきた俺にひどい言い草だな！」

「お見舞いなら時間を守ってきてください！」

なのはが昨日とは比べ物にならないくらい元気な声で言った。俺は手に持っていた地球産のモロゾフのプリンを冷蔵庫に入れながら、なのはに敬語でなくてもいいよお、と声をかけておいた。

なのはは一瞬ボケっとしていたが、すぐにうれしそうに頷いた。

「これ食べたことある？」

「うん、一回お母さんが買ってきたのを。すっごい滑らかでおいしいんだよ」

どうやら気にいってくれたことに頬が緩むのを感じつつ、俺はなのはの顔をじっと見ていた。

……昨日までの張りつめた笑顔が無くなってる。

見れば彼女の中にあつた何かつめたいものが無くなっていた。

「……昨日、なにかあつたのか？」

自然と口の端から声が漏れる。

「昨日……？」

そっと目を伏せた……後に、頬を赤く染めた。

「えっと、あの、昨日は……その……」

「昨日は？」

なぜか口籠るなのは。

その顔だけでわかったよ。なにがあったのか。

彼女が昨日の夜のことを話し出す。

「ユーノくんが部屋に来たんだ」

突然 俺は無性に走り出してこの場から逃げてしまいたい衝動にかられた。誰かが後ろで太鼓を連続して叩いて俺を走れと追いたててい
るような気分になる。

だが、俺は鉄の理性を持ってこの場に足を縫いつける。このまま逃げだせば俺は彼女に変な印象を与えてしまう。惚れた弱みでそれは
でき
ない。

「それで、ずっと私の手を握っていてくれて……私すごく安心
できて……」

彼女は俺の葛藤に気がついた様子もなく、昨日の夜になにがあつた

のかを熱く語ってくれる。

苦々しい味が俺の口の中に広がる。カチ、カチ……とやけに時計の針の音が大きく聞こえた。

「すつごくあつたかくて……離したくなくて……」

うつすらと桜色に染まった頬は何を意味しているんだろうな。

「怖い夢も……見なかったんだ」

丁寧にどう思ったのかさえ教えてくれるのはに脱帽。彼女は俺と一度も目を合わせることもなく、夢の中の誰かにずっと話しかけていた。

「私、魔法の練習……続けるよ。まだ私は魔法が使える……そう思うから。思えるように……なったから」

いつの間にか、彼女は夜空を見上げてた。俺の姿なんてものは彼女の視界にすら入らない。彼女が見るのは、かつてその身を躍らせた空と、彼女をそこへ連れて行った少年の髪と同じ色をした月だけが存在を主張している。俺はそんな彼女を後ろからみることしかできない。

窓という枠の中で彼女が月明かりを受けて輝く姿は一種の絵画のようだった。病院の周りを照らす電灯の光がゆらゆらと揺れている。

「そっか……」

一言だけ俺がのどを震わせると、彼女は心あらずだった状況から戻ってきた。

恥ずかしそうに俯くが、俺はそんなことを気にせず椅子から立ちあげると、そのままドアのほうへ歩いて行った。

「もう、帰っちゃうの？」

不思議そうになのはが言った。

俺はどうか意地で振りかえるとニヤリと不敵に笑って見せる。

「なに、泣いてないか心配で見に来たんだが……どうにもいらなかったみたいだからな。男のことを考えるなんて余裕のある姿を見せられるなら大丈夫だろ」

「え……あつ……べ、別にそんなわけじゃないよ!!」

真っ赤になって手を振るなのにもう一度笑みを送る。

「じゃあな、また来るわ！ 次はユーノを連れて!!」

そつと入った時と同じように扉を開けて出て行った。

捨て台詞に反応したなのは言葉にならない叫びが聞こえたが、無視して病室から離れるために、早歩きでエレベータまで歩く。

入ったエレベータはやはり国立病院と言っただけ綺麗だった。いくつも書いてあるボタンのなかで適当に一番上を押して下まで降りる。ふらふらとおぼつかない足取りで病院の入口までどうにかたどりつき、そのまま外へと歩き出した。不覚にもそこまでの道順を全く覚えていない。どっかの角を曲がった気もするし、まっすぐ歩いてきたような気もする。

ふと、ザーザーと耳に聞こえる音に気がついて空を見上げれば、雨が降っていた。

どのくらい歩いたのか分からないけれど俺の体はずぶぬれだ。後ろを向いても病院は見えない。ただゆがんだ視界に見覚えのない建物が映るだけだ。

気がつけば俺は雨の中を走っていた。

目的地はない。

ただ無性に走りたかっただけだ。雨でゆがんだ視界の中に映った建物が病院に似ているような気がして、離れたかった。

なぜ？

自問したとき、すぐに答えは出てくる。

雨で冷たくなった体を必死に動かして走る。

なのはが落ちたと聞いて走った時は体の芯から熱くなるような感覚があったのに、今はただ冷たいだけ。あの時の俺を走らせた力はなく、ただ俺の惨めな心が逃げようとする不様な姿をさらすだけ。

なんで……

つぶつた瞼の裏にはなのはがうれしそうに笑った顔が映る。

吹きすさぶ雨粒が俺の体に打ち付ける。

その一粒一粒に痛みを感じるくらいに肌が冷たい。何でもいいから温かいものがほしい。

どうして……！

胸を締め付ける圧迫感が俺を襲う。

冷えた体が悲鳴を上げる。けれども俺の脚は止まらない。

何処に走ってるのかもわからないけど、とにかく俺はあの部屋の近くにいたくなかったのだ。

「……………ッッー！」

けれども俺の体は限界だったのだろう。この雨の中で走り続けた俺の体がふらついた。すぐに立て直そうとするも、上手く体は動かずに転倒。アスファルトの上を滑るように転がった。

打ち付けた膝から血があふれる。ドクドクと溢れる血の脈動が俺の狭まっていた視界の霧をはらう。

痛む体を我慢して、今の自分のことを見れば、体は泥だらけでいたる所に傷があった。

膝を水たまりの上につきながら思う。

……………なんて不様。

本当に今の俺は惨めな人間だった。それも笑ってしまつくらい惨めな……………だ。

「あははは……………」

雨で濡れているというのに、不思議と乾いた笑い声が出た。

「……………!!」

それを自覚し、同時に拳を道路にたたきつける。

こんなもので収まるような感情ではないけれど、これくらいしなければ抑えられそうにもない。

離したくなくて。

突然頭に響く声。

それはなのはがユーノの手を握った後のこと。

「……………あ、あああ……………」

グニヤリと視界がゆがんだ。

時間の感覚が消えていく。長いのか、それとも短いのか。降り続く雨の音が余計に時間の流れる音を彼方へと持ち去って言った。

地面がゆがんで見える。足元がおぼつかなくなった。

鼓膜が張る。ザーと言う音が耳触りでしかない。

頭の中で何かがうごめく。スープをかき混ぜるように、頭の中をぐるぐると回す。気持ち悪くて自分がどうなっているのか分からなくなる。

体はこんなにも変なのに……………それでもなののことを考えてしまう。

「くっそお……………!!」

もう一度地面をたたいた。飛沫があがり泥水が顔をぬらすか、かま

ない。

……わかってるさ、これが、今の状況が自業自得なんてことは。

今までなのはとユーノの恋を応援してきたんだ。こうなることはわかっていたさ。

そう。なのはがユーノを好きになることは……わかっていたはずなんだ。

何度も二人で遊びに行かせた。それとなく雰囲気も作ってきた。ユーノがいなくていいときにあいつのいいところを教えたりもしていた。露骨にはならないように、彼女がそれとなく惹かれていくようにいくつもの罠を張った。

その努力が、今報われたただけだ。それが俺の好きな相手だったただけだ。

でも……それが無性に辛い。

好きだってわかったのに、俺は自分の恋を自分で終わらせてしまった。

「……！」

言葉にならない。

なんて言えばいいのか分からない。

肺の中の空気を一気に吐き出した。体の中の黒い物が一緒に外へ出て行ってくれと願いながら。

心臓がうつ鼓動が今までにないくらい大きい。
冷たい血潮が俺の体をめぐる。

……もう、いやだ。

頭のなかがぐらぐらとした。
自分の馬鹿さ加減に笑いたくなる。

涙もあふれてきた。

今の俺は泣いているのか、笑っているのか、叫んでいるのか。

下にできた水たまりを見れば、映る俺の表情はなんとも形容しがた
い顔をしている。

……ぶっさいくだな。俺。

体に力が入らない。

いつの間にか地面に体を横たえていた。
未だ降りつける雨が俺から体温を奪っていく。
寒さで指がピクリとも動きそうになかった。

……ああ、まずいかも。

そう分かっていても、俺はどうにかしようと思わなかった。思えな
かったのだ。

ゆっくりと視界の隅から黒く染まっていく。

……これは……まずいかもなあ。

他人事のようにすら感じてきた。

ひたひたと後ろから聞こえる足音に恐怖はなく、純粹に俺は歓迎していた。

ゆっくりと後ろの死神が鎌を上げる気配がする。

……さっさと振り下ろしてくれ。

願ったのはそれだけ。

染まっていく黒すら遅いと視界を閉じた。

しかし早く早くとせかし、閉じる視界に誰かが走って近づいてくるのが映った。

その光景をどこか遠くなっていく思考で見つめながら、俺の意識は無くなる　　はずだった。

私は魔法少女だもん。

彼女の声が俺の頭に響いた。

俺が諦めそうになった、まさにその瞬間。その声が狙ったように聞こえた。

グツと体に力を入れて身を起こす。

振り下ろされた死神の刃はもう俺に届かない。

彼女の声が俺に熱を取り戻したから。

……俺が死んだら、きっとあの子は悲しむ。

嘘偽りなく、彼女は心から泣く。絶対に泣く。

……俺が彼女を泣かせる？

あり得ない。

そんな未来は絶対に存在してはいけないのだ。

俺がなのは好きである以上、絶対に認められない未来だ。

ならここで俺がくたばっていいはずがない。

なのはの笑顔が好きだから、俺は彼女を好きになった。なのに俺はフラれたくらいで彼女の笑顔をなくしてもいいのか？

「……んなわけあるか……っ！」

フラれた。完膚なきまでにフラれたさ。

彼女が好きだからわかる。ユーノのことが好きになっているって。

告白をしてなくても俺はフラれたのさ。

でも彼女の笑顔を見ていてもいいはずだ。

彼女に笑顔でいてほしいと思ってもいいはずだ。

奥歯を噛み砕かんばかりに噛み締める。

……くやしい。

俺が彼女が一番近い所にいられないことが。

いつか彼女が俺から遠くへ行ってしまうことが。

でも……でも……！

今だけは彼女に幸せでいてほしいと、願ってもいいはずなんだ。

俺は降り続ける雨のなか、忌々しい曇り空を睨みつける。

……もう腹は決まった。

俺は彼女に笑顔でいてほしいと思っている。

でも俺は彼女が一番の笑顔を引き出すことはできない。引き出せるのはあいつだけなんだ。

……ならどうする。

決まっている。

俺はその状況を作るだけだ。

彼女のために。彼女が笑っていられるように。

なによりも俺のために。

……やってやろうじゃないか。

もう決めた。

今まで俺は自分の無意識下で認めたくないとしていた所為で、半端なことしかしてなかった。

……ああ……やってやるさ。

これからは違う。

俺は本気だ。

本気でやると、今決めた。
五臓六腑の奥底に刻みつけた。

彼女に笑っていてほしいと。

所詮俺は脇役。何かをすることはできない。

でも、こんな俺でも本気でやれば、少しくらいは変わるかもしれない。

だから……やる。俺は……俺は………っ！

「俺は本気でユーノの恋を応援してやるっ！！」

第十七話 「これが自業自得ってやつか」(後書き)

《完》

あくまで第二部です。

……まだ終わらないよ？

ここでちょうど半分です。

今までの感想、誤字訂正。これからの展開などのリクエストを募集しています。

ありましたら教えてください。

第十八話 「風邪引いた……」

意外ときついもんだね。好きな女の子に告白をしないうちにフラれるっていうのも。

昨日の叫んでからどうやって帰ったのか記憶がないけど、俺は無事に自宅に戻れたようだ。

しかしなぜか何もする気にならなくて、彼女のユーノのことを話す時の楽しそうな目が瞼の裏から離れない。

起きたばかりにしてはだるい体に気合いを一つ入れながら立ち上がろうとするが、失敗。俺の意識には霞がかかったように、どうにもうまく動いてはくれない。

……こんな体で仕事できんのかなあ。

いつもなら簡単だったデバイスの整備すら満足にできそうもないし。この仕事は人の命を握るときもある。なおさらふざけてはいられないってわかって、でもどうしようもないってのが……なんとも救いようがないね。

デバイスを整備される人からしたらたまったもんじゃないだろう。自分がデバイスの不調で怪我をしました。その理由は？ デバイスマスターの色恋ざたのせいです。俺ならそのデバイスマスターの首をねじ切るね。こうグイツと。きっと周りも責めないよ。だって誰だって死にたくないし。人の命のかかった場所にそんなことを持ち込んでんじゃねえ！ ってね。

俺は震える腕で電話を上司につなぐ。
年配のおっさんがでた。この人は結構俺をかってくれてて、いろいろ

るとよくしてくれてる。

とりあえず体調が悪いから今日明日は休むと伝えた。そうか、気をつけるよ。と体育系のセリフが嫌に似合うおっさんからの言葉に胸を熱くしながら、俺はもう一度布団をかぶる。

なんていうかさっきのデバイス云々のセリフに意味はあったのだろうか。多分ないな。

ちよつと本格的に熱が出たようだ。

昨日の雨が原因だろう。

額に当てた瞬間的に体温を測る機会には38.4。あらま、完全に熱だよ熱。だれか簡単に治る風邪薬發明してくれない？ したらその利権を5ドルで買ってやるからさ。

作らなくても5ドルで買ってやるよ。何を買うのかは今度ブラックコーヒーを片手に崖の上で話そうぜ。勿論君が崖がわね。ちなみに警察官に追い詰められた男役をしてけるとすぐくたすかる。え、なに警察ってこっちの世界にないの？ じゃあないな。俺が警察になつてやるよ。ブラックコーヒーをもって。

ああ、駄目だ。なにアホなこと考えてるんだろ。自分でも意味不明すぎるよ。

本格的に熱が出てる。頭がくらくらはして気持ち悪い。

右手に持った電話が機械特有の冷たさを發揮していた。俺はそれ головуの上に乘せて冷を取ろうとするが、まっすぐな形をした子機はつるりと落ちる。なぜか懲りずにもう一度挑戦。今度は髪の上に載せてみた。そしたら髪の中の所為で全然冷たくなかった。

ああ、本格的にだめかもしれない。電話で冷が取れるわけがないよね。

完全に俺の思考が病人だ。あは、そう言えば俺ってこっちの世界に
来てから始めて風邪を引いたかも……………

第十八話 「風邪引いた……………」

トントんと包丁をたたく音が聞こえた。

「……………あん？」

眠気が俺の顎をアップパーしてベッドへと倒れ伏しそうになるのを必死でこらえつつ、その異音の元へと移動した。

俺はスクライアの里を飛び出してからは基本一人暮らしだ。せいぜいユーノが時たま止まりに来るくらいだが、昨日あいつが泊まった記憶はないし。

ならこの音を出しているのは誰だ？

キッチンとリビングを分けている簾に手をかけながら考えた。ちなみにこの簾は俺が地球のサントリとういかにもパクリな名前のお店を回って用やく見つけた奴だ。なかなか配色が俺好みで気に入っている。

指に引っ掛けて落ちてこないように気をつけながら、視線をキッチンに送った。コトコト鍋が煮込まれていて、いい匂いを出している。生憎そんなに料理に詳しくない俺は匂いだけで料理を判別することなんてできっこない。なんとというサプライズ。誰もいないのに料理ができあがってるぜい。

「んなわけあるかい」

と後ろから声がかかった。

「あん？　なんでここにいの？」

はやてだ。

腰に巻きつけたエプロンを外しながら俺の方へ。その仕草、家庭的でグッドです。

「あんな、昨日あんなに前後不覚になるまで泣き叫んでいたのはどこのどいつや」

oh!

神よ、と言いつつ天を仰いだ。

そう言えば、かすかに誰かが最後に近づいて来ていたのを覚えている。

「もしかして、俺運んでもらった？」

「重かったで」

運んだか運んでないかではなく、重かったというあたりにはやての性格がでている。

「というか、昨日はやてに運ばれた記憶が全くないんだが」

「そりゃそうやろ。なんかおっきな声で叫んだ後に私見て倒れたんやもん」

げ、倒れるわけにはいかないとっておいて、俺倒れたんかい。

「まあ、あれだ。さんきゅーな」

「ええつて。当然のことをしただけや」

「そうか？ 普通は朝ごはんまでは作ってくれないと思うけど？」

軽口をたたきながら、用意された朝食を食べようと席を引いて座ろうとした。

「おっと？」

しかし風邪をひいた体では力が入らずに、椅子ではなくその隣の床

に座ってしまった。

「どうしたん!？」

はやてが心配そうに近くに寄り添う。

「だ、大丈夫。ちょっと風邪気味なだけだから……」

と俺が言ったのを聞かや、はやてはすぐに魔法を使って俺の体の調子をチェックする。

目の前に現れたディスプレイに次々と体の様子が数値となって現れる。

「なんやこれ! ぜんぜんちよつとやないで!」

はやてが俺を睨む。床に直接座っている俺よりも膝立ちをしているはやての方が自然と視点が高くなり、親に怒られているような気分になる。

思わず肩を小さくする。

「いや、大丈夫だって!」

このままでは堪らない。

必死で足に力をいれて立ち上がろうとしたが、平衡感覚が保てずに椅子にもたれかかる。

「ほら、まだ駄目やんか!」

はやてが俺の体に浮遊魔法をかけてベットの方まで運ぶ。

「わるいなあ……」

「うっん。ええよ、こんくらい」

動けないことをいいことに世話をされる。

なんだか自分がおじいちゃんになった気分。ちょっと恥ずかしい。

「今日はゆっくりせなあかで」

俺の肩口まで布団がかけられる。

はやてはリビングの方へ行った。ごはんの片づけをしているのだろう。せつかく作ってくれたのにできたてを食べれなかったことに罪悪感を覚えるが、後で必ず食べようと心に決めておく。

本気でユーノの恋を応援する……か。

一人になった部屋、閉じた暗闇の視界で考える。

……それでいいのか？

ふとした隙に現れた弱気な心。

……くっそ。

最近は口癖になってきた罵倒を口の中に飲み込みながら、俺の弱気な心がまた何度も囁く。

今ならまだ間に合うぞ。

本当にほしいものは何を犠牲にしても手に入れるべきだ。
一匹の雄なら雌を奪い合うのは当然だろう？

突貫で作り上げた決意という城は、まだ隙間だらけだ。

囁きはそんな隙間を広げようと押し入ってくる。

俺は弱気な俺をたたき伏せようと、負けじとつぶやいた。

……俺が奪ってどうするんだよ。彼女はユーノが好きなんだよ。

俺の弱気、否、悪魔がささやきを返す。

それがどうした？

直接口できいたわけでもないだろう？

それは俺の心の隙間を確実に大きくしていく。

……確かに直接聞いたわけじゃない。でも、俺は直感でわかった。

それは……間違ってる。

悪魔が笑う。

あざ笑うように大声で笑うと、ゆっくりと口を開き始めた。

何か決定的なことを言うのだろう。

ゆっくりと絶望に落ちるさまを、弱気な心に俺が支配される様を見ようと、奴はわざとゆっくりと、見せつけるように口を開いて

「起きとるかあ」

霧散した。

突然扉を開いて現れたはやての声を嫌うように奴は空気に溶けていった。

はつとしたように目をあける。目に直接あたる光に目を細めるが、変わらない。どうやら俺は完全に自己へもぐっていたらしい。

「総一さん？」

細めていた視線の先に覗くようにこつちを見るはやてが映る。

「おお、起きとるなら返事してな」

「……あ、ああ。悪い」

「どや、体の調子は？」

はやてが心配そうに俺の頭に手を当てた。

少し体がだるいが、朝に比べればそこまででもなかった。

……朝に比べれば？

思わず部屋の壁に掛けてあった時計を見る。

どうやら4時間ほど寝ていたようだ。視界を閉じたあの一瞬で寝ていたらしい。俺はのび太か。

「ん、熱はないみたいやな。やつぱ若いと治りも早いわな」

「いやいやはやても十分若いでしょ」

楽になった体で突っ込みを入れる。

はやてはそれにつれしそうに笑った後に、手に持っていたリンゴをむき始める。

集中しているのを邪魔するのも悪いと、最初は黙っていたが、どうにもこの沈黙が辛い。

「なあ、はやて」

「ん？」

シウルシウルとリズムよく皮をむいていくはやての包丁さばきに目を奪われるのを抑えられないまま、俺はちょっとした疑問をぶつけてみる。

「なんではやてが俺の倒れた所にいたんだよ？」

そう、これが結構疑問だった。

俺はあの時、本当にあてもなく走っていたし、あの倒れた場所の地名すら知らない。はつきり言っではやてがちょうどよく通りかかる可能性は皆無だと思っただが。

「それはこっちのセリフや。何で私の帰り道爆走した後に倒れるん。心臓に悪いわあ」

……なるほど帰り道ね。

「私が帰ってたら後ろからすごい勢いで爆走するから、青春やなあおもっとつたら総一さんなんやもん。びっくりしたわ」

大げさに驚いて見せるはやて。

「青春って……」

はやては肩をすくめるとそのまま作業を続けた。
沈黙が場を占める。

……青春ねえ。

これは青春って言えるのか。俺としては青春とは呼びたくないね。だってそうだろ。振られた男が必死に惚れた女の子の恋を応援する

なんて何処の芝居だよ。

間違いなく俺を転生させた神様が仕組んだシナリオだ。そう思うと従うのが癪だが、今更考えを改める気もない。

俺は本気で決意したんだから。

笑っていてほしいと。そう願った。

……そう言えばあれってはやても聞いたんだっけ。

昨日の俺を助けたってことは、多分俺の宣言を聞いてるはず。

朦朧とした意識の中だったから声がほとんど出てなかったってオチはないはず。

だとしたら……

「……………聞かないんだな」

呟きが漏れた。

「……………聞いてほしいん？」

手を止めず、二つ目の果実の皮をむきながら、彼女が言った。いかにも、何でもないような雰囲気をしている。

「……………いや」

思わず口元が笑みを作った。

……本当に彼女は……優しい。

俺が聞いてほしくないこと、聞いてほしいこと。それをわかってる。もしかしたら自分も辛い時期があった時の経験なのか、それとも純

粹に彼女の優しさがこの気配りを生んだのか。

「私は……何もせえへん。ただ総一さんがどうするのか……見といたる」

すべての皮を切り終わると、口を開いた。

何もしない。つまり、今までは笑いながらも手伝ってくれたのはへのアプローチの数々をこれからはしないということだろう。

突然知らされた戦力の低下に愕然とするが、彼女からしたら当たり前のことなのだろう。彼女の顔に悪びれた色はない。

きつと彼女はなのはと友達だからそうするのだ。

これからは俺は本気でユーノを応援する。それを手伝うとなるとはやても本気でユーノを応援していることになってしまう。

はやてはその立ち位置にいたくないのだ。彼女は本気でユーノを応援したいと思っているわけではない。だからその立ち位置にいやとしない。

「そっか」

俺はこぼれた声に残念そうな音を加えていった。

「でも」

「？ ……」

はやてがお皿に並べた果実の数々の一つにフォークをさすと、自分の口元へ運ぶ。

こっちにも聞こえるくらいのしゃきしゃきとしたつまそうな音をならす。

「私の意見としては、ちゃんと……なのはちゃんのこと、見てな？
ユーノくんとのこと意固地になるんじゃない、ちゃんのはちゃんのこと見てほしい。そうじゃないと……みんな不幸にな
ってまうよ」

……それには一理ある。

彼女が何気なくいった一言かもしれないが、俺はその意見にハンマ
ーで殴られたような衝撃を受けた。

……確かにいつまでもなのはがユーノを好きな保証はないもんなあ。

胸の奥がじくりと痛んだが、それを無視して近い未来を考える。

もしなのはがユーノを好きじゃなくなったら、それでも俺が二人の
中を応援して、二人が勘違いしたままに付き合い始めたら……その
ときは俺もユーノもなのはも、みんな不幸になるだろうな。
確かにはやての言うとおりだった。

「肝に命じておくよ」

強がるように俺は答えを返した。

無性に胸をかきむしりたくなる。

しかし今はやての前だ。鬱屈とした想いを溜めこみながら、精い
っぱいにはやての目を見る。

「ん。確かに聞いたで」

しばらくのにらみ合いのあとに、彼女は頬笑み、手に持っていた果
実を俺の口へと運んだ。

いわゆるあゝんのポーズに俺は気恥かしさを覚えつつ、やけになっ
てかじりつくのであった。

第十八話 「風邪引いた……」 (後書き)

シリアス終了のお知らせ。

もう二度とシリアス(複数話にわたったもの)は存在しません。
安心してお読みください。

ついでの連絡

しばらく更新を停止します。いわゆる書きだめのため。
次連続投稿が始まったら、最後まで一直線の予定です。

まあ、投稿するのに我慢ができなくなったら、途中でもしますけど。

追伸。

なんか……はやてフラグが立ってるんだが、気のせいかな？

第十九話 「ふらぐらしいです」

震える腕で携帯のスイッチを押す。

俺の携帯に移された番号は ユーノの番号を示していた。

吹き出る汗と脈打つ鼓動が頭を朦朧とさせる中で、俺は覚悟を決めて、そのボタンを押す。

電話で呼び出したユーノに俺は悪かったと言って謝った。

あいつは年不相応にも俺に笑って見せたさえた。

そういう所に俺はあいつの器の広さを知る。

俺はあいつから彼女を横取りしようとしたのにな。

ユーノは俺にむしろ大切なことを教えてくれてありがとう、言っていた。

多分なのはのこについて言った時のことだろうけど、俺にそんなつもりはなかった。

あいつにお礼を言われるようなことは何一つしていない。むしろ俺

が彼女を好きになっ^てしまっ^たというある意味では裏切りを^ずつと^していたのだ。

お礼をいう声を思い出すたびに、罪悪感が俺を苛む。

ぎしぎしと締め付けられる体を抑えて俺は笑った。
つまりところそうするしかなかったのだ。

俺は上手く笑えていたのだろうか。
答えはいつまでも出ることはない。

わからなくてもいいと思う。
ただ、無性に瞳がにじむ。

第十九話 「ベーシックプラン起動」

「やつほーーーー！！ 世界よ！ 私は帰ってきたーーーー！！！」

取りあえず叫びながら布団へとダイブする。

先日休んだ分の仕事を取り返そうと必死こいて徹夜で作業した結果、俺の体が睡眠と休養を無性に欲していた。

「そんでもって……………おやす……………み」

あまりの心地よさにまどろむ。

重くなってきた瞼が自分の意思とは無関係に閉じようとする。
この瞬間のなんとも言えない独特の浮遊感が実は好きだった。

朝起きた時は絶対に思いたせない眠る瞬間の感覚に自ら体を投げ込み……

「ぎゃあああああ！！！」

絶叫と共に飛び起きた。

薄い壁のマンションに住んでいるというのにとんでもない大声を出してしまった。

頭の隅っこで明日となりのおばちゃんに文句言われそうだなあ、と考えたがそんなことよりも……

なぜ、俺の布団の中にはやてがいるんだ……！！！！

布団を思いつきりめくった。

そこにはすやすやと眠るはやての姿が。

まだ12の少女が15の男の部屋のベッドで寝ているというのはいささか犯罪の匂いがする。

むしろ自分が警察官だったならば、いいわけを一切聞かずに豚箱へと入れる。それからやっと話を聞く気になれるというもの。

俺の額から汗が噴き出す。

そりやもつたらだと。

ぶっちゃけあまりの急展開についていけないのが本音だ。

「いや……まさか……！」

差別のように聞こえるかもしれないが、俺のもつイメージ通りの大阪的魂を発揮してくれるはやてによるドッキリか。

急いで周りを見渡す……が俺は近くに人すらも見つけることができ

ない。

「ビデオ……ビデオは何処だ……………！」

俺の胸元ですやすやと眠っているように見せているが、実はニヤニヤと笑っているだろう。容易く想像がついた。なんて嫌な女だろう。

「おい……俺はもう騙されんぞ。さっさとおきな！」

はやての体にかかっていた残りのタオルケットも勢いよく剥いだ。すると彼女は寒そうに体をすくめてブルリと体を震わせた。

「ん……なんや朝から騒々しい」

とりあえずチョップ一つ。

ほげっと声が聞こえたが無視。

「いったー。いきなりなんや！」

もう一発チョップ。

「ほう……家の主を差し置いてベッドに寝ている不屈きものに天誅を下したんだが……まだ足りなかったと？」

「あれ、あかん。なんか総一さんが本気や」

振り上げた手のひらから圧迫感があふれ出す。

それを見たはやてが冷や汗をたらだと流した。

「こっちはなあ、眠いんだよ。もう、すっげー眠いんだよ。なのに、はやてが俺の心臓に悪いことするのがさあ……………」

「す、するのが？」

「いけねーんだよなっ！」

思いつき振り下ろした。

「DVや。これは間違いなくDVやで」

なにやらあほなことをいうはやてを無視して俺は布団にもぐりこんで寝てから早数時間。

それなりに満足した俺が布団からでると、なぜか未だにはやてがいた。

「知るか、んなもん。で……そんなことよりなんではやてがここに
いるんだよ」

「んゝ、乙女の勘？」

「何に對してだよ……」

まあまあとはやてが俺に言った。

「落ち着けてか？ そんなどうでもいいことは横に置いて早く目的言わんか」

「あれや、かくかくしかじか……」

「四角いキューブ。……ってわかるか！」

とりあえず手元にあった布団をめくる。

「おお！ ちゃぶ台返しならぬ、布団がえしやな」

「は・や・て？」

「ほな本題にはいろつか」

俺が目にも力を入れてはやてを睨むと、ころりと主張を変えた。

「あれや、実はなのはちゃんが入院したやろ？ それでしばらくは交代でリハビリを見に行こうって話になってな。それで昨日は私の番だったんや」

「それで俺の部屋に来る理由はあるんか？」

「……帰るのが面倒だった？」

「疑問系！？」

「まあ、ええやん。そんなこと」

よくないわ！

と、言いたいところをぐつとこらえて、俺はもう一度布団の中に潜り込もうと寝っ転がった。

なぜかはやてからかまってほしそうな雰囲気伝わったけれど、そんなんどうでもいいや。

正直な話、また眠気が俺を襲ってきたのだ。

病み上がりからずっと続けた作業と昨日から考え続けているユーノ
応援プラン。どうにも俺の頭は二つのことを真剣に考えるにはスベ
ックが足りないようで、今眠気が半端じゃない。

…… ああ、ほんとどうしようかなあ。

二人とも両思いなんだから告白してしまえばいいのに。

と普通の奴なら考えるだろうが、それができないからあの二人は今
の関係だったのだ。

あの二人のどちらかが自発的に告白をすることがあるとしたら、そ
れは明日世界が滅ぶ時だ。間違いない。

とはいえ今まではなのはがユーノをどう思っているかわからなかつ
たからこそ使えない手段が解禁になった。これは素直に喜ばしいこ
とだ。

個人的にはハンカチを噛みながらじゃないと見れないと思うが、二
人一緒のパフェ食いとか…… あれだ。カップル用メニューとかも
これからの視野に入れられる。

他にも……

「えいつ」

ビシッ！

いい音を俺の頬が鳴らした。

「~~~~っ!!」

「おお…… ええリアクションや」

ひりひりと痛む頬を抑えつつバツと布団を跳ねのけてはやてへと布団を投げる。

それをこともなく浮遊魔法で回避したはやて。

「もう、ハニーったら照れ屋なんだから」

切れそうだ。

数あるSSで女の子に迫られるシーンがあるが、実際はきついつて目の前の女の子は12歳。俺15歳。ぺチャにせまられても、うれしくない！！

反応するのも億劫になった。

俺は敷布団の上に寝っ転がる。

「……へえ、なるほどなあ」

ほおっしておいてくれ。と背中語ったつもりだったが、なぜかはやてから鋭い怒気が伝わってきた。
あれ？

「ほおお〜〜」

日本の武術である空手独特の呼吸法をしているような音がした。
なぜか雰囲気ではやてが腰ために拳を構えているような気がする。

「総一さん。なんでも日本には気合いを入れる時にはなんかしらのお約束を叫ばなくちゃいけないらしいですよ？」

……俺はなにかしたのだろうか。

はやてが敬語だ。

もしかしてあれか。寝る前に感じたはやてのかまってほしいオーラを無視したのがいけなかったのか。

いやいや、そんなちびっこでもあるまいし

「ちえりおおーーーー！！」

「ぐえーーーー！！」

「いや、まじで俺なりにしたよ」

つーん。と顔を膨らませてそっぽを向くはやてに苦笑しつつ俺は背中を押さえていた。

はやての一撃（魔力強化済み）は背骨への的確なダメージを俺にプレゼント。エビがやってはいけないポーズをとりつつ跳ねること三分。ようやくおさまった痛みに顔をしかめつつはやてと向き合ったのだった。

「なにもないわ」

字面だけ見れば冷たい印象を与える言葉だが、美少女が拗ねて目線を合わせないように言っているの、人によってはご飯三杯いけるのではないだろうか。

もちろん俺は無理だ。

背中の中の痛みが、飯がのどを通らない気がするぞ。

「じゃ、なんでふきげんなんだよ」

「別に不機嫌じゃないっていうとるやろ」

じゃあどうしろと？

どうすることもできないこの状態。

転生前はこういうのが面倒で女の人が苦手だった。

なんでもこういうのは女の子の何かに気がついてほしいサインらしい。

母いわく、女の子はいつだって男の子にサインをだしてるのよ。：

…もうすこし気がつきやすいサインをくれはしないかな。

「はあ、とりあえず……飯でも食べに行かないか？」

俺はどうにもこういうのが苦手だ。

苦肉の策だが、場所を移そうと言外につたえた。

「……場所は？」

「……ミッドの適当な酒屋？」

とりあえず思いついた店をいつてみた。

はやての顔がさらにむっとなった。

「いやや」

「じゃあ、この前行ったパスタ屋」

しかし俺としては紺くらいしかはやてのご機嫌をとれそうな方法がない。

諦めずに違う店を上げる。

「……いやや」

「なら弁当屋」

「絶対嫌や」

何件も上げていくがはやてはどうにもお気に召した店がないのか縦に首をふることはない。

どうすっかなあ。

気合いをいれて高めの店をいって見たが駄目だった。

「……しゃあねえ。なら俺の手作りでがまんしろよ？」

自分が知ってる店を片っ端からあげて、結局全部だめだった。やけになって手作りを進める。

俺の飯はそこまでうまくはない。一人暮らしで手に入れたスキルの熟練度がそんなに高いはずがないのだ。

「……それなら、いいで」

しかしあわや意外。はやては俺の提案に頷いてしまった。

「お、おう。そっか」

なぜと思う前に俺は頷き、すぐに立ち上がった。

そのままキッチンへ。

するとはやてもついてきた。

「私もいつしよに作る」

ぎこちなく動く俺を見たはやてが続けていった。

「どうせなら私が料理の採点したるか？」

若干俺より低い位置にある瞳が挑戦的に輝いた。

「へえ、いったな。点数のつけられないのを作ってやろうか？」

「シャルみたいに食べられない意味で？」

「……そちのほうがいい？」

「そう簡単に作れるとは思わん方がええよ？」

ふふふと妖しく笑った。

……おお、そこまでこの世界のシャルはやばいのか。

「そもそもあれは人類にはまだ早いで」

「レベル的に？」

「そんなもんやない。格闘戦縛りのボールがキュベレイに勝つくらいの技術革新が起これんと」

「わかりにくいわ！」

「ユニバースなら限界突破すればまだ目があるんやけどなあ」

そのネタ……誰もわからないんじゃないかなあ。

なぜかトリップしたはやてを置いて冷蔵庫の中を見る。

一応自炊はしているのでそれなりに食料はある。ミッドの技術で賞

味期限が地球よりの長いので長期保存もきいて便利なんだよね。

「うん。ナスとピーマンもある。というか結構野菜あるじゃん。お、エビもあるし豚肉もある」

「へー、意外とあるんやね。それならマーボーナスとかどうや?」

「中華かあ、それもいいけど、どうせならエビも使いたい」

「ならグラタンとか?」

「いや、これなら八宝菜にしよう。エビも使えるし」

「八宝菜? 野菜八種類もないで」

「いや八宝菜って野菜以外も数えるらしいぞ。少なくとも俺の家はそうだった」

なつかしい。

すでに過去の記憶のなかにある家族の食卓では、親がめんどくさがりだったからいろいろな野菜を突っ込める野菜スープと八宝菜がよくでたものだ。

「家族……?」

と軽い気持ちで話したらはやてが首をひねった。まずい。そう言えば俺拾われっこだったけ。

「スクライアのな」

「いやいやスクライアになんで中華があるん!?!」

冷や汗がでる。

これはまずい。こういう時はとにかく押すに限る!

「いいんだよ。あったんだから。ほらやるぞ」

いぶかしむはやての手にどんどん野菜を回していく。

「さあさあ、どんどん作っちゃまうぞー！」

それなりに美味しかったところに記しておこう。

第十九話 「ふらぐらしいです」(後書き)

お久しぶりです。

タイトルを本気にしないでください。

まだ全部は書き終わってませんが、とりあえずSTSまでは書き終わったので投稿。

今週はずっと毎日投稿できそうです。

第二十話 「どーしよっかな」

「うーん、どうしようかねえ」

目の前に現れたディスプレイと顔を近づけてにらめっこしながら俺は頭を抑えて考えてごとをしていた。

「もう遊園地は行ったしなあ。今は地球は冬だっけ？ それならやつぱりスケートとかか？」

ディスプレイに映し出されたものはネット上で集めたデートに関する情報の数々。その一つ一つの内容を吟味しているのだ。

「……………悩む」

俺が仕事をの合間を縫って考えていると、横から俺の手元を覗こうとしている女の子がいた。

「なにしとんの？」

「みりゃわかんだろ」

俺は少し前まで共犯者だったはやての行動にどうすることもなく、普通に話す。

最初のころだったならばチョップのひとつもくれていたが、今はこいつには隠さなくていいかなあ、って感じ。

「ふむふむ。デートなあ。でもこれって大人っぽくない？」

「どうゆーこと？」

「私やったら、もっと子供っぽくていいと思うけどなあ」

はやてが俺のメモを見て口を出す。

応援しないといっていたくせに、なんだかんだでいろいろとアドバイスしてくれる。とはいえなのはの情報を教えてくれなくなったので、戦力ダウンは否めない。

「たとえば？」

「そうやな、今やったら魔法関係のほうが好きいんやけど……この前なのはちゃん退院したばっかやから……ちよつと落ち着いたところのほうがいえんちゃう？」

ふむ。なかなかの意見だ。

でもなあ、今までのデート的なのはは活動的なほうが好きなんだよね。

「なら料理とかどうや？」

「料理？」

「そや。なのはちゃんもそのうちミッドのほうで一人暮らしをする言うてたで。そのための料理教室や」

「といっても……誰が教えるんだよ。あれでなのはもユーノも料理うまいけど？」

「だからお互いに故郷の料理の教え合いとか」

つまりなのはにユーノがスクライア独特の料理を教えると。

……ちよつと面白そうだ。

俺はニヤニヤしつつユーノにメールを送る準備を始める。

「ほいほいっと。こんなんでいいだろ。あとはユーノがなのはを誘

えるかだな」

「ん？ まだユーノくんのはちゃんのこと誘えないんか？」

「いや、そうなんだよ。もう何年の付き合いだって話だよな」

ユーノはあれでかなりがんばっている。

しかしどうにもデートと意識をすると途端に尻こみしてしまうらしい。……普通には誘えるのにな。

まったく……そろそろ男みせろよ。

第二十話 「どーしよっかな」

「というわけでなのはと料理教室でもやろうかって話が一番上にでてる」

「なるほど……料理教室か。それはおもしろいかもね。うん、誘ってみるよ」

電話越しにユーノから簡単に返事がいただけた。

今回はデートという感じではないと自分でも思っているんだろう。そんなに意識してなさそうだ。

まあはやてが俺に、意識してがちがちの状態で料理とか死にたいん？　といったから意識させないようにしたっていうのが正確な状況なんだがな。

かなり料理にこだわりのあるはやての後ろには般若がいたよ。

「オツケー。多分目的が目的だからフェイトとかも参加してくると思うけど、はやての家でやるから参加しても大丈夫だって言うって？」

「たぶんフェイトは来ないと思うよ」

「あれ、そうなの？」

「うん。今フェイトは執務官試験の準備で忙しいからね」

執務官試験。

法の番人を名乗ることが許された存在。管理局の仕事でも特に外部に影響力を持つことを認められた資格。

もちろんかなりの権力をもつ執務官になるためには知識と実力が必要だ。

コネでなることは絶対にできないその仕事になるためには五浪は普通なんて話を聞く。

フェイトは優秀すぎるから一発行けるか？　と期待がかけられてる

らしい。

俺からすれば雲の上の出来事なので、頑張ってくれと月並みなセリフしか言えないが、とにかく凄いことなのだ。執務官試験に挑むということは。

なぜか頭の中にサムズアップしたはやてが、うちは上級キャリアー発やったけどな！　といていた。

「……………」

思わず額を押さえてしまった。

俺の頭の中にははやてはいつの間にか何か仕込んだのだろうか。

「ソーイチ？」

「ああ、いやなんでもない。とにかく明後日の昼にははやての家に集合ってことで」

最後に俺は注意点をいくつかあげて、その電話を切った。

「ふう……………」

一つ目の仕込みを済ませると、そつと息を吐いた。

それを感じ入ったようにしばらく佇んだ後、再び携帯を耳にあてる。

「お、もしもははやて？」

「総一さん？　何かあったん？」

「うん。この前の奴なんだけど、ユーノから返事もらえたよ」

電話の相手ははやて。

はやての家を使うのだからどうなったかを話しておくべきだろう。

「どうやって？」

「オッケーだつてさ」

電話の向こうでワイワイと騒ぐ声が聞こえた。

どうやら、向こうでいつも忙しいヴォルケンリッターが何人が揃っているらしい。

「そつか。いろいろ用意せなあかな」

「あれ、応援はしないんじゃないの？」

「応援とちゃうもん。純粋に遊びに来る人をおもてなしするだけですう」

すこし前時代的な話し方をしたはやてに少し笑う。

似合っていないっつーの。

「どんなのを用意する気だよ」

「うん。正直な話、事前に聞いておいてほしかったで。こうなるまえに」

「まあ、その辺、次は気をつけようってことにしておいて」

明日から本気出す。

最近の俺のお気に入りだ。

「あかん。そういってると、いつまでもやらへんからな。今すぐ電話で聞いてな」

とはいっても、どうやら彼女には通じないようだ。
かわいそうに、彼女の子供は大層苦労するだろう。
主に溜まった学研を大量処理する時。

大抵は後ろの答えを一気に写すんだけどな！

「あのな、男つてのは一度電話を切ったらしばらく電話をしないもんなんだ！」

通じないならば、他のやり方で攻めるのみ。

男のプライドを前面に出して彼女の意見を殺しにかかる。
ぶっちゃけた話、折り返し電話するのだ面倒なだけだった。

「なんやそれ。初めて聞いたわ。あれなん、女は厨房的なノリ？」

「というよりも見栄。ぶっちゃけ電話してもいいけど、なんとなく電話しにくいだけ」

「ならええやん。電話してな」

「話聞いてた？」

「そんな男の見栄をうちがわかるわけないやろ。ほら、さつさとする！」

尻を叩かれる駄目亭主のように俺ははやてに急かされる。
ついでに今の気持ちをそのままはやてに伝えてみた。

「て、亭主って……」

お、これは恥ずかしがるお約束か、と思ってみたが、

「んなあほなこと言っていないでさつさとやり」

一蹴された。

それどころか、

「私は自分より給料高い人じゃないと結婚する気ないで」

「うつ……っ！」

俺の安月給についてのコンプレックスを攻撃してきた。

……知ってるか？

俺はせいぜい日本で言うサラリーマンの平均給料くらいはもらっているのだが、はやては俺とまさに桁違いでもらっている。

なんせ危険手当に指揮官補正、Sランクとしての給料もついて、とんでもない額をもらっているのだ。

はつきり言ってテレビ局員くらいはもらってるんじゃないかな。詳しい数字は教えてもらってないけど。

これにヴォルケンリッターの給料も重なるのだからとんでもない。それを使って今度ミッドチルダの郊外に6LDKの家を買いたい。どんだけ金持ってたんだよ。

ちなみに俺たちで一番お金を持っているのはフェイトさんです。彼女はプレシアの特許等であほみたいに金を持っているから。

この前億単位の車を見ながら、「いいなあ……買っちゃおうかな」とつぶやいたのを俺は見逃さなかった。

とりあえず……ドカッティ。なんで君なんだね。俺はフェイトを小一時間叱ってやりたかった。お前にはまだ早い！

「い、いいんだよ。俺はそのうち美人な女の子……とは言わないけどそれなりの子捕まえて幸せに暮らすから！」

苦し紛れに俺ははやてに言うが、ニヤリと笑っただけだった。その笑みが語る。

……女の子、いるといいね。

ほんとにお前は小学生か……

第二十話 「どーしよっかな」(後書き)

かんそおおおおおおお!!!!

第二十一話 「日記 新暦69年」

新暦69年 月 日

再び日記を書こう。

今日はすいすいことが運んだおかげで順調だったよ。
なにがって。そりゃ料理教室さ。

おかげで俺のレパートリーが増えた増えた。
はやてに教わりながらユーノが持ってきたレシピに二人で手を加えながら日本風にしたり、なのはが持ってきた和菓子に舌包みをうった。

意外にもなのははケーキ以外に和菓子も作れたらしい。簡単な作りかたを教えてくれたので、これからはお祝いの席に持っていきこうと思う。別世界のお菓子ということで結構ウケるはず。

そしてユーノとなのはのほうの距離もどんどん縮んでいった。

俺たちが空気を呼んではやてに集中して教えてもらう振りをして、なのはをけしかけてユーノに料理を教える。

なのははまだユーノが好きだという自覚がないようだが、それにさえ気がつけばあとは一気に縮まるように足場を固めているのだ。

この自覚までが大変だというのはわかってはいるが、片方が気が付いているなら告白さえ済ませればあとは簡単だ。

さあ、どんどんユーノとの距離を縮めるがいい！

月×日

ユーノとなのはがふたりで出掛けたい。

……………今日はもう寝る。

月 日

……………驚いた。

いきなりふたりで出かけるとは……………ユーノにかしたのだろうか。
応援するとか距離が短くなれとか言ってるけど、案外ショックだったらしい。

二日目の日記の量がいきなり短くなってることからわかるな。

というわけで、仕事が休みだったコールをつれて昨日に続いて今日も消えた二人の足取りを追ってみた。

以前はできなかったデートの追跡。心が弾む。

と思えたのは最初だけだった。

なぜか二人は電車に乗って山の中へ。

……………いきなり野外？

まあそんなわけがないよね。

わけわからないが二人がどんどん山の中へ行くから俺たちもついていく。

しかし武装隊に勤めるなのはと、一応訓練を欠かさないユーノの体力は俺たちの数倍はあったようで、俺たちは息も絶え絶えになりながら追いかける。

どうにか追いかけて遅れるように頂上に着いた俺たちだったが、体力の限界になって二人に見つかっちゃった。

あらら、何してるか見たかったんだがな。

とコールが笑ってたけど、なぜか二人は焦ってた。

やっぱりエロいことかな。と思いつつ、なのはの浮遊魔法で下山しました。

山はしばらくいいやあ。

月 日

……エロいことか言ってすみませんでした……！！

直接いう勇気が無いので日記で失礼。

俺が死んだらこの日記を読んでくれ。

ユーノごめんな。

俺はてっきり二人がエロい方向で山に登ったとずっと思ってたんだ。

もしくは二人つきりというどこかエロい気持ちになれる言葉を求めて登山したのだと。

まさか俺の誕生日プレゼント取りに行ってるとは思わなかったよ。俺が昔から集めていた青い水晶。

遺跡から掘り出される水晶がジュエルシードだったらしいなあと思いつつみんなにもらっていたのをユーノは覚えていたらしい。

別に青い水晶が好きだったわけではない。ジュエルシードだったら……と妄想して楽しんでただけなんだ。

前日は水晶を買いにデパートへ。

あんまりいいのが無かったので、山に直接取りにいったそうだ。

正直感動した。

俺すら覚えてなかった誕生日を祝ってくれる弟。

小さな水晶の破片にひもをつけてネックレスにしてくれたとき、本気でうれしかった。

二人からのプレゼント。大切にする。

月 日

あああああああああ!!!!!!

なんてこと書いてんだよおおおお！！

恥ずかしすぎるだろ！！

しかもボールペンでかいてあるうううう！！！！

黒歴史iiiiiiii！！

……………ふう。落ち着いた。ハチャメチャにいろいろ書いたら落ち着いた。

しかし……………なんてこった。あんまりにも感動しすぎていろいろテンションが振りきれたらしい。あほなこと書いてたわ。

……………うれしかったのはほんとだけどさ。

月×日

しばらくぶりに遺跡発掘に参加した。

驚いたことに遺跡の中に和室があった。

ユーノは驚いて、いろいろ調べようと中にあつた掛け軸に触れると、壁が回って後ろの通路が見えた。

……………どうやら忍者屋敷だったらしい。

これはおもしろそうだ。

明日本格的な調査が入るので俺は何もできないが、後で報告を聞いておこう。

×月 日

今日記を書いているわけだが、その日記の横には一つのデバイスが置いてある。

そいつはルビーのように真つ赤な姿をしている。

俺の部屋に付いている安物の電球の光さえ、そいつにかかればすべてを魅了する魔の光になるらしい。掲げて透ける光は血のような赤をしていた。

そう、もうわかるだろう。

こいつの名前はレイジングハート。

超高性能のデバイスだ。

……なんでこいつが俺の手元にあるのか？

それはな、なのはが俺を指名してくれたんだよおおっ！！

ほんとならうれしい。飛び跳ねるくらいうれしいさ。でも……でも今だけに限ったらうれしくない！

前にも言ったけど、レイジングハートはなのはに合わせた特殊な設定がされたデバイスで、高性能ゆえにめちゃくちゃ高いパーツが使われている。

しかもソフトでも個人に合わせたプログラムだからめっちゃピーキーな使用なのさ。

つまり何がしたいか。

俺の手に余る。

まじ無理だつて。

例えるなら偏差値55の大学狙ってるやつに東大の試験問題解かせるみたいな感じだ。

できなくはないけど……時間をくれ。

そして参考資料と過去の対策もくれ。

それがあれば………できるんじゃないかな？

というわけで、でもなのはは笑って、

「総一さんなら一日で大丈夫だよな」

とのたまいやがった。

無理。まじ無理。

と言いたかったがあのにきらきら光った目は反則だつて。

隣にいたユーノはある程度俺の仕事に精通しているので頬が引きつっていた。

俺は速攻でユーノに泣きついて資料を集めてもらって、今まで必死だったわけだが……人間頑張ればいけるもんだね。

どうにかまにあつた
(以下の部分にはよだれと思わしきものが)

第二十二話 「日記 新暦70年」

新暦70年 月 日

なのはたちが14歳になった。

つまり俺がこの世界に来てから八年が経ったというわけだ。タッタ
！。

八年あつたらバイトヘルでドンくらい稼げるかな。

×月 日

日記を書く暇がないんだが。

なぜだろう。去年のレイジングハートの整備が評価されたらしく微妙に出世した所為なのか？ 明らかに俺の手にあまりそんな奴まで来るんだが。これがなのはの紹介じゃなきゃ断るんだが、断れないところが俺の弱みだね。

とりあえず最近の出来事をここ書いておこう。

最近ユーノの方もいろいろと忙しいらしい。

詳しくは機密事項に当たるので俺の教えてくれはしないが、ちょこちょこめんどくさい機械兵が管理外世界に現れているそうだ。

……スカさんですね。わかります。

ユーノは未だになのはを落とした恨みを忘れていない。粘着質な男に捕まったのが運のつきだったなス力。

それ関係でクロノのほうも動いているそうで、二人とも忙しそうにしている。

なのはも教導隊に入って楽しそうだ。

おかげでみんなの時間がかみ合わず、まともに恋愛関係の計画を進めることができなかったよ。

いいか。未来に読み返すであろう俺。

ユーノの行動はすぐにヘタれることを忘れるなよ。

×月 日

久しぶりに会ったなのはと食事に行った。

個人的に美味しいと思ってる駅の近くにある屋台に食べにいったんだが、どうにも彼女の顔色が悪かった。

どうしたのかと聞けば、彼女の担当している生徒が自分の才能不足を感じて管理局をやめてしまったらしい。

別にそこまで悪いわけではなく、生徒自身もまじめで応用力もあるいい生徒何だそうだ。

しかし、初任務で失敗したのを引きずってしまっているらしい。

なのはは短い間の教導でそれに気がつけなかったことが悔しかったらしい。

俺からすれば短い間の教導で気がつけという方が無理だと思うのだが……彼女にとっては違うようだ。
愚痴を聞いているとだんだんそれ以前の小さな失敗のことも言い始めた。

……私って教導向いてないのかな。

びつくりした。

彼女がいつも笑顔で自信にあふれていたから。

俺は俯いているなのはの肩に手をまわした。回しそうになった。
後ろから大丈夫。そう声をかけながら励ましそうになった。

でもしなかった。

俺は何も言わずに酒をグイッとんだ。
酒以外にもいろんなものを飲み込んだ。

俺は疲れて船をこぎ始めたなのはの視界の外でユーノへメールを送った。

『××の屋台でなのはがお前の助けを求めているよ』

寒くなってきたなのはの体にコートをかけることもなく、ただ彼女の愚痴を聞きながら待った。

そろそろユーノが来るだろうな、そう思ったころにはなのはは寝ていた。

俺はその後にきたユーノになのはを任せて、一人家に帰った。
そして俺は今日、日記をかいた。

×
月
×
日

第
二
十
二
話

本局で上司と新しいデバイスについての整備方法や、理論。挑戦的な論文が発表されることになり俺はその学会に出てきた。

どうやら新しく発表された理論的にミッド式でもカートリッジシステムの術師の負担が減るらしい。

デバイスにも強い負担があったカートリッジがより安全になるというならこっちとしてもうれしい。

すぐさま実装されるようになれば、それに合った整備方法を俺も学ばなくてはいけない。

これから忙しくなるだろう。

と思って急ぎ足で仕事場に帰ろうとしてたんだが、帰りにはやてにあった。

未だ研修期間とはいえ、守護騎士の主として事件の解決に尽力しているようだ。俺の耳にも聞こえるくらいの活躍をしている。

なのは、フェイト、はやての三人は若手トップとして他の若者のあこがれとなっているらしい。

軽く最近のことを話していると、はやてからなのはのことが聞けた。なんでもこの前の愚痴を俺に話した後、ユーノと一緒にいてそれなりにストレス解消になり、悩みも解決したらしい。

俺にもお礼を言っておいてだとさ。

はやてが不安そうにしていたが、俺は特になにも思っただけだった。いらいらするとか、そんなことはなく、純粹になのはの悩みが解消できてよかったと思っただけだった。

俺も壊れたのかな。

ほんとだったらもつと嫉妬してもいいような気がするし。

でも本当のことなんだよね。
ほんと……どうにも、変なことばかりだよ。

月 日

ユーノが今日も告白するといって俺の家で宣言した。

告白するぞおおっ！ といってやったことは無いので、どうせ今日もいつもと同じように酔い潰れて終わりだと思ったが、なんと！ 意外なこと（？）にユーノはその場でなのはに電話をつないで今から会えないかと聞いていた。

正直興奮した。

だってユーノだぜ。

お酒を飲んでいるわけでもなく、素面でなのはに告白しようとしてるんだ。

これは明日次元振がおきるかもしれない。

コールとあとで笑おうと2000万画素のビデオを回してなのはを待っていたら、駅の向こう側からなのはがきた。

うすいピンクのスカートと上に白のキャミソール。

あんまりおしゃれをしないなのはの服装に俺たちはたじたじだった。ユーノはそんなかわいらしい姿をみてさらに気合いを入れたのか、なのはの近くによるとたどしく話し始めて……そこで気がついた。

なのはの後ろにいっぱい人がいるんだが。

えっ。

と思うまでもなく、後ろには大量の目。

どうやらなのはは教えていた生徒たちに誘われて食事にくらしい。ちょうどそのコースの途中にユーノが指定した場所があったと。

生徒たちはすべてを悟ったらしくニヤニヤ。

俺、ハプニングにニマニマ。

真っ赤にしてユーノはあわあわと言っている。

なのはは首をかしげる。わかってない。

行け！ 行け！ 公開処刑だ！

と思っていたがユーノが大衆の前で告白できるわけがないよね。
うん。そこーで逃げたよ。

ああ、もう少しだったのに。

月 日

最近の女子高生ってすごいよね。

なんていうか足細いし腰はきゅってしてるし、胸はボインだし。

外国では15、6が一番きれいだって言われるくらいだからね、フ
イトとかやばいよ。そしてなのはもやばいんだよ。
もう俺なんて悩殺されそう。ユーノはすでに時遅し。

今日電車でなのはたちと出かけたんだが、満員電車でさ。ユーノが
なのはを守るような位置に行かせてかつこいいところを見せようと
したんだけど……うん。ぎゅーぎゅーだったんだ。そしてなのはの
胸とユーノもぎゅーぎゅーだったんだ。

……たおれました。心臓とまっていました。

なぜか俺が人口呼吸役です。

人命救助……おい……しい……で……す……

月×日

気が付いたら三カ月たってんだが。
なにがおきた。

月 日

イエーイー!!

君を好きでよかったあああああああ!

バンザーイー!!

君に会えてよかったあああああ!!

このままずっと、ずっと…… L A ・ L A ・ L A ふたりで。

今日ユーノがカラオケでなのはをガン見(・・・)しながらあの名
曲を歌った。
きめえ。

しかもなのはに気がつかれないでやんの。
美声が響いてる間ずっとなのははランチみてたわ。

ざまあ。

月 日

昨日のカラオケのユーノを爆笑しながら気分よく寝たわけだが、コールはどうにも違ったらしい。
コールいわく、

あの盛ったサルみたいな求愛行動はひく。あれじゃなのはは落とせない。

……よくよく考えてみるとそうかもしれない。

やりたいやりたいやりたい。

と目で言ってるような男に誰が近寄りたいと思うのか。

今日はちよつと反省した。

今度から雰囲気を作るんじゃなくてユーノをいい男に改造しよう。

第二十二話 「日記 新暦70年」(後書き)

バンザイは名曲。

そしてあの求愛行動は実際に私の友達がやりました。
ええ、もちろん 成功しました。エッ？

私がちゃかして、「ガン見スナ。好きなんか？」 といったら。

女「え……」

男「……実は……(てれてれ)」

周り「まじ！？ 付き合ってみれば？」

女「じゃあ……つきあって……みる？」

男「……うん」

という流れが発生したのです。

今も思う。そんな始めでいいの？

……このサルがあ。

第二十三話 「合コンに行こう」

「合コンしよう」

いつぞやのボーリングのときのようにコールが言った。

「いきなりどうしたよ。というかお前フェイト一筋じゃなかったのかよ」

俺はコールが今まで越え高々に宣言していた言葉を覆したことにそこはかとなくイラッとしたので、強い視線を投げかけた。

「いやな。俺は今でもフェイト一筋さ。でもな、ここらでそろそろ青春しておこうかなと思って」

「おいおい。合コンが何で青春につながるんだよ」

鼻で笑いながらコールを見る。

何で青春なんだよ。むしろ俺は現在青春中（ただし灰色）ですけど何か？

「はっ……お前ともある男が、知らないのか？ 愛のない青春は価値のない青春だということを！」

「……それがどうしたよ」

コールは俺の好きな人が誰かということを知っている。

こいつはなかなか鋭いやつなのだ。だというのに、俺の心の傷をつくとは。なんか俺に恨みでもあるんか。

コールが俺の肩に手を回す。

耳元に口を近づける。近い近い。やめてよるな。
が、かまわずに俺の耳元でささやき始める。

「……なに、健氣にがんばる総一君のプランを応援してみようと思
つてな」

「……」

「俺の計画はこうだ。俺と総一でなのはとフェイト、はやてを呼ん
でこっちは俺たちに追加でユーノを。そしてお店は飲み屋だ……あ
とは想像がつくんじゃないか？」

俺の体に電流が走った。

「……………お酒……だと」

「そろそろ、あの子達もお酒の味を知ってもいいと思わないか？
日本とは違ってこっちは明確な年齢制限はないしな。少しくらいは
お酒に耐性もたせないとまずいだろ？」

ミッドチルダは多様な管理世界から人がくるためいろいろな習慣が
混ざっている。

くる世界によつては幼いころからお酒を飲めるし、逆にお酒を飲むの
は特別なときだけという世界もある。この辺は宗教観の違いなので
法律で決めると、面倒なことが起きるらしく、あくまで自己責任で
何歳からでも飲めるようになってしまっている。

もちろん拒否する人間に無理やり進めた場合は犯罪として取り締ま
っているが、それでも子供にお酒の味を覚えさせて飲みつぶそうと
する大人は管理局にも結構いる。コールはそういった人間にだまさ
れるよりは自分たちで初めての体験をさせてあげようということな
んだろ。

そしてあわよくばユーノとなのはの本性をさらけ出してこのまま一
気に二人の関係をランクアップということか……………いや、待てよ。

「お前……………そういつて実は酔いつぶれたフェイトをお持ち帰する
つもりじゃないよな……………」

「え？　なにいつてるんだい？」

コールが俺の目を見ずにそういつた。

……………昔聞いたことがある。初めてお酒を飲んで酔いつぶれた女の子
をお持ち帰りする事件が何件か毎年発生しているという連絡を。

「……………」

「やだなあ。そんなことしないって!」

汚物を見るような目をむけてみる。
すごくコールはあせってる。

……………おいおい。お持ち帰りはまずいつて。

といいつつ、俺もその計画に乗っかるのであった。

第二十三話

「というわけでユーノ。合コンしようぜ」

俺はデバイスを用いた通信でユーノにつないだ。

「ずいぶんとまあ、突然だね。予想はつくけど一応聞いておくよ。相手は？」

「なのはたち三人組」

ユーノが安心したようにほっと息を吐く。

音声のみの通話でもユーノの心情が手に取るようにわかる。

おおかたなのは以外とはそういったことはしたくないってロマンチストな考えを披露したただけだろ。

「そっか。じゃあ僕も行かせてもらうよ。楽しそうだしね……それにしても、よく彼女たちの休みが重なったね」

彼女たちは忙しい。そりゃもう。とんでもなく忙しい。

万年平の俺やコールとは比べ物にならないに。

なんせ向こうは近年まれに見る才能の塊。それもそろぞれが別々の方向に才能を特化しているから仕事もかぶらない。その類まれな美貌と才能から、伝説の参提督の再来なんていわれてる。

あの参提督と比較されるなんてぶっちゃけドンだけだよ。

なのはにいたっては管理局が一人にしか与えない称号のエースオブエースになるんじゃないかって言われてる。おいおい、最強の魔導師の称号じゃねーか。

そんな彼女たちの成長期とも言える今の時期は、とんでもなく忙しいのだ。

忙しさだけならこの前出世した無限書庫司書長のユーノもためをはるけれど。

とにかく彼女たちの忙しさは異常だ。この前までは学校との二束わらじだったからそこまでもなかったけど、学校を卒業してこっちに本格的に腰を下ろしたからこそもう大変。

なのはたちも仕事が楽しいから……悪循環だよな

「よくわかんないけど、ちょうど休暇を申請してたらしいぞ。で、そこに俺からのお誘いの電話があったというわけで」

「ふーん」

「とりあえずラッキーって思いながら飛び跳ねとけ」

「しないって」

「ノリ……わるくなっ たな……」

なんか向こう側からイラツとした雰囲気か聞こえたけど、軽く無視。その後、予定日を伝えると次の人に連絡をしようと電話を切ることにした。

「じゃ、またなんかあったら連絡するわ」

「うん。なるべく早くお願いね」

「おっけー………そういえばコールがフェイトをお持ち帰りするのが合コンの目的らしいよ」

「えっ、ちょ、それってどういう」

「

ブチッとな。

「ん、わかったわ。とりあえずなのはちゃんのほうにもそう伝え

とくわ」

次に連絡したのははやて。

なんだかんだで仲のいいこいつとは結構連絡を取る。

まあほとんどがこいつの愚痴を延々と言われるのがほとんどなんだが、そこはご愛嬌といったところか。

はやてはあんまり愚痴を言う相手がいないらしい。今まではなのはたちにも言っていたらしいが、新しい生活環境にもっぱら言われる役のほうが一番最近が多いらしい。

だからだろう。最近はずっと連絡をとっていた。

俺も妹分のこいつのストレス発散に付き合うのもやぶさかではないし。

「よろしくなあー。とりあえずお店でお酒を飲む予定だから次の日に何か入れんなよー」

「どうせコール君がお持ち帰りしたいとかいって始まった企画なんやろ？」

余計なことを考えながらはやてに説明をしていたのが悪かったのか、彼女はコールの狙いを看破していた。たいした洞察力なこと。

「そら指揮官志望やからな」

あんまり関係なくね？　と思うが口には出さない。相手は歩くロストロギア。余計なことを言って寿命を減らすのは得策じゃないだろう？

「ま、そうはいつでもホンマにフェイトちゃんがつぶれたら介抱してくれそうやけどな」

「だろうな。あいつなんだかんだで優しいし」

電話越しで話を続ける。

はやては画像ありで電話してもいいやないか、って言うけれど俺としては電話なのに相手の顔が見えてるとやりにくいこと。正直こんな機能いりません。

黒電話ほしいつす。

「料理はちゃんとおいしいところで頼むで」

「はいはい。もちろん俺とコールで下見を済ませてあるから安心してなつて。ついでに言えば男側からのおごりなんだし、気兼ねなく楽しめるような企画も考えてる」

「ほな、期待しとるで」

さて、と。

なのはたちへの連絡ははやてがやってくれるようだし、合コンまで

に俺がしなくちゃいけないことはもうないだろう。
お店への予約も済ませたし、特にやることはない。俺は気分よく合
コンまでの予定を済ませられそうだ

ブルルル。

と思っていたら電話が鳴った。
誰だろう。

ユーノ・スクライア。

いやな予感しかしないんだが。
しかしながらこれをとってしまうのが俺のいいところ。

「もしもし?」

「もしもし、総一!? 実は合コンのことなんだけど どん
な服着ていけばいいかな!?」

……一言いわせてくれ。

確かに俺はお前の恋を応援するとはいった。でもなあ そのくら
い自分で考えろよ!!

といいつつ今度行く服やを頭の中でリストップするのであった。

第二十四話 「服って大切だよね」

服って大事だと思うんだ。

例えばよれよれの服を着ているやつと、ビシッとした服を着ている奴。

初対面でどっちの方がいいイメージになる？

勿論ビシッとしたほうでしょ。

だって服がビシッとしている奴のほうがしっかりしてそうじゃん。

それにちゃんと服を選んできてるやつのほうが努力してるから話していて楽しいしね。

まああれだ。

つまり何が言いたいのかというと、今日は服を買いに行く話だよってこと。

第二十四話

「服屋につきました」

「誰に説明してるんだよ……」

「いや、お約束かなと思って」

「そんなお約束は本の中だけだ」

「いいじゃん。将来俺たちが本になったらこのシーンが使われるかもしれないだろ？」

「どんな本だよ」

「もしも金髪のヘタレが一人で服をコーディネートしたら」

「誰得だよ。安易にトレンドに迎合してところがヘタレらしさをより強調してるな」

なかなかするどいコールの突っ込みを楽しみながら俺はミッドチルダにたくさんあるチェーン店の一つに足を運んでいた。

ここは割と有名な服屋で安いためのいろいろな年齢層の人間が好んで使う店だ。

無地で人を選ばない服のため、組み合わせが楽だし簡単だ。そういった利点から俺もよく使う。

そこで今回はユーノの服を買うというわけだ。なにしろあいつはそれなりの給料を持ってるくせに服は適当なのをかつてるからそんなに持ってない。

見てみたがとても合コンに着ていく服ではない。なんで民族衣装ばっかなんだよ、と突っ込んだの記憶に新しい。本人いわく、

「これはもう滅んでしまった管理外世界の貴重な服なんだよ！」

とのことだ。

そんなもんに金かけんなよ。お前は古美術商か。

「で、ユーノ？　どういう感じの服で当日は攻めるよ！」

「えっ？　そういうのって決めてくれないの？」

俺は隣にいたユーノの顔を見ていった。

なぜか服を買いに来た本人は選ぶ気がなく、驚いている。

「おいおい、買うのは俺じゃないぞ？」

「でも、今回は総一が決めたイベントなんでしょ？　僕それに合わせるよ」

以前一緒に服を買いに行った時はそれなりに自分で選んでいたのに、今回は俺にお任せのつもりだったらしい。

「うーん。そう言われても結局着るのはユーノだしなあ」

「いつそのことみんなでテーマでも決めて揃えるか？」

コールが楽しそうに俺に言った。

テーマかぁ。それはそれで面白そうだ。

「総一は本当だったらどういふ服を着ようと思ってたの？」

悩む俺にユーノが聞いてきた。

「一応俺はそれなりに服に気を使っているのですらすらと答える。」

「チェック柄の七分のシャツに、Vネックのインナーでジーンズとかじゃね？」

「……意外にかっこいいのきてるんだね」

心底から意外そうな目でユーノが俺を見た。

……失礼な。ちゃんとカタログを見て買ったんだぞ。

「……上から下までモデルが来ていたのをそろえたんだけどな！」
「なっ！ その手があったか！」

ユーノはアホだな。

カタログとかで出てるのを上から揃えればそれなりにはなるんだよ。

急いでユーノが周りを見渡してマネキンを探し始めるが、俺と同じ手を使わせる気はない。

「とりあえずコールの言っとおりテーマでも決めて服を買いつかあ。
ユーノだけ」

「なんでっ！？」

コールはニヤリと笑うと後ろ手に持っていた服を差し出した。

「とりあえず伝統の服が着たいならこれにしようか」

差し出したのはスコットランドの衣装。なぜここにあるかはつづい
んではいけない。

「やだよ！ スカートじゃないか！」

「ばかやろう！ これはスカートじゃない！ キルトだ！」

「変わらないよ！」

はあ。

溜息一つ。

「友人がせっかく服を選んでものにな」

「まったくだ。こういうときは一つ返事できるべきだろう」

「僕に恥をかけてこと！？」

「他国の民族衣装を恥だと！？」

「逆ギレ！？ ……僕もいいすぎたけどさ」

ユーノが肩を落とした。

「……ユーノにはまだ早かったんじゃないか？」

コールが落ち込んだユーノを見て言った。

確かにそうかもしれない。

ならもう少し難易度を落としてやるか。

「じゃあ過去に振り返って、これなんかどうだ」

取りだしたのは茶色が基調の超半ズボンとＴシャツ。あいまいな表
現を使うならシヨタが好きそうな服。具体的に言つとユーノの昔の
バリアジャケットだった。

「それは黒歴史iiiiiiii!!」

ユーノの神速の突っ込みが俺の手元から服を奪う。

「というか、なんでこれがここにあるのさ!？」

「俺がデザイン展に出したから。そしたら採用されちゃった」

「なんてことを……………」

遊んでいるとコールが面白そうな顔をしてこっちに来た。

「なあなあ、これなんてどうだ。踊子の服」

やたらと生地が面積が狭い。でもそれなりに防御力は高そうだ。それをみたユーノがポツリとつぶやいた。

「ハイグレが股間に食い込んで盛り上がっている」

「「おええ!!」」

やけにリアルなイメージがつ!!

「おのれユーノ。俺たちに反旗を翻すとは……………」

「かくなる上は最終兵器ビキニを出すしかないのか…………いや、メイド服とかにするか」

「それはまずい。ユーノのことだから着こなしてしまう。ここはやはりフェレットモードに服を着させよう」

「…………なるほど。それは受けそうだ」

あーでもない。こーでもない俺たちが服を選んでいく。

「もう、君たちに頼った僕が馬鹿だった…………」

聞こえない聞こえない。

「で結局黒を基調にしたスーツっぽい服にしたのね」

「うん。どうにも僕ってこういう服の方が似合ってるみたいだし」

ビシッとした服装になったユーノ。

スーツほどかたっ苦しくなく、それでいて男の香りがする服だった。

「うむ。やはり自分で選ぶことで男の魅力は上がっていくのだ」

「老子乙。だまってる。総一も楽しんでたじゃねえか」

第二十五話 「合コン当日……のはず」

合コン。

それは出会いのない男たちがお互いの友人を募って相手を探す小規模イベントのこと。

きつとモテない男たちではなく、びみょーにモテない男たちが世話になることが多いことだろう。なんせ本当にモテない人間はそういつた催しにはあまり積極的に参加しようとは思わないからだ。

つまり合コンに参加しようとしている俺は勝ち組候補といってもいいのかもしれない。まあ、本命の女の子に手が出せない時点で勝ち組かどうかは微妙なところだが。

きつと勝ち組と言うのは隣に立っているさらさら金髪イケメンの男のような奴をいうのだろう。つい先日買った服がよく似合っている。こいつならハンカチを噛んでいる姿ですら様になるのだし。ちよつと悔しい。でもスペック差がですぎて勝てる気がしないんだが。

へい、さのばびっち！　なんていっても、相手からは何言ってるんだの視線ではなくて、きゃイケメンとお話しちゃったになるんだろ。うな。世の中って不公平だ。

が、そんな醜い男の嫉妬がいつもならあるのだが、むしろ俺からすると今の机に突っ伏している状況はいい気味だ。

少し上機嫌になった俺は合コンの会場で頼んだワインを舌で味わう。

うん。旨い。

そうつぶやいた俺とその隣のコールとユーノの対面の席は、未だ誰もいない。

第二十五話

「しない」

すでに約束の時間から一時間が経っていた。ゆったりと落ち着いて

いるのは俺。もう一度いつけど落ち着いてるのが俺。

「こないね」

対して貧乏ゆすりが机をガタガタと揺らしているのはユーノ。エヴァ初号機のパイロットの父がよくやるポーズを机の上でとって落ち着いた振りをしようとしてるけど……無駄だね。

「こないな」

一番端の席で上を向いて魂が抜けかかっているのだコール。実は一番楽しみにしてたんじゃないだろうか。酔っぱらったフェイトを見たくて企画を立ち上げた馬鹿だからな。

「……はあ……」

俺も思わず頭を抱える。まさかなのはたちに
合コンをさぼられるとは思わなかった。

「くっそー、連絡もつかないし」

携帯をまた出して電話をかけたコールがつぶやいた。なぜかさっきから連絡が取れなかった。

「しょうがない。こうなったらどっか三人で遊び行くか」
「だなあ。賛成に一票」

なのはたちがさぼるとは思えないからきつと何かしら事情があるんだろう。それでも連絡の一つくらい入れてくれればうれしい買ったんだけど……まあいつか。

俺は立ち上がって料理屋を出ようとしたが、

「まって！！　もしかしたら時間を間違えただけかもしれないよ！
！」

ユーノが食い下がった。こいつはまだあきらめがつかないらしい。

「もう来ないって。向こうもなんかあったんだろ」

「だろうなあ。とりあえず今日は中止って連絡入れておくわ」

「だから待って！！」

……そろそろだるい。

「さすがに一時間だぞ？　多分何かあったんだって。緊急の仕事とかかもしれないだろ」

「それは……………」

「楽しみにしてたのはわかるけど……………今回は運が無かったってことにしとけ」

「でも……………」

まだユーノはしる。

ほんとに楽しみだったんだろうな。

俺とコールはお互いに目を合わせて、ふっと笑ってしまった。ユーノに聞かせるような声でコールに俺は言った。

「はあ、ここまで楽しみにされると柄にもなくうれしくなるよな」
「俺もそう思う……………しゃあねえな。ユーノ！　また今度もセッティ

ングしてやつからよ！」

「そうそう！ そんなに気に病むなって！」

俺が肩をたたき、コールも続けて頭を撫でてセットされた髪をぐしやぐしやにする。

「二人とも……………」

ユーノが少しずつ力を入れて立ち上がる。

「ほら、行こうぜ。今日は男で遊びに行こうや！」

「そうそう。道頓堀に飛び込むようなテンションで行こうぜ！」

少しだけ、ユーノが笑った。

「そうだね……………うん。今日は、僕も……………羽目をはずして楽しむよ！」

「ひゅー。うれしいことってくれるじゃない。何処行くよ相棒^{コール}」

「愚問だな。男三人いれば何処行っても面白くなるんだって。知らないのか、相棒^{ソイイチ}」

「じゃ、行こっか！」

さっきまで落ち込んでいたユーノが楽しそうに笑い、コールと歩き始める。

「おい、待ってって」

俺はそれに遅れまいと少し小走りになった。

「やだよ。さっきは待ってくれなかったしね！」

そういつてユーノとコールは示し合わせたように走り出した。

「くっそ。まちやがれー！ー！！」

俺も負けじと夜の町を走り始める。

「ふははははは。韋駄天と呼ばれたこのコール様についてこられるかなー！！」

「僕だつて意外と早いからね！」

「なにー！ー！？」

二人も追いつかれまいと走り出す。ユーノは当然だが、コールも早かった。

「ふふ……ははは……ははははは！」

ユーノがもう堪え切れないと笑いだした。俺もコールも続くように笑う。

きつとこの夜の冷たい空気が俺たちをおかしくしているんだ。

だつてそうだろ。

何が面白いのかわからない。

でも俺たちは笑ってる。

それでも走る。

息が切れる。でもやっぱり走って、笑う。

「あははは！ 総一のろまー！ー！！！！」

「なにおー！ー！？ 捕まえてやるからそこで止まりやがれ！」

「やっだよ！ 捕まえてみなよ！」

それはきつと、だれもが経験する、なんでもない青春のページ。
そんな何気ないことが、無性に楽しかった。

「くっそお……あの二人め、めちゃくちゃに飲みやがって……あい
つらはざるなのか。ざるなんだな」

三人で飲んだ後、二人がどんどん飲んで、さすがに明日の仕事に差し支えるレベルになってきたので、一人帰宅していた。

「ああ……頭いてえー」

すこし千鳥足になっていた。ふらふらとする上体を奇跡的なバランス感覚で保ちながら、壁に手をついて歩く。

気がつけば今日の合コンの会場の店の前の道まで戻っていた。
そして俺はみた。

「……………あん……………」

向こう側か誰かが走ってきていた。
誰だ？

なんとなく見たことのある姿だった。
長い髪の毛を揺らして小走りでこっちに近づいていた。少し遠目で髪の色まではよく見えない。しかしその人物はお店の前に来ると立ち止まり、じっとお店の落ちたシャッターを見ていた。しばらくしてがくつと肩を落とす。

「もしかして……………」

いつの間にかはつきりとしてきた頭が音を鳴らした。ひきつけられるように俺はその彼女に近づく。

「……………」

小さくもれた音は俺にも聞こえない。
なんて言ったのか自分でもわからない。
気がつけば俺は肩を落とす彼女のほうへ走っていた。

「……………」

肩を落としたまま、彼女がそつと立ち去ろうとした。
声が出る。

あらぶる精神が形となってもれ始めたのだ。

「のは!？」

ビクツと彼女が反応した。

ああ、そうだ。彼女だ。

なんで今ここにいるのか。そういったものを全部含めて俺は、

「なのは!」

彼女の名前を呼んだ。

はつとしたように彼女が振り向いた。

「総一さん……」

振り向いた彼女からは少し汗のにおいが香る。

それはなぜか俺の情欲をさそう。15の少女から香る匂いだけで俺の理性が振り切られそうになっていた。

「あの……今日……その……」

しみどろになり、口をまごつかせながら何かを言おうとしている。

「……実は……急に仕事がいっちゃって……」

「ああ……」

予想していたことだ。

別に気にしているつもりもない。

でも、俺は言葉少なになるのを止められない。

駄目だ!

こんな俺じゃだめだ!

もつと軽くでいいんだ。

シリ阿斯なんて俺には似合わない。

適当に話をごまかせ。笑える話でピエロになれ。

俺はあくまでヒロインを眺めるわき役で終わればいいんだ。

「……おお。わかってるって！ 俺とは違って忙しいもんなあ。俺も仕事がほしいぜ」

あれ。どうにか苦し紛れに話してみたけど、聞き方によっては嫌味に聞こえないか、これ。

「……もしかして……怒ってる？」

案の定。

なのは俺が起こってるもんだと思ったらしい。

どうにか……どうにかごまかさなきゃ！

「えっと、そういうわけじゃなくて、ユーノが楽しみにしてたからさ」

ピロリン。

天啓閃く。

こういうときは共通の話題でいつもの俺らしさを出せばいいんだ。

が、彼女の顔をみて話すのをやめた。

なぜか彼女が泣きそうになっていたからだ。

「なのは………？」

小さくかすれた声で彼女を呼んだ。

彼女はその声に含まれた疑問を正確に読み取って見せた。

「うっん……大丈夫。なんでもないよ」

そつと顔を左右にふる。

「そういえばコール君はどうだったの？ ……やっぱり怒ってる？」

明らかな話題の切り替え。

「いいや。むしろ女の子に会えないってことでがっかりしてたよ」

俺はそれに乗る。

この雰囲気になんとも乗っているのが嫌だったからかもしれない。

「わかる。コール君とかわかりやすいもんね」

コール、君の恋愛は周りに丸わかりだそうです。

そしてなのは、君にそれを言う資格はない。

「だな。どうせなら応援してやるか？」

さりげなくなのはの恋愛についての意見を調査。

こういう時間は貴重だ。なのはの恋愛についての意見ははやて経由できけなくなった今、情報ランクAといっても過言ではない。

「ええ、応援しなくても、あれでフェイトちゃんって結構聡いから気がついてるんじゃないのかな」

「フェイトとコールがくつつくのは反対？」

賛成というのなら、これからは少し強引にいつてもいいかもしれない。

恋愛を進める人間というのは、少なからず恋愛についての理解と興味がある人間なんだし。

「どっちかっていうと、反対かぁ。やっぱりつき合うならちゃんと告白してほしいかな？」

どうやら彼女は草食系女子らしい。

肉食系ならユーノとくつつけるのも楽だったんだけど……じゃあない。やはりユーノの告白がポイントか。

でもなあ、そこが大変なんだよなあ。

ここで俺が、ユーノのことどう思ってる？ とか聞けたらいいんだけど。

今までの情報から察するになのはきつと本人から直接聞かないと冗談だと思っで終わる。

……鈍感ってのはなんて厄介なスキルなんだよ。

この際、俺以外に誰か恋愛のプロを呼んで意見を取り入れてみるか？ いや、でも結局はユーノが告白すればいいで終わりそうだな。

……はあ、それができないから困ってるんだよあ。

そうして俺が少し頭に手を当てる考えていると、

「あの……ユーノ君も……怒ってない？」

なのはがもじもじとスカートのすそを押さえながら言った。

「えっ、いや怒ってなかったよ？」

なんでまたその話題？

と思わなくもなかったが、怒ってなかったと言った。

実際は未練がましく閉店まで待ち合わせ場所にいそうな粘着質を發揮していたのだが。

するとなのはは、

「よかったぁ……」

と安堵のため息を吐いた。

その姿にズキンと胸が痛くなった。

「なんならあとで連絡してやれよ。今は酒飲んでるから電話に気がつかないかもしれないけど」

俺は彼女を気遣うふりをした。

そう、ふりだ。

「うん。そうするね。……やっぱりまた今度集まる？」

彼女はそんな俺に気が付かず、優しく笑うと次のことを話し始める。

「今日のお詫びってこと？」

それはどこか遠くのことに聞こえた。

俺は醜い本心を隠して話を続けていく。

「うん。今度は私たちが場所をセッティングするよ！」

ほんとに俺は小物だ。

なんで俺は今電話しろと言わなかったのだ。

「へー、そりゃ楽しみだ」

コールと酒を飲んでるから？

酔っぱらって姿に幻滅させたくないから？

夜遅いから？

「ふふふ、女の子の情報網を甘く見ない方がいいよ。私だってこの辺の穴場は知り尽くしてるんだから！」

理由はいくらでも浮かぶ。

でもそれは本心じゃない。

「びつくりするほどのサプライズ。期待してるよ」

ああ、きつと俺は今、心から笑ってる。

醜い本心を隠して、でも俺は心から笑ってる。

15になり、四肢が伸びスレンダーな女の体つきになっていく初恋の少女を前に、俺は本心から笑っているのだ。

「うん!!」

ああ、なんと醜いんだろう。

俺はあの日本気で応援すると誓って、それでも今！この瞬間が崩れさることを恐れているのだ！

……彼女に連絡するように言えば、すぐにも行動を起こしただろう。

そうすればこの場はどうなった？

きっと彼女はユーノに会いにこの場を離れただろう。その時俺はついていけない。

ならば、この瞬間が崩れるのはわかりきっていた。

そう、だからこそ俺は『今』連絡するように言わなかったのだ。

……それが俺の本心だったのだ。

第二十五話 「合コン当日……のはず」 (後書き)

個人的な事情が重なり、再び更新が停止。
すいません。しばらくお待ちください。

第二十六話 「日記 新暦72年」

新暦72年 月×日

そろそろ原作のことも考えないといけない時期が来たようだ。

この前、なんで合コンに来なかったのは空港での事故があったからだそうだ。

それを踏まえてユーノにレリックを調査するようにそれとなく思考誘導をしておいた。

もしかしたらユーノは原作より早く真実に辿りつくかもしれない。

月 日

しまった。

俺の所為でレリック調査が始まってユーノの仕事が増えたらしい。

月 日

このままではまずい。

ユーノの漢塾も始めなくちゃいけないのに………！

月×日

やっとこさユーノの仕事がひと段落ついたらしい。

俺が少し多めに原作から知った情報を提供したおかげだな。

いろいろとわかってきたらしい、まあ、俺にはどうでもいいことなんだが。

そろそろユーノには告白を目的に活動をしてもらわなくては……

月 日

なんということだろう。

俺の出した原作知識の所為でユーノが忙しくなり、その仕事が一段落したと思ったら、なのはが忙しくなりやがった！

情報が原作よりも集まったせいで、早い段階からなのはのほうへ調査の依頼がいつてしまったらしい。そんなバカな。

おかげで連絡すらまともに取れん……どうするかなあ。

×月 日

やっとなのはの仕事も一段落したおー！

残念なことに調査の結果はあんまりよくなかったけど、俺からした

ら上層部がかんでるんだから見つからなくて当然だよ！

この二カ月暇すぎて、FF7の10をクリアしてしまったじゃないか。

でも8だけはラスボスが倒せない。

さて、ユーノのほうもトゲトゲクロノの所為で忙しくなっちゃったし……コールも最近付き合いがわるい。

これが大人になるってことなのか……子供のころの友情はどうしちゃったんだよ……！俺たち……幼馴染じゃなかったのかよ……っ！

月×日

その日！ 極地的な豪雨が記録されたッ！

エンジン音を聞いてブルトーザだと認識するように大雨だとわかった！

その豪雨によってなのはたちの仕事が増えるのは、コーラを飲むとげっぷが出るのと同じくらい確実なんだ！

しかしッ！

そんな時間的制約が課せられようと、俺こと総一が恋愛応援において、他の奴らとは年季が違うことを思い知らせてやるっ……

×月 日

はやてのほうから珍しく相談があった。

なんでも空港の時と今回の出来事から考えてすぐに動けるような自分の部隊が作りたいんだそうだ。

正直、

……六課フラグ立ったーーーー！

巻き込まれフラグも立っているようだーーーー！

頭ン中カオスってて、聞いてなかったわ。

とりあえず保有制限やらなんやらのことを教えてあげて、その場は切り上げといったわ。

ほんとのこというと、怖くて六課なんていけないって。

原作通りならヴィヴィオが攫われるときに俺死んじゃうって。ヴァイスくんみたいに瓦礫の中から生還とか、無理イ。

え？ もともと誘う気なかった？ ……そう、ですか。

月 日

やつほーーーー。とうとうデバイスA級に挑戦だアアアーーーー！
この時を待っていたアア！ 俺は試験を受けると同時に！ すかさ

ず試験管に手を挙げてアピールするッ！

「すいません。腹痛なんでトイレ行っていいですか？」

「失格になります」

「……oh」

何でトイレ行っておかなかったんだよ、俺エ…………orz

月×日

やっぱり落ちたよ。

うん。受かるとは思ってなかったしね。

だって試験受けてねーし。もうどうでもいいよお……

そんなことを最近妙につやつやしてるコールに愚痴ってみた。

なんとなく、つやつやの理由が気になった。

俺は有言実行の男だ。

そしてコールはこういった。

「実は俺、フェイトと付き合ってるんだ」

あれ？

第二十六話 「日記 新暦72年」 (後書き)

できないと思ったら今日はできたっぽい。

正真正銘これが最後。

また今度の連続投稿で会いましょう。

第二十七話 「フェイトちゃんは……今、幸せなんだ」

「ええええええ！！??」

夜、閑静な住宅街に声が響く。

「な、なのは！ 声がおつきいよっ」

声を響かせたのは亜麻色の髪をサイドにまとめた少女 高町なのは。それを止めようと口を抑えたのはその親友のフェイト・T・ハラウウン。

大事な話があるとフェイトに切り出され、何だろうと思えばとんでもなくびっくりしてしまう話だったのだ。それこそ、戦場では常に冷静にね。と口をすっぱくしていつているなのはが我を忘れてしまっただけに。

なのはは自室のベッドの上でシーツを力強く握りしめる。

「ほ、ほんとなの？ コ、コール君とつきあってるって……」

フェイトから切り出されたはずの話なのに、思わず口に出して確認してしまう。

「うん」

いい具合に混乱したなのはにフェイトは頬を赤く染めていった。圧倒的な女としての芳香が漂うその姿は、親友の自分が知らない姿だった。

「え、え？　だって私そんなの知らないよ……いいいいつの間に！？」

「……半年前から。で、でも隠しておこうと思った訳じゃないよ！　ほら、この前の災害でなのはが忙しくてあんまり時間つくって会えなかったでしょ？　本当は二人でなのはに報告したくてずっとチャンスを探してたんだけど……どうしてもできそうになかったから今日話したんだ」

フェイトが焦ったようにたくさんのことを話してくれる。どうやら半年前からつきあっていたらしい。フェイトは隠し事が苦手だろうと思っていたのに、全く気がつかなかった。確かに最近忙しくてフェイトと一緒にいる時間は作れなかったけれど、本当にいつの間に付き合うほど仲が良くなったのだろう。

「え、っと、そのコール君はどう、なの？」

最近の女の子は進んでる、よく聞く言葉だ。二人はどうなんだろう。そう思ってたのは聞いてみた。不躰だとは思ったが、やっぱり自分も女の子。気になるものは気になるのだ。それに対するフェイトの答えは

「一応全部」

目の前が真っ暗になった。ズーンと落ち込む。……フェイトちゃん。大胆すぎるよ。思わずフェイトの腰や胸に目がいった。がしかしそんな邪なのはの考えとは逆にフェイトの顔は真剣だった。

「話したよ。私がクローンだってことも。全部。」

はつとなる。そうだった。彼女は　そう、優しくいつても普通の生まれじゃない。それをずっと気に病んできたのを、なのは知っていた。思わず恥ずかしくなる。フェイトがそんな重大なことを誰かに打ち明けようか悩んでいるときに自分は何を考えていたのか、と。

「それで、コール君は……なんだった？」

「うん。何も言ってくれなかった」

「そんな……」

脳裏にコールの優しそうな顔が浮かんた。確かにフェイトちゃんの生まれは特殊かもしれない。でもそれでも彼女は普通の女の子なんだ。だから彼女を拒絶したコールに一瞬頭のなかが沸騰しかける。

「でも……」

そんななのはの思いとは裏腹に、フェイトは至って落ち着いて、それどころかすごく幸せそうだった。そつと唇から言葉がもれる。

「　　なにもいわなかった代わりに、私の手を引いてお義母さんの所にいつてくれたんだ」

「え？」

「彼女を僕にくださいっ！　って」

女の親に僕にくださいと挨拶。それは実に伝統的な挨拶だ。次元世

界でもわりとポピュラーな挨拶。ということは……

「え、え？ ええ！？ そ、それってもしかして……」

「うん、今まで黙っててごめんね？ 実は私、プロポーズされちゃった……っ！」

「おいおい、まじですか？」

「マジです」

「その場のノリとかじゃなくて？」

「んなわけあるか。めちゃくちゃ必死に考えて考えて……それでそうしたいって思ったんだよ。仕方ねえだろ」

一緒にお酒を飲んでいたコールが顔を赤くして言った。

「いやいや、プロポーズしたとか、それもう付き合ってたねーぞ」

「まあ……な。一応結婚を前提としたお付き合いってことでリンデイさんに認められたけど、まだ婚約したわけじゃないから」

「……最近やたら忙しくて連絡のつかなかった親友が、まさかプロポーズまで済ませてしまうとは。と、いうことはだ……」

「お、おまえ、どどこまで行ったんだよ」

「一応最後まで」

「ということは、男と女のあれですか？」

「あ、あれです」

「おいおい。つまりはこいつ……っ！」

「まじかよ。お前一人だけ魔法使いの資格を失うなんて……ずるいぞ！」

「ばっか。声が大きい！」

「で……どうだったんだよ」

「どうって？とコールが顔を首をひねる。どうってこいつの時に男と話すことなんて一つしかないだろうに。」

「どうってそりゃ、な。俺にいわせんなよ」

「あ、ああ。フェイトだろ。あー、実はだな。俺たちまだー一回しかしてないんだ。だからそういうのはまだちょっとわかんね。ずっと痛がつてたし」

「ふーん……ん？ 一回だけ？ もう半年も付き合ってた？」

「じゃあねーだろ！ 初めてしたらすぐに衝撃の事実を話されて、プロポーズの流れだったんだから！ 俺たちクロノさんに言っちゃたもん、節度あるお付き合いをしていますって！」

半泣きだった。俺たちは心の中で滝のような涙を流すコールをみた。がっかりしてくれるな。男っていうのはこういう生き物なんだから。

「そ、そうか。でもコールが顔をフェイトと付き合ってたのかあ。なんというか意外だな。正直コールが顔を接点もとうと頑張ってるだけで空回りして結局付き合えないかと思ってただけだな」

「通りで今まで積極的に応援してくれなかったわけだ。お前が俺のコトをどう思っているのか、今みたからな。覚えてろよ」

「まあまあ、その辺は置いておくとしてさ、きっかけはなんだったんだよ。そのくらいは教えてくれてもいいだろ？」

正直な話、絶対にコールは付き合えないと思っていただけになにをきっかけなのかすごく気になる。原作ではSTSでも付き合っていた様子はないし、これが俺がきたバタフライエフェクトであるというなら結果を詳しく知りたいと思うのは普通だろう？

「え、なんか話したくないなあ」

「いいじゃんかよ。コールの披露宴で盛り上がることでやるからさ」

「むしろそこはさせてくれない？　としたでにでて頼み込むところだろ」

「そこは俺とお前のなかっことで、なにがキツカケなんだよ」

「…しゃあねえなあ。ソーイチだけだかな」

しばらく悩んだがようだが、なんだかんだで話すコトにしたようだ。これまでも一応兄貴分として頑張ってきた積み重ねの信頼がものを言っただろう。前世とは違って顔の広い今世ではこう言った話が多々聞けるのが楽しい。やはり持つべきものは友達だ。

「あんまり言いふらすなよ？」

「もちろん」

フェイトが色々な人に話しちゃってるだろうかと、内心想いつつコールの話を耳を傾けた。

「出会いはなんだったかって言われたら、そうだね。もう闇の書事件の時まで戻っちゃうかな。なのはも覚えてるでしょ？ スクライアのパーティー」

「パーティー？ ううん。ごめんちょっと覚えてないや」

「ほら、ソーイチさんがユーノを最初に蹴り飛ばしたパーティーだよ」

「あ、あれ？ うんうん。よく覚えてるよ！ いきなりでみんなびっくりしたもんね」

「うん。私も敵がきたのかと思ったもん。で、一応そこで初めてコールとは会ったんだ」

「そういえばソーイチさんと初めてあったのもあのパーティーだったかも」

「ふふ、いつも二人にはお世話になったね」

「うう……実は黒歴史なの。私もソーイチさんに言われなかったら中学校の成績がやばかったよ……ってごめんね。話そらしちゃって」

なのはは何か恥ずかしい思い出があるのかもしれない。少しだけ

顔を赤くして口をすぼめた。

「別に大丈夫。今日はずっといられるしね。それで、私たちなんだけど、それからは特に会うこともなかったかな。その辺りはなののは知ってる通りだよ」

「え、じゃあいつの間に仲良くなったの？」

「うーん、正直ちょっと前まではただの友達だったと思う。ソーイチさんと遊ぶときについてくる人くらいにしか思ってたし」

「そっか。その辺は私と一緒にだね」

そう。はつきり言って当時は今の関係になるなんて思ってもなかった。でも、ついこの前、そうじゃなくなった。

「それが変わったのが、この前の災害。第24管理世界での大地震。実はあれ、ロストログアのせいだったんだよ」

ひどい災害だった。突然起きた大地震は管理世界の記録をみても類がない大きさで世界中を襲った。津波の二次被害や、財政が傾いたことによるリストラの増加と治安の悪化。いまだに復興の目処がたないほどの災害。ちよつと前まで管理局が総力を挙げて協力していた。そんなひどい大災害だが、それは人為的に起こされたものだった。それは最上級のトップシークレットで、もちろんなのも知らなかったのだろう。大層驚いたようだ。

「え、そうなの！？ 私聞いてないよ。……というより、いつてもよかったの？」

「うっん。本当は機密だから話しちゃいけないんだけど、なのはなら大丈夫でしょ？」

「まあ大丈夫だけど」

「なら大丈夫。でね。管理局が人為的な、それこそロストログアによる可能性があるってことで、私のほかにもたくさん執務官が調べ始めたんだ。でも難航しちゃって。そこで出てきたのがコールみたいな民間の協力者。ロストログアを調べるならロストログアの専門家に聞くのが一番早いだろうって、スクライアに協力要請をしたんだ」

「スクライアに協力を要請するのはわかるけど、なんでコール君？」

なのは不思議そうにいった。確かにスクライアはロストログアに対する知識も多く、非常に有能な人材を多く抱えてる一族だけど、コールにはそんなところへ出てくるのはまだ早いと思うのだろう。

「ほら、前はユーノくんが責任者だったけど、無限書庫に引き抜かれちゃったでしょ？ その後任としてコールがなったんだ。あれでたくさん勉強してるから頭いいんだよ？」

しかしだ、あれで意外と彼は有能なのだ。なにせユーノとソーイチの親友なのだから。有能な二人に囲まれていたコールも自然と努力しているのはスクライアという閉鎖した環境では当たり前のことだったと思う。

「へえー。そうなんだ。ちょっと意外。で、それでどうして仲良くなったの？」

「一緒に仕事してたら、かな」

コールからこの前聞いたが、なんでも管理局員が結婚するのは仕事の途中で仲良くなった人がほとんどらしい。自分もその例にもれなかったわけだ。

「で、でもなにかきつかけくらいあったよね？」

「なのは……少女漫画の読み過ぎだよ」

「フェイトちゃんに諭されたっ!？」

まったく、とフェイトはあきれたようにため息をはいた。なのはは夢見がちなところ、言い換えればロマンチストな一面があるからそのうち誰かにだまされてしまいそうだ。

「なんか、おっとりしてるフェイトちゃんにはいわれたくないことを思われてる気がする」

フェイトは両手を上に上げて、あきれたポーズをとった。

「一応仲良くなった事件みたいなのはあったけど、別に関係ないよ。多分そんなことがなくてもコールとは仲良くなった自信があるから」

「あれ、なんかフェイトちゃんの性格が変わってる気がするの。とりあえずその仲良くなった事件をきかせてくれない？」

なのはがっかりしたように肩を落としてあきらめたが、それでも話の種に聞いてくる。本当にたいしたことではなかったと自分では思っているが、なのはがそんなに聞きたいというなら話してみるの

もいいかもしれない。

「ほんとにたいした話じゃないからね」

「いいからいいから」

「えっと、二人で捜査を始めて首謀者も絞り最終的に捕まえる段階までいったときのことなだけどね。あ、私たちはあくまで補佐に回ってて捕まえるのはほかの執務官の役割だったんだ。それなんだけど、その執務官がやられちゃって、私の方にお鉢が回ってきたんだ」

「執務官がやられるなんて、結構強い魔導師だったんだ」

強い魔導師かといわれれば、そうじゃない。実際魔法の技術としては自分たちの半分もないだろう。が、それでも相手は厄介な魔導師だった。

「というよりも使う魔法が厄介だったんだ。……A M F。アンチマギングフィールドの使い手だったみたいでね。私が魔法を使っても全部無力化されちゃって。どうにかしてほかの非戦闘員を守らなきゃと思いつながら戦ってたんだけど……やっぱり勝てなくて」

「え、大丈夫だったの？」

「うん。殺されるかも、って覚悟したところにね コールがきたんだ」

すっごくかつこ良かった。今でもフェイトはあのコールの後ろ姿を思い返せる。そうあの後ろ姿を

~~~~~

ぎりぎりと痛む腕。全身が痛みで動かなかった。自分は誰かに泣いてほしくなくて、杖を握って戦ってきたはずなのに、ずつとつらい訓練だつて積み重ねてきたのに、それでもなお目の前の男に届かなかった。

さっきまで金色の髪を逆立て蔑むような目で男はフェイトを見ていた。その瞳の中にはそれだけでない。背筋が泡立つような気持ちの悪い色があった。かつて何度も見てきた情欲にまみれた瞳だった。

内心にあふれる気持ち悪さを抱えたまま、フェイトは彼と戦い破れた。訓練のときとは違いすぎるAMF濃度の前にフェイトは魔法を使うことはできず、ただ普通の女として殴られるだけだった。なぶられ、動けず、気持ちの悪い手で触られると思ったあの瞬間は本気で舌をかんで死んでしまおうかと思ったくらいだ。

そんな嫌なやつ。そいつは今  
たった一人の民間人にしこたま殴られていた。

フェイトへのびた手を遮るようにして現れたたった一人の男。犯罪者も純粋な格闘術を収めかなりの練度だったのに、彼はそのことごとくを凌駕し固い拳をめり込ませる。

彼から打ち出された拳は肉体強化のないフェイトにはかすんで見えるというのに、彼は流れる水のようにかわし、見て取れるほどの速度の拳で彼を悶絶させた。

「くそお……魔法さえ、魔法さえ使えれば……っ！！！」

「そんなときや、フェイトがお前を捕まえるさっ！」

コールは純粋な肉体のスペックが犯罪者の上をいった。しかし魔法を使われればそれはすぐさま逆転してしまうだろう。それはその程度の差ではない。……しかし彼は魔法を使うことができない。なぜなら魔法を使うということはAMFを解除することだ。そうしなければフェイトが彼を捕まえるだろう。

正直なところ、彼は今までの捜査ではあまり役に立っていなかった。そのときフェイトは、適材適所だよと、そういった。フェイト自身も彼をそういつて慰めていたが、彼が何かをすることはないだろうと侮っていたのだ。しかし！　今彼はまさに自分の力を生かしていた！

「俺は魔法がつかえねえ！　だから俺は戦わねえ！」

苦し紛れの拳をひらりとかわし、逆の腕で敵の肝臓をうつ。

「でも！　誰も魔法を使えないのなら俺だって戦うんだ！」

悶絶する敵をよそにもう一撃。本命の右ストレートが顔面に突き刺さった！

「一般人なめんな」

静かに右手を掲げたコール。彼は敵が倒れたことをしっかりと見届けてフェイトの方を向いた。

「俺は頭よくないしさ、戦えない。正直フェイトの足手まといだったと思う。そんな俺の代わりにいろいろ大変なことをさせちゃったと思う」

彼は申し訳なさそうにいう。あんなにかっこ良くフェイトを救ってくれたのに、彼は悲しそうだった。どうして？ そう考えるフェイトの視界の端で何かが動くのが見えた。奴だ。まだ意識を失っていなかったのか、手には魔法の光が。おそらく非殺傷の魔法だろう。あんな遠い場所ではコールに教えても、もう間に合わない。なら……

「俺には俺にしかできないことがある。さっきのがその一つ。それで」

私の魔法で間に合わせる。彼にできないなら自分がやる。もう奴もAMFを使うことができていない。これならできる！

瞬間的に手の中へ魔力を集中、かつてない早さで二つの魔法を起動し奴の魔法と奴自身を狙ってはなった。まさにその速度は神速。稲妻のようにのびた光の帯が奴を正確に狙いつつた。

「これはフェイトにしかできないこと……だろ？」

奴が崩れ落ちるのを目で確かめながら、思う。彼は知っていたのだろうか。奴が立ち上がることも、自分がそれを止めることも。いや、どっちでも構わないか。今は彼が話す言葉へ。何か大切なことを教えてくれようとしているのなら、自分はそれを聞く必要があるんだ。それが彼だけができることで、私にだけできることだから。

「魔法がつかえなくてさ、あんな男に襲われそうになって、怖かったろ」

フエイトは頷いた。あんな経験は初めてだった。そういう行為はあることも知っていたし、そういうた行為をした人を逮捕したこともある。それがあんなに怖いことだなんて、知らなかった。思い出すと背筋が震える。そんな自分にコールは力強くいった。

「それならさ我慢しないで助けを呼んでくれよ。大丈夫、そうすりゃみんなが助けてくれるから。もちろん俺は言うに及ばずな」

そういつて彼は兄貴分ゆずりの笑顔でにやりと笑ったのだった。

~~~~~

誰も魔法の使えない場所で、だからこそ誰もが持っている勇気を輝

かせて戦ったあの後ろ姿。忘れる訳がない。

俺は魔法が使えない。だから戦わない。でも、誰も魔法が使えないなら、俺は戦う。男が女を守るのは当たり前のことだから。

「フェイトが俺を守れないなら、俺がフェイトを守るんだ。って、いつてくれたんだ。ね、たいした話じゃないでしょ？」

「いやいやいやいや。ラブロマンスだよね！？　とんでもなくロマンチックな話だよね！！！？」

なのはが顔を真っ赤にして叫んだ。フェイトは首をひねった。

……別にたいしたことじゃないと思うんだけどなあ。

「もしかして天然！？　それとも事件のたびにロマンスが起きてるの！？」

「もう……なのは静かに。落ち着いて話ができないよ」

まったく。なのはは落ち着きがないんだから、とその原因であるフェイトはこぼしてなのはを落ち着かせるために、腰を上げた。

「で、コールはフェイトのどんな所にほれたんだよ」

気分よくワインを口に運んでいた手が止まる。コールは小さく、親友はだましきれないか。と笑った。

「いつから気がついてた？ 最初は俺がフェイトのことを本気で好きじゃなかったって」

「最初から」

マジかよ、そう小さくコールがつぶやいたのは無理ない。

「だってそうだろ。お前が本気で好きならもってフェイトに迫っておかしくないからな。なのに、全然そんな様子見せなかったし。理由は知らないけど」

「……白状するとお前とユーノが二人だけで話してるのが気に食わなかったから。無理矢理にでも話に混ざりたかったんだよ。当時は俺も友達と遊んでる方が楽しかったし。お前らがどんどん離れてくみたいで嫌だったんだよ。……理由にしたのは悪いと思ってるけどさ」

ワインの赤い水面にコールの顔が映る。

「そっか。……で、いつから本気になったんだよ」

「……さっき話した事件から……じゃ、だめか？」

「だめだね。お前がプロポーズするくらいにゾッコンになるにはまだ足りない」

そっか。とコールが笑った。内心、ここまでわかってくれる親友がいることがうれしくて仕方なかった。こいつには話していいかも、自然にそう思えた。

「実はさ、俺が本気でほれたのはさ、その後のことなんだ。」

コールは話す。お酒の影響もあって、いつになく口が快調に動いた。

「その後に、フェイトが食事に誘ってくれてさ。食事に行ったんだ。正直俺たちそれまで一緒に仕事してるのに食事とか一切行ってなかったから、お互いに恥ずかしかったけど、飯を食いにいったんだ。……つぶっちゃけそんなに話は盛り上がらなかったと思う。あんまり覚えてない。そのときにさ

~~~~~

今日はありがとう。

フェイトは心からの感謝を込めてコールを食事に誘った。例えばこれまでの仕事で自分たちの信頼関係を育もうともしてなかったことに気がついた。

その誘いをうれしそうに受け入れた彼。そんな姿に胸が暖かくなる。

どんなお店の方が好きなのかわからなかった。だから二人で復興を始めた町へとくりだして二人で決めた。自分でもあたりだと思いうくらしいに洒落たお店だったと思ってる。独特の落ち着いた雰囲気のお店。メニューは見たことのないものばかりだけれど、それから選ぶのも楽しかった。名前からどんなものがくるのかを連想するのもこっぴいっただお店に入っただきの醍醐味らしい。そのときはよくわからなかったけれど、フェイトは何となくわかった。

「あ、あの！ 今日ありがとうございました！」

お店の料理に驚いて、笑って、そうして浮ついた雰囲気は落ち着いてきたところにフェイトは精一杯の感謝を込めていった。今までこれほど真摯に誰かにお礼を言ったことがあったのだろうか。もう記憶も摩耗し始めたのはたちとの出会いの物語。その中でしかした覚えがないかもしれない。フェイトはそれほどに感謝を込めていた。

「いや、そんなに意気込んでいわれても……まあ、俺も仕事の仲間だし、当然だろ？」

「それでも、です。その、最後の言葉が……うれしかったから」

フェイトは両手を膝について、小鳥のような声でいった。コールが慌てたように手をふるが、フェイトは自分の今の気持ちを伝えたかった。自分は無意識に魔導師とそうじゃない人たちで区分していた。

それを彼は取り払ってくれたのだ。本当にひどい間違いをする前だよかった。彼女はそう思ってる。

「そう、かな。でも今はいいよ。そういうのは後で。今は料理を楽しもうよ。せつかくおいしいのが出てきたんだし」

「そうですね。この料理おいしいですもんね」

フェイトは自分で思っていることの半分も言えなかった。彼に伝わってるのか、自分がどれだけ感謝しているのかが。それを知りたかったけれど、彼がこそばゆそうに頬をかくのを見てやめた。彼の言う通り、今は料理を楽しもう。フェイトは二人の中心におかれた肉料理らしきものへと手を出した。

「あ、おいしい」

見かけは何の肉か全くわからないがそれでも噛むと牛肉のような甘さがにじみ出ておいしかった。彼もそれをおいしそうに頬張る。

「だなあ。ここにワインの一つでもあれば完璧なんだけど」

「あれ、お酒飲むんですか？」

彼が残念そうに言うのを聞いて、そういえばどこにも飲み物がないのに気がついた。サイドメニューで飲み物を頼むのを忘れていたようだ。

「そりゃ、俺も大人だし。それなりには飲むよ。……フェイトちゃんは？」

お酒。飲むと気分が盛り上がって楽しくなる飲み物。家族には外で飲むなど言われているが実は大好きだ。よくなのは誘って飲んだりする。なのはああ見えてザルでどれだけ飲んでもひどく酔わないので誘うとホイホイついてくる。ミッドの有名なお酒は二人でだいたい飲んだといってもいい。

「私も飲みます。あ、でも今日はだめですよ？ さすがに出張任務中に飲むのは不謹慎ですから」

「そりゃそうか。フェイトと飲めるかもって楽しみにしてたんだけど」

彼がそういうと二人でくすくすと笑ってしまう。

……そっか、今度お酒でも誘ってみようかな。

そうフェイトが考えたときだった。近くからフェイトと彼女の名前が小さく聞こえたのは。

「あれ？」

聞こえた自分の名前に思わずフェイトが反応した。ぱつと振り向くと同じお店の少し離れた場所で管理局員が何人が集まって話をしていた。

「有名人だな」

コールがからかうように笑った。もう！ と怒ったフェイトだが、なんだかんだで自分の名前が出た会話に集中してしまう。向こうも興奮しているのか声がだんだんと大きくなっていった。

「　　んだよ。で、あのフェイトさんが捕まえたらしい」

「へえ、さすが管理局の誇る若手エース。やっぱり俺たちとはやる  
ことがちがうねえ」

聞こえてくる会話は今日のこらししい。あの後奴はすぐにフェイト  
がバインドで縛ってほかの局員に引き渡したので、そこから話が広  
まっていたのだろう。

「でもさ、かなり傷だらけだったって聞くぜ？　やっぱり激戦だった  
んだろ？」

「なんでもスクライアの人間をかばって戦ってたらけがをしたらしい」

「はあ、かばいながら戦って勝つのか。やるなあ」

「いや、そういう話じゃないらしいぜ。AMFで魔法が使えなくな  
ってピンチだったらしい」

「マジかよ。それでよく勝ったな」

「スクライアの奴が肉弾戦で勝ったんだって。ちょうど見てた奴が  
知り合いにいて教えてくれた」

……そっか見てた人はほかにもいたもんね。広まるのは当然だよな。  
フェイトは思わず納得する。……個人的には最後のところはあるま  
り知られたくないのであんまり広まらないでと祈るしかないが。彼

は赤くなるフェイトを見て楽しんでいた。が、ここから空気が一変する。

「……でさ、こっからが面白いんだけど、そいつ勝った後になんかフェイトさんに説教かましたらしいぜ？ もっと周りを頼れ！ とかってさ！ かっこつけすぎだよなあ！」

「うわ、かっこつけかよ。A M F環境だから活躍できただけだろ。調子に乗りすぎ。俺でもその状態ならフェイトさんの前でいいからできるわ」

ははは、と声を上げて笑う。フェイトはそんな彼らが信じられなくて、呆然となった。そしてすぐに目の前が真っ赤に染まった。

……かっこつけ？ 調子に乗っている？ それは どっちがだ。

がたんっ！



誰かしらないが、自分たちの話をしていた奴らの話を聞き流していたコールの耳に強い音が響いた。あまりにも突然のことに体がびくりと震える。どうしたのだろうと思ってみまわせば音はフェイトが立ち上がった音だった。

「ふえ、ふえいと?」

「……ちよつと待ってて」

フェイトが仕事モードの声でつぶやいた。妙に迫力があつて耳に残る声だった。

もしかして……と思うがコールに今のフェイトが止められる気がしない。ただ黙って彼女を見送るしかできなかった。

つかつかと小気味のよい音を鳴らしながらフェイトは彼らの席に近づいていく。向こうもすぐに近づいてくるのがフェイトと気がついたようだ。今まで話を聞かれていたことを知らずに彼女へと声をかけた。

「あ、フェイトさん!? 今日はおつかれさまでした!」

「うん、ありがとう」

彼らは気がついていないが、何の抑揚もない声だ。

「あなたたちもご飯?」

「そうですね。あ、フェイトさんもせっかくだから一緒に食べませんか? 実は15年ものいいワインがあるんですよ」

そういつた彼は目の前にあった空のグラスにトクトクとワインをつぐ。紅い宝玉のような色合いが光を変色させ、深い味わいのある色を魅せている。それをフェイトに渡し本人もワイングラスを持った。

「どうですか、一杯？」

フェイトはそれを受け取るとにこりと笑い

「ワインよりもジュースの方が似合う人と飲むつもりはないよ」

ワインを彼の顔にぶちまけた。

――――

「ということがあってな。それから惚れた」

「いや、待て。確にかっこ良かったのも認めるし、惚れるのも無理はないと思う。でもよ……っ！　むしろそこからの話も重要だろ！　続き希望っ！」

「でその後日に俺が告白してだな……」

「スルー！？ いいところで話区切るなよ！ そこからのフェイト  
フィーバータ임을教えてくれたっていいじゃないか！」

「うるせえ！ あのためのさらにかっこいいフェイトは俺だけの秘密  
じゃい！お前なんぞに教えるか！」

「そんなあ！ さっきは親友だっていったじゃないかホームズ！」

「ワトソン君、時には解いてはいけない謎って言うのもあるのさ」

「知らん！ いつだって真実は一つだ！ だから教えろ！」

コールは見苦しくもその後を聞こうとする俺の肩に手を回し、

「や・だ」

わざわざ一字一字を区切っていった。思わずかちーんとなる。

「ほほお。お前そんなに若いときの恥ずかしい思い出をフェイトに  
語ってほしいんか？」

「あ？ やってみるよ。どうせフェイトのことだから後でうれしそうに俺に報告するだけだしな。今日コールのこと聞いてちゃったって  
かわいく。フェイトに知られるんだったら恥ずかしくもなんとな  
い  
な」

「くっ、これが新婚さんの力なのか！」

「新婚さん言うなっ」

「そこを恥ずかしがるの!? しかも男が!」

「きしよいわぁ……」

「お前のことだよ!」

いけないと思いつつもテンションがあがっていく。やはり酒の影響  
って奴は偉大だ。……おそらくコールも恥ずかしいんだろう。だ  
から照れ隠しのように話を区切ったのだ。俺は何となくそれを汲み  
取ってやって、話をどんどんかえていく。そうした方がいいような  
気がしたから。

「まあ、お前が幸せにやれるならいいさ。でもフェイトは泣かせん  
なよ?」

「もちろん。なんせ泣かしたらアルカンシエル積んだ戦艦が襲いに  
くるからな。意地でも泣かせないさ」

「そっか。フェイトちゃんは……今、幸せなんだ」

「……うん。なのははやて、友達がいて、家族がいて、コールがいて。私は幸せだよ。毎日が怖いくらいに」

なのははフェイトを祝福するように見つめた。

フェイトはその視線にこそばゆく感じながらも親友に素直に認めてもらえたことがうれしかった。リンディはいろいろと二人でコールと話したようだが、それでも最終的には認めてくれたから、後はなのはだけだったのだ。自分は認められないままに結婚なんてできない。だからこそ、こうして認められたことがうれしかった。

「それで、私はこうして幸せになれたんだけど……なのははどうなの？」

今までとは違って、自分の将来が決まったからだろうか。フェイトはなのはのそっち関係のことが気になり始めていた。今まではそういった話はしてこなかったが、これからは増えていくんじゃないかなど、限りなくあり得る未来を予想してそう思った。

「ほら、なのはにも仲のいい人っているでしょ？ ユーノ君とかはやてとかソーイチさんとか」

「あの、話の流れ的になんでそこにはやてちゃんを混ぜたのかな？」

「なのは、話をこまかさないで！」

「え、私怒られるところなの？」

「で、どうなの？」

フェイト聞く耳もたず。突然海鳴りにいたころの近所のおばさんのようになっちゃったフェイトに若干の寂しさを覚えながら、なのはは考えた。

……誰っていわれてもなあ。ユーノ君とソーイチ君くらいしかいないよ。

なのはは滅多に動かない恋愛を司る脳の部位を動かして考えてみたが……

「やっぱり私……そういうのはまだ考えられないよ」

フェイトが望んでいた考えとは全く違うものを答えていた。

第二十七話 「フェイトちゃんは……今、幸せなんだ」(後書き)

大変お待たせいたしました。これから完結目指してがんばらせていただきます。

## 第二十八話 「ダブルデート」(前)

「ねえ、昨日コールからフェイトと結婚を前提に付き合ってるって聞いたんだけど本当かな？」

「ん？ いや、本当だよ。ちょっと前に直接聞いたけど、ほの字だな。あれは」

たまたま本局の方にデバイスの整備方法についての議論会があつてその帰り、ロストログアについての資料を届けにきていたユーノにあった。

もちろん今の俺たちがあつて話すことと言えば、コールとフェイトの結婚だろう。

なんというか俺の介入(笑)が初めて目に見える形になって出てきたものがこれって……もはや笑うしか無いな。

「そっか……でもなんだが急すぎるよね。……本当に二人って相性とか会つてるのかなあ？」

「そつていうとつまりなんだ？ 二人は若気の至りで、そのうち後悔するんじゃないのかつて思つてる訳だ」

「……身もふたもないけど、うん。ちょっと心配になっちゃって」

ユーノはコールたちのことを思つていつてるんだから別に身もふたもなくもないけど。

よけいなお世話くらいに思つておけばいいような気がする。

「ふーん、俺には無いなあその心配は」

「なんで？ コールのこと心配じゃないの？」

「いや、だってあいつが選んだんだしなあ……いや、待てよ。この状況……使えるっ？」



いきなりどうしたんだよ。とユーノが若干引きつつ俺をみた。  
まだまだセンサーができていないなあ。

こついうときはあれをして確認するしかないだろうに。

「そんじゃあさ、ユーノ。確認……してみない？」  
「確認？ どうやってさ」

御約束って言葉知ってるか？

「ダボオーデエート……だ！」  
「ダブオーデエート……だっ！？」

## 第二十八話 「ダブルデート」

ダブルデートとは。

もともとデートは、恋愛関係にある、もしくは恋愛関係に進みつつある二人が、連れだって外出し、一定の時間行動を共にすること。  
あいびき  
逢引およびランデヴーとも言う。そのデートを男子二人女子二人の組み合わせで行うことである。

「それくらいは知ってるよ！」

「まあまあ、抑えたまえ。まだ話は終わっていない」

大切なのはここからなんだから。

俺たちは二人でネットを使ってダブルデートの意味を検索していた。さすが時空世界につながるネット。情報量もとんでもないものがある。

が、さすがにデートは万国共通語。

簡潔でまとめられた情報としてのっていた。

俺はその画面上にあるカーソルを動かしてどんどん下に画面をスクロールする。

男性2人と女性2人の計4人でデートをすること。特定の男女が恋人関係である場合と恋人関係はない場合とがある。途中で男女1組ずつの別行動になる場合もある。

「……これがどうしたの？」

「いいか、もう一度目を皿にしてよく読め。むしろ百回熟読しろ」

特定の男女が恋人関係である場合と恋人関係はない場合とがあ

る。途中で男女1組ずつの別行動になる場合もある。

「……こ、これはっ！」

「そうだユーノ。もうわかっただろう？　なぜ俺がダブオーデエー  
ト、を提案したのか」

「ま、まさか……」

……僕にフェイトたちを理由にしてなのはと二人っきりになれ  
って言うのかい！？」

思わずにやりとした。

言葉にすればそれだけだし、汚いセコいまねに思えるかもしれない。  
しかし……しかしだ！

「いいかユーノ。考えてみる。ついさっきまでは目の前に恋人同士の  
甘い空間があって、空気呼んで二人っきりにさせるとするだろ  
う？」

おそらく、ふたりで行けばそうなるだろう。

二人っきりで甘えたがるフェイトが想像つくし、なのはがちゃんと  
空気を読めるのは知ってる。

ならばその状況は必然！

「必然的になのはこう思うだろう！　……恋人って、いいなあ、  
となー！」

「な、なにに……あ、あの鈍感魔人のなのはが……！？　い、いや、  
あり得る」

なのはだってもう17歳。

異性に興味だって人並みにはあるはず。

そこに親友の彼氏が出てきて楽しそうにしている？  
絶対に思っはずだ！ これは確信できる。

ユーノも想像がついたのだろう。あまりの事実に関まっている。

「そしてそのとき隣にいるのは、昔からずっと自分を大切にしてくれていた幼馴染み……どうだ？ その先も話した方がいいか？」

「い、いや！ 後は僕が自分で見届けるよ！」

首を振って否定したユーノ。

うむ。それでこそ我が弟分よ。

ふふふ、とうとうけりがつくかも知れんなあ。

と武将のようにとうとうと語るくらいにはテンションがあがってきた俺。

実際ちよつと不安があるが、もしかしたらなのはとユーノの関係にもけりがつくのかも知れない。

「セッティングは任せておけ。この前みんなで遊びにいこうって話してたおかげでみんなの休みの日はある程度把握してる」

「え、でも僕休みなんてとれないよ？」

「……まあユーノはそうだろうな。そのときもユーノは無理だろうなあって速攻除外してたし」

「ちょおおおっと！ なんで僕だけ外れてたの！？ 新手のいじめ？ しかも無自覚っぽい！」

だって、お前急がしいんだもん。  
全然休みとれないしさあ。

「というわけで、ユーノ。他の人の休みはかぶつてるところあるから、そのどれかで休みとれ」

「そんな無茶な！ 僕資料請求が四ヶ月先までたまってるんだよ！？」

「じゃ、この話はなかったことに……」

「ごめん！ 僕が悪かった。すぐにでも休みをとるよ。でも一ヶ月はまって」

「それはすぐとは言わん！」

その日の夜。

「いつそのことトリプルでもよかったんちゃう？」

「お前は俺に目の前で失恋させたいんか？」

「それはそれで青春かなと」

「鬼か」

「残念。歩くロストログアや」

「余計に夕チが悪かった。これは盲点」

「むしろ節穴。この会話でいろいろと悟ってほしかった」

「ん？ なにかいった？」

「……なんでもないわ！！」



## 第二十九話 「ダブルデート（後）」

「今日は忙しいぞ！」

気合いを入れる意味を込めて一喝。

カツと目を開いて机の上におかれたデバイス一式に手をのばす。

触れたデバイスから伝わる機械特有の冷たい温度。それは俺の胸の中にある熱さとは正反対のところにあった。

「とうとう、今日。けりがつくかもしれないんだ」

腰に一つ。足下に一つ。手首に一つ。首元に一つ。

どれも俺が丹誠込めて作ったデバイスたち。

まさに俺の人生がかかった今日にふさわしい相棒たちだ。

みせてやろうぜ。

俺たちの力って奴をよ……！

不思議と最後に首にかけた宝玉型のデバイスの表面が光った気がした。

ストレージデバイスでしかないのに、そんなことはあるはずないのに、俺はそれにとても心が落ち着いたような気になる。

きつと俺の勘違いだろう。

それでも信じずにはられない。

靴を履き、何度もずれが無いかを確認して納得のいく履きごごちになるまで続ける。

……くいは残したくないから。

三度目でようやく納得がいく。  
一度だけ目を閉じて、開く。  
空気が変わって見えた。

意識の持ちよう一つで変わってしまう世界に、苦笑しながら、俺は覚悟を決めてドアノブに手をかける。

そこで、少しだけ縁起をかつごうと思った。別にたいした理由はない。

そのまま胸元のデバイスを引き寄せてキスを一つ落として、十字をきる。

無信教な俺だけど、今日くらいは頼らせてくれよ。

静かに頬に笑みが浮かぶのを自覚したままに、俺は目の前の扉を勢いよく開き

！

「さあ……………いくぞ！」

……………と勢いよく飛び出した俺の後ろでは、はやてが「むやみにシリアス気取る男ってきもいわ」と一人つぶやいていた。



第二十九話 「ダブルデート 後編」

「さあさあ、今日も始めましたユーノの恋愛を本気で応援する会。今日はいつたいどんなことをするのでしょうか？ はやてさん、説明御願いします！」

「はい説明変わりました八神です。今日はなんと奥手のユーノ君となのはちゃんを含めたダブルデートの実況生中継です！」

「……いきなりネタふっておいてなんだけど、はやてって万能だな」

「そら、いつも鍛えとるもん」

とまあ、俺の目の前にいるはやては慎ましやかな胸をはる。

そんな俺たちがいるのはミッドチルダで一番大きな遊園地。地球でいうならネズミやらお姫様やらがいるテーマパーク的な感じの場所だと思えばオッケー。

もちろん若者たちがデートに行くのに非常に人気の場所だ。

今回は先月に約束したダブルデートに行くことになったわけだ。

一応俺がプレイベートのときはちよいふェイトを、口先三寸で騙くらかしてダブルデートにした努力は忘れてはならない。あとでユーノにお肉食べ放題に連れて行ってもらおうと思ってる。

そしてコールの方は最終的に二人つきりにするし、どこかに途中でいなくなってもいいよとOKを出したら一発でいいよと話を許可された。

なのはのほうは友達から誘われれば断れない人なのでフェイトに誘ってもらえばOK。

唯一の心配だったユーノの休暇もしっかり調整したので大丈夫でした。

ただあえていうなら安定のヘタレだったことをここに記す。

ともあれ、いくつかの心配事はあったものの無事今日という日を迎えられたことを喜ぶたい。

が、まだだ。

俺のゴールはつれてくることなく、二人をつなげるキューピッド役なのだ。

ここで満足はできない……！

ちなみにつなげるってなんかエロいよねと隣のはやてに言うと童貞やな、と鼻で笑われた。なんてこった。

「みんな入ったみたいやで。私らもいかな」

クツクツクと一人完璧な作戦とその後に夢を馳せているとはやてが俺に手をもってぐいぐいと腕を引いていく。

「うお！　びっくりした！」

「いちいちオーバーやな。どうでもいいからさっさとチケット買おうや」

係員が俺とはやての組み合わせに微妙に納得いかない表情をしたが、きつと他意はないはずだ。

ゲートをくぐると最初に人の集まりやすいお店が立ち並び、町とは違う不思議な雰囲気を感じる。きつとこうして特別な雰囲気をもしだしてお客を楽しませるのだろう。

はやと二人で前のみんなを見失わないように付かず離れずで追いかけていく。

さすがに距離があつて話してる言葉は聞こえないが、楽しそうなのは伝わってきた。

二人で歩いていると近くのキャラクターが近くにとことこと寄ってくる。はやてもやはり女の子なのか、かわいいわぁとつぶやく。

「中のひと……」

「あかん、いったらあかんで！」

けれども、なんというか男って奴はこういうのを見るとどうしても中の人のことを考えてしまうものだ。

隣で女の子が楽しんでいるから空気はよむけど。

ちなみにだが、こういったテーマパークでのキャラクターは大抵幻影魔法が使える魔導師がしていることがおおい。

そのほうが着ぐるみなどではなく姿を変えられるのでリアルなのだ。

……たまに子供がリアルすぎて泣くらしいが、それはささいな問題だろう。

「なのはたちが動いた。……最初は絶叫系で、後々で行列になるやつに行くらしい」

「ん？ あれ、声聞こえるん？」

はやてが不思議そうに首を傾げた。

……くそ、かわいいじゃねーか。

「うんにゃ、読唇術」

「あかん、今までの総一さんのイメージが吹っ飛んだわ」

ふふ、なにを隠そう俺には百八の秘技がry。

「はいはい厨二厨二。私らはどうするん？ 一応並んどく？」

「並んで乗ってるうちに見失ったら困るから基本的には乗らない予定」

俺たちが楽しんでいる間にみんなを見失って応援ができなくなった  
ら元も子もないだろうに。

小さく「あかん、来た意味がない」と舌打ちとともに声が聞こえた。

……たらりと流れる汗。

いや、わかってるよ？ 俺だってそういうことはしてみたいとは思  
うけどね。

今日のメインは応援で、はやてはそれについてきただけで……

うん。だからさ

「あんまり今日は期待すんなよ？」

はやてに申し訳ない気持ちになりながら謝る。  
がしかし、

「大丈夫、きつと総一さんならやってくれると信じとる」

「いや、俺の話聞いてた？」

「信じとるで」

ぐっとサムズアップ。

いつぞや俺の脳裏に浮かんだあのどや顔にそっくりだ。  
いったいこいつはどんなハプニングを期待しているというのか。

「とりあえず、なのはちゃんたちが建物の中に入ってたけど……  
どうするん？　ここで待機？」

ハプニングを期待されてもハプニングだからこそそれは偶然で、期待するのは間違ってるだろ。

と思って目を離していた俺をよそにはやてはユーノたちの姿をしっかりと追っていた。

さすが捜査官。しっかりと対象を追う力があつた。

「あ、この肉うまいわ」

そしてその目は立ち食いの食べ物にも有効らしい。

「ん。食べてみ。意外といけるわ」

「あ、サンキュー」

はやてからのばされた肉を俺も一口。

縁日で売っているチキンステーキに独特な辛みがついたもので、一口噛むとじわっと肉の甘みが広がった。

「ほんとだ。こりゃうめー。家でも作れればいいレベルのうまさだ」

「さっき作りから見とったけど、多分作れるわ」

「まじ？　今度教えてくれ。っと、そういえば俺実家に今度帰るか

らそのときの土産も選んでおかないとなあ」

「なら帰るときに選んだるか？」

「センスがいいのを頼む」

「大丈夫だ、問題ない」

と少しばかり談笑。

すると四度目のジェットコースターの間辺りになのはとユーノ、そしてコールとフェイトが乗っていた。

コールとフェイトはしっかりと手をつないで俺たちに見せつけてくれた。

さすがリア充。

奴にとって人生の墓場は墓場ではない。

もしかしたらユーノはそんな二人の空気に当てられてうんざりしないために二人の前側に座ったのかもしれない。  
しかしなのはの様子を見ているとそんな心配は無用のような気がする。

「なのはちゃんえらく怖がつとるね」

「やろうと思えば新幹線より早く飛べるのにな」

微妙にうつむいて目の前の棒をしっかりと握っていた。

少しずつあがつていく高度と比例して顔色が悪くなっているのは気のせいだろうか？

「自分で飛べないのが怖いのか？」

「なのはちゃんってほら、こういうとあれやけど不思議生物やから。魔法使えば次元世界見渡しても最高格の一人やけど、運動でんではめやる？ きつとそんな感じや」

「なるほど、納得。つつか仲間にもそういう認識なのが哀れ」

隣のなのはに何度も声をかけるユーノ。  
しかしたいたした効果はなさそうだ。

そんな二人を前にしてるのに、後ろの二人はやたら楽しそうだ。  
まだ落ちてもいないのに、手をつないだまま手を上げている。見せ  
つけてるのか、それとも御約束だと思ってるのか。

きっと本人たちは後者で、周りからは前者だと思われるんだろう  
うな。

「あ、落ちた」

「なのはちゃん、もう声も出せないって感じやな」

「のどが引きつってたのがよく見えました。……多分この後は絶叫  
系には乗らないだろうなあ」

「も、もうやだあ……」

朝十時三十分。

開店してからわずかに三十分でなのははグロッキーになっていた。

珍しく涙目のなのはの姿に、こ、これは！ と興奮してしまう自分に  
驚きつつもユーノはなのはを休ませるためにベンチへと連れて行

く。

憔悴したなのはが座ったときに安堵した表情になぜかそえられることを自覚したユーノ。もしかしたら彼は紳士という名の変態さんなのかもしれない。

ぼ、ぼくってやつは……と一人頭を抱えるユーノはおいておいて、今回のデートの中心であるコールとフェイトの二人はというと……そりゃもうラブラブだった。それこそ総一が考えていたなのはに自覚を促すようなレベルでのいちやつき具合だった。

もともと仕事以外でたいした趣味のないのはにとって休日とは読んで字のごとく体を休める日だったので、フェイトに誘われたときには二つ返事でなのははOKをしたのだが、

最初の三十分で帰りたくなってきていた。

もはや、なのはの頭のなかでフェイトのイメージはどこか宇宙のかなたへと投げ捨てられている。

いや、むしろ一撃必殺の鬼畜ビームで破壊されている。常識は投げ捨てるもの！と頭の中にやたら元気な病人が現れて叫んでいた。

まずなのはがフェイトを迎えにいったときからおかしかったのだ。いつもであれば最低限の化粧しかない（それでも十分に綺麗である）フェイトが私服のときにもそれはもうめかしこんでいたのだ！自分だって人並みには洋服も買うし（大抵はタンスの底だ）化粧もする（桃子に覚えさせられた。もう忘れた）が、フェイトはほとんど興味がなかったようで、中学校のときのようにアリサのプロデュースがなくなっただけからはそれが顕著だった。

なのに……今日の彼女の服はいわゆる若者ファッションで非常にかわいらしかった。

白のシャツの上にピンクの線が入った黒のフードつきパーカー。ほ



んの少しだけつけられたフリルをアクセントにしたスカートにクロ  
のオーバーニー。

フェイトが減多にしないポニーテールまでしていた。

なんでも仕事中はできる女のイメージらしいのでギャップを狙って  
いるのだとかなんとか。

……フェイト、恐ろしい子……っ！

わずか半年の間にいろいろと変化していたようだ。

きっと彼氏ができたからなのかもしれない。むしろそれ以外に理由  
がなかった。

私も彼氏ができたらあんな風になるのかな？

自然と彼女がそう思ってしまうのも無理はない。むしろフェイトが  
コールのことを話すときの顔をみていると、どうしてもいいな、と  
思う。自分でも幸せそうに笑うフェイトの姿に嬉しくなりながら、  
自分の知らない姿を見せる彼女にどこか憧憬に似たなにかを覚えて  
いるのだ。

すこし離れた場所で疲れたなのはのために飲み物を買ってくれてい  
る二人をみる。

二人は自然と笑顔で、笑っていて、すごく近かった。物理的な距離  
が近いんじゃない。フェイトの心とコールが近いのだ。

なのはの視界の中に、いつもすこしだけ後ろを歩いていたフェイト  
はもういない。

「なのは……大丈夫？」

そんな自分でもよくわからないことを考えていたからだろうか。ユ

ーノが心配そうに見ていた。

「まだ気持ち悪いようなら医務室のほうに行く？ それともちよつとまずいけど僕が回復魔法をかけようか？」

「うっん。心配させてごめんね。もう大丈夫だよ。元気元気！」

せつかくの遊園地なのに自分はなにをしてるんだろうか。せつかくの楽しい休日のはずなのに。

本当はすこしだけふらふらとしていたがなのはぐつと胸の前に腕をよせて笑って見せた。

「そう……？」

「もう！ そんなに心配しなくても大丈夫だよ。私だって教導官なんだから」

体には自信があるんだ。

なぜかその言葉にユーノの顔が真っ赤になる。

「そんなことってなのははいつも無茶するんだから。信じられないかな」

「フエイトちゃん！ ……そんなことはないんじゃないかな？」

買い物から戻ってきたフエイトがなのはに飲みものを渡す。

「だっていつもそうだったよね。私のときも、はやてのときも」

「うにゃ……」

「落ちたときもみんなが休んだほうがいいんじゃないか？ っていうのに、大丈夫って言って怪我しちゃったし」

「うっ……」

「ね？　なのははこれでも信じられる？」

「…………ごめんなさーい」

よろしい。といったフェイトが笑う。

……いつもフェイトちゃんは優しいね。なんだか先にいかれちゃったみたい。

そつと顔をほころばせた笑顔が余計になのはとの違いを意識させる。最近はいつもこうだ。なのはの目から見てフェイトは変わった。今までの内面だけの話じゃない。外見もそう。

艶やかな瞳、大人っぽさを得た笑み。それはなのはが一つも持っていないもので、でもお母さんたちは持っていた。

「うん。でも本当に大丈夫だから！　次に行こうよ！」

違う、今はそんなことを考える時間じゃないよね。

なのはは振り払う様に立ち上がってフェイトの手を引いた。

「次は私が選ぶの！　もう絶叫系はこりこりだもん！」

ただこれは、自分でも逃げだとそうわかっていた……だれよりも。

「はやてー。そろそろあいつら動くみたい」

「そか。私らも行こか」

フェイトたちがベンチで休んでいたところから後ろに10mほどの位置に俺たちはいた。

「すいませーん！ ココナッツジュース一つお願いしまーす」

「はい、ただいまー！」

そろそろ動き出さないといけないと思うもの、声がかかると自然に体が反応してしまう。

なんのことかと思うかもしれないが、なにを隠そう俺たちは遊園地の中で出店をやっていたのだ。一応許可はとってあるから安心しな遊園地の店員に化ける。完璧なカモフラージュだ。

「にしてもさっきフェイトたちが飲み物を買いにきたときはびつくりしたなあ」

「そやね。正直なんでピンポイントに私らのところくるん！？ ってびつくりしたけど、なんとかなってよかったわ」

はやてが飲み物の中にくっつかのトッピングをしてお客にだして、俺は会計を担当する。

「にしても、なんで総一さんは出店なんて持ち運びしてるん？」

「こんなこともあるうかとデバイスの格納領域にいられておいた」

「そういえば総一さんって買い物袋のかわりたくさんデバイス持ち歩いてるんやっただな。便利そうでうらやましいわ」

「はやての場合は軍事的なものがあってあんまり格納領域をそういうのに使えないからなあ。俺の場合は仕事の関係でたくさん壊れた

デバイスが手に入るからね。材料には困らないし、戦うわけでもないから複数のデバイスを持ってても支障ないし」

その後ろに並んでいた人に売り切れなんですと言い訳をこいてすぐにお店を腰元のデバイスの収納領域に格納する。ポイポイカプセルみたいで本当に便利だ。

「なのはちゃんたちは次どこにいくって？」

「さあ、とりあえずぶらぶらと歩いてるみたい。このコースだと空中ブランコと観覧車、それにミラーハウスあたりのどれかだろ」

「空中ブランコかあ。昔学校の遠足でいったとき、クラスの男の子たちが靴とばしとったなあ。でもなのはちゃんが乗らんから、ないやる。ジェットコースターるとき、ゴール地点のなのはちゃんの顔涙でぐしゃぐしゃやったし」

「観覧車もしよっぱなから乗るのは……多分ないだろ。コールの場合、乗ったら我慢できなくなってホテエエル！ コースだろうし」

「いきなり生々しいっちゅーねん」

「所詮男と女よお……」

「あんな、隣に一応女の子があるんやからもうちょっと気を使おうな」

につこりとしたはやてがすこし怖いのはご愛嬌。なんでも交渉に体を一度も使ったことがないのが自慢だとか。普通そんなドラマみたいなことしないだろ。

「ふふ、世の中そんな綺麗事だけじゃあかんのよ」

とりあえずヤバそうな話なのでスルー。とりあえず二人はで歩く人に紛れつつ道を歩いていく。

「あれ、見てみ。ちっちゃい子供が歌うたって路銀稼いだるで」

「火星ドル？　いつから火星は大統領にテラフォーミングされたんだ？」

「茶化せんでもええやろ」

「にしても、エリオと同じくらいの子供なのに路銀稼ぐって……たくましいなあ。俺も子供ができたらかのくらいでできる様に育てたい」  
「そうやね。うちの場合、生まれたときからやたらいい子やったから」

「そっいえばバツゼロにして子供が六人いたな」

「……ん？　なんかおかしい気がするんやけど。まあええわ」

結局はやてと子供にお金をすこし渡して聞いてからストーキングを再開する。

「にしても歌うまかったなあ。俺も音痴だから懂れる」

「私らの中だとフェイトちゃんが一番うまいよ。多分CD出せるレベル」

「今度録音して結婚式の披露宴で流してみるか」

「恥ずかしがるフェイトちゃんが目に浮かぶわ」

甘い匂いが香ってくるので道端にあったチェロスに似たお菓子を買って半分食べてはやてに渡す。

こうして世界を超えても食べるものというのはそんなに変わらなかつたりする。特にお菓子なんかは。

「おいし？」

はやてはもらったそれが気に入ったのか、もう一本違う場所ですって食べていた。

自分でも作れるんだから、家で作ればいいのと思うが、それはこ

こで食べるから美味しんだろ。うな。そう思えばぼったくりのような値段にも我慢できる。

しかし笑顔になってくれるのは嬉しいが、俺のお財布からすべて出ていると思うと悲しい。無理に付き合わせたお詫びと思えば納得もできることはできるけど。

ーそうして次の給料日まであと何日……と頭の中のカレンダーをめぐっていると、ギシギシと耳に不快な音が聞こえた。

「あれ、どうしたん？」

思わずはやては隣にたっていた総一に聞いていた。さっきまでのほのぼのとした表情はなりを潜め、真剣な顔つきであったりを見回している。

「変な音が、聞こえる」

変な音？

はやても耳を済ましてみるが、聞こえるのは遊園地の背景音と子供達の騒ぐ声だけ。別に変な音でもなんでもない。

「いや、これは……もしかして……！」

しばらくして総一がきつと空中ブランコのほうを睨む。

「あそこか……！」

「はえ？ え？ なんの話や！？」

総一は空中ブランコの一部を指差す。そこはここから50m先。米粒より小さい。はやてにはなんのことかさっぱりだ。

「みろ、あそこのボルトが外れかかっている。このままじゃ大惨事だ！」

「いや、見えへんて」

「いやいや、総一さんいったい視力いくつですか？と思ったはやては悪くない。むしろいきなり豹変した総一についていけない。」

「別に放っておいてもいいけど、このまま問題が起きたらデートが中止になる！？ そ、それはさせんぞ！」

「あれ、なんか急展開でさらによくわからん総一さんの状況についていけない。要するにどういうこと？ だれか私に説明してな。というかほんとに総一さんなん？ 本人？ テンション違うで」

「いくぞはやて！」

「いや、だからお前は誰やっちゅーねん」

空中ブランコのへと走り出した総一にああもうと悪態を尽きながらはやても走った。

内心おニユーのスカートで走りたくないなあ、と思っているが総一はおニユーと気がついてすらないので、別にいいかと考え直す。

一応男の人の走りについていくために簡易的な肉体強化魔法を発動



させ走るが、意外と早い！ 魔導士のはやてがまったく追いつけなかった。誰かにぶつかることもなく、人並みをすらすらと抜けていくその走りを前にどんどん距離が広がっていく。しかも途中にいた遊園地の警備員らしき人の首に手刀を一撃いれて瞬く間に服を奪って着替えていた（ちなみに本当に瞬く間ではやてには着替えてる瞬間が見えなかった）　そこまでしているのにはやてはまったく追いつけない。なんというか、フェイトからコールが肉弾戦が強いと聞いていたが、ここに元凶があつたのか。

総一は空中ブランコにたどり着くとすぐに管理員に定期点検ですとか適当なことをいっていくるめて（店員の目がなぜかぐるぐると回っていた）さっきのボルトの近くにワイヤーを投げて固定し上りながら近づくと、再びデバイスの格納領域から六角レンチを取り出して締める。さらに溶接機まで取り出して焼き付けていた。

ここまでわずか二十秒。はやてもびつくりな手際だった。

あまりのことに思わずはやては、

「あかん、私の中の総一さん（イメージ）がジョイヤーされてしまった」

と小さくつぶやいたそうだ。

ふうー。いい汗かいたぜ！

誰かが怪我をする前に直せてよかったよ。思わず本気で直してしまつた。なぜかはやてが呆然としていたことが気になるが、どうしてだろう。普通に直したただけなのに。

「どこに警備員の服を奪つて遊園地の遊具を直すやつがおんねん。というか総一さんがもうめちゃくちゃや」

「なにいつてんだよ。めちゃくちゃなのははやてだろうに。聞いた話だけどSSランクって一人で都市を落とすレベルなんだろ？ そんな人間核兵器みたいなのにそう言われると照れるって！」

「あかん。私もめちゃくちゃっていわれるほうの人間やった」

なんだかよくわからないが、ブツブツといっているはやての手を掴んでなのはたちを追いかける。ちよつと目を話した隙にどこかに消えていた。どこだろうか？

ちよつと不審者っぽいかもしれないが、花壇の端っこに立ってあたりを見渡す。

ーいた。

みんなはすこし離れたミラーハウスに入っていくところだった。

「ミラーハウス？　ほんならいい考えがあるで」

それを聞いたはやてがなにやら邪悪な笑み。どうやら考えがある様子。

「なるほど……その案のつた！」

ユーノたちはミラーハウスに足を踏み入れていた。

全面鏡張りで地球のものと違って接合部分が限りなく見えにくくなっており、さらに少しだけ薄暗くなっているの、本当に先が見えない。以前地球で入ったときは足元の鏡の継ぎ合わせの部分を見ればある程度道をわかったものだが、ここには通用しそうにない。むしろ小さな子供だといつまでも迷ってしまい出られないレベルなのではないか。確かに入るときの注意事項に子供から手を離さないでくださいとは書いてあったが、これは明らかにやりすぎだろう。

とはいえ、フエイトはこの状況を楽しんでいる様でコールと肘から腕を組んでいる。かすかに絶対に離さないでね。ああ、絶対に離してやるもんか、と声が聞こえた。同時にどこからかリア充いね！と声が聞こえた気がする。自分も少しだけ怨念を飛ばしておいた。

しかしこれは総一的にいうならばチャンスではないだろうか。少し怖がっているなのはを助けるという大義名分を掲げてなのはの手を握ろうと、彼女に近づいていった。

が、予想に反してなのはは不安そうにも寂しそうにもしていない。男の子のユーノだって幻惑的な空間を前にして小さな不安があるのに、彼女にそういったものはまったくなかった。

予想が外れたことにいささか残念に思う。

しかしどうしてだろうか？

「なのは、怖かったりとかしないの？」

「どうして？」

「ほら、こういう場所って閉じ込められてる感じがするし、出られるか不安にならない？」

「別に。いざとなったら私が壁抜きすればいいんだし」

……ねえーよ。

思わずユーノが叫ぼうとしたのは無理はない。ユーノだって男の子だ。怯える女の子を助けるというナイト役には憧れるし、好きな女の子に触れてみたいというのは当然の欲求だろう。しかし、これはない。

壁抜きすればいい？

お前はどこの破壊魔だ。

いささか一方的だが、すこしくらいは女の子らしい思考をして欲しいと心の底から思ったユーノだった。

こういうとあれだが、さすがのユーノも醒めた。いけない。これじゃあまずい。

すこし自分の気分を持ち上げようとなのはをみる。

色っぽいうなじ。ぷりつとした唇。平均以上に膨らんだ胸。ひきしまったウエスト。パツチリとしたまぶだ。

うは、これは興奮する。

……今度は違う意味で落ち着く必要ができたようだ。

自分の視線に気がつかれる前にユーノは一步後ろへ下がった。

せめてやるな。彼だって思春期の男の子なのだ。

しかし、そんなユーノの様子をしっかりとみていたものがいた。その様子はしっかりと記録されて、後々話の種になるのだが、それは後の話。

ともかくユーノはなのはと一步分の距離ができたわけだが、それを虎視眈々と狙っていた奴らがいた。いわずともわかるう。あの二人だ。

ユーノが一瞬下がったその時、目の前で小さな魔法を発動させ、それはユーノにだけ強烈な閃光を放った。

「う、うわぁ！」

「え？ ユーノくん！？」

もちろん、そんな魔法が発動されればなのはも気がつく。もっとも発動するまでは気がつかなかったが。

「め、目が……」

強烈な閃光がユーノの視界を奪った。どうやら目くらましの魔法のようだ。なのははすぐにあたりを見渡して、その犯人の姿を視界の端に移していた。が、みたことのない2人組。それよりも今はユーノだと座り込んだ彼のそばによる。

「大丈夫？」

「えっと、ちよっとぼやけてて見えないかも」

ミラールームで前がうまく見えない。ユーノは本格的に出られるか心配になってきた。

「仕方ないなあ。ちよつと手をだして？」

「え、うん」

言われた通りに手をだすとなのはの体温が伝わってきた。そればかりかなのはは彼の手を肘で包み込む様にしてユーノを支える、

――こ、これは……！

いわゆる腕組み（恋人限定）というやつだった。なのははユーノを立ち上がらせる時に手首を掴んでいたので、彼女の手と合わさったわけではないが、それでもユーノには感動的だ。

これで手首を掴んでる手のひらが僕のと結ばれれば最高なんだけだなあ。

……さすがにそれは高望みすぎだろう。ユーノは肘を抱えられて柔らかい感触に内心でひゃっはーと声をあげながらこれで満足することにした。だれがイタズラで魔法の使ったのかわからなかったが、今ならご飯をおごつてあげてもいい。

「じゃあ、しつかり捕まってるね？」

「作戦成功であります！」

「よくやった八神一等空尉！」

ミラーハウスの出口でフェイトたちに見つからないようにしながら二人をみてニヤリ。ユーノはとくに視力が戻っているはずなのに、なのはになにも言わずしつかりと感触を楽しんでいた様だ。途中からなのはもユーノの様子に気がついて赤くなっていたのは、こちらの思っていた以上の成果だった。

「また、我々の目的へと一歩すすんだ。この一歩は小さくともいずれ偉大な一歩となるう」

なかなかの成果を前に満足。これだけでも来たかいがあるというものの。後ろではやてが、あかん、貴重な休日潰してなにやつとるんやろと頭を抱えていたが、俺にとっては万金にも勝る結果だったので特に何も言わなかった。満ち足りた満足感とともに二人を眺めていると、彼女たちの後ろに五人ほどの男がつけているのが見えた。

「む……いや、まだ休むのは早いぞ、八神一等空佐」

遠くから唇を読んでみるに、彼らはなのはとフェイトに声をかけたいようだ。どうやら体が目的らしい。誘ってしまえばこっちのものとか世の中の女性をなめているとしか言えない下半身どもめ。舌打ちしそうな気分を抑えるが低い声が出る。

「あちゃー。なのはちゃんたちに目を付けるなんて、なんて不幸なんや。あの子たち間違はなく死ぬで。せやから放っておこう。別に怪我もせえへんやろ」

「そりゃそうだけど、二人の間の空気が悪くなるかもしれないじゃ

ん。せつかくいい雰囲気なんだし」

「さすがにユーノ君が男みせるやる」

「はやてはあいつのヘタレ具合をしらないんだよ。それに今は覚醒状態のコールが近くにいるからユーノが活躍できるとは思えない」

「……せやな。コールくんならきつとフエイトちゃんのためにやってくれやそうやし。ユーノくんが日の目を浴びることはなさそうやね」

「そういうこと。となるとなあ………消すか」

「賛成に一票。不安定要素は消すに限るで」

その日。不良ちっくな男たちは誰にも知られず、消えていった。

「いい汗かいたなあ」

「本当。最後の方にはさすがに仲間が一人一人消えていったのに気



がついたせいで、ちよつと大変だった」

俺のちよいとした仕事を手伝ったはやてに感謝の意味を込めてジュースを一本投げて渡す。やたら甘いコーヒーでどこがおいしいのかわからないが、はやてはこれが好きなんだそうだ。

「ありがとお」

「手伝ってもらったお礼さ。にしてもよく俺の動きについてこれたね。はやてって砲台のイメージが強かったけど、実は単独でも結構強い？」

「辺り一面を吹き飛ばしてもいいならそれなりに戦えるけど、そうじゃないときは制限つくからきついわ」

本当か？ と首をひねりつつ、後ろに視線を巡らせる。

一昔前のゴミ箱に捨てられた不良がそこにはいた。

「意外といけると思っただけだなあ」

思い返す一方的な暴力。はやてが消音結界を使って極力音をなくし、俺がその間に後ろから閉め落とす。実に単純作業であつた。はやてがいると作業効率が半端じゃないね。

「おだててもなにもでえへんよ。それよりなのはちゃんたちには何もなくてええの？」

「いいじゃね？ 俺たちはあくまで様子見だし。もともとなのはに彼氏をつてやつを意識させるのが目的だしね。特には何もしないよ」「つまりフェイトちゃんが無自覚で見せつけるからそれだけでオーケーと」

見せつけるって、今気がついたけど周りの人にかなりの数のカップ

ルがいるんだから雰囲気で流されてくれればいいのに。

「ないわ。それでなのはちゃんに恋人いるならうちにも三人はおる」  
「まさかのハーレム希望だったのか」

「貢いでもらいながら生活するのが夢でした」

「なにこの車いす少女。普通は元気に生活する夢を持っていたはず」  
「残念、少女は枯れていた。働きたくないでござる」

「よくよく考えれば今すぐニートになれるはやてだった。俺にも一人くらいヴォルケンよこせ」

「婿にきてくれたらええよ？」

「ベル力的なお話フラグですね。わかります。姑ヴォルケンとか、俺抹殺対象でしょ。そのフラグは全力で回避」

「なるほど。特大の死亡フラグの回避に成功した総一さん。しかしそこには罠が」

「避けた先の罠とか、どんだけ」

「そこにはなぜか上半身裸のザフィーラが！」

「……むしろその罠をしかけたのははやて。一から十までお前の手のひらの上だったのか」

「こんにちは、諸葛孔明です」

いけないと思いつつあほな会話で楽しむ。

なかなか本格的な動きがないから俺たちもちよつと暇だったんだ。

とりあえずそれなりの距離を離れた状態で、ベンチに座ってはやてとだべる。

「そういえば今度またA級受けるんやって？」

「どこから聞いたんだよ。僕のプライバシーを返せー」

「ほら、総一さんの上司にスキンヘッドのおっさんおるやろ？ 実は仲良くてな。総一さんの職場の様子はよく聞くんや」

「……本気で血の気が引いた。おま、友達の職場環境把握とか。今時奥さんだつてやらねーよ」

「ふふふ、うちは予測変換から浮気してるか判断できる女やで？このくらいお茶の子さいさいや」

「一度も付き合ったことのないはやての妙な自信はどこからくるんだ」

「ネット」

途中でパレードが始まったのでフェイトたちの位置がある程度固定された。

フェイトなんかは軽く幼児退行しているのか、コールにひっきりなしに声をかけて体を密着させていた。

そろそろ我慢がきかなくなるんじゃないかな。と思っていたら案の定。

コールがなのはたちから見えない位置でフェイトを抱きしめた。

もちろん一応軍人のなのははばっちりとその姿を隠れてみていたが。

フェイトも触れる肌から興奮してきたらしい。

腰をもじもじと動かしてコールとキスをする。

うわぁ、となのはがつぶやくのが聞こえた。

顔は真っ赤だ。

思わずはやてと、ナイスとサムズアップ。

よくやったコール。

事態を見守る俺たちをよそにさらにヒートアップをする二人。完全に出来上がってます。

個人的に観覧車は外せないだろ。と思っていたがコールのプラスチックな理性は完全に溶けきっている。

はあはあど熱い吐息を二人で交換しながら、小さく「ホテル行こっか」と聞こえる。

……とりあえずこれ以上みたくない。

親友の発情している姿をみるのは眼にいたい。  
なぜか涙がにじんだ。

そんな俺をよそに、なにやらなのはとユーノの間の空気も変化していた。

お？ これは来たんじゃね？

どうやら思った通りの変化が起きたようだ。  
はやてと二人でにつこりと笑みを浮かべて、彼らに敬礼。

恥ずかしがりつつ、微妙な距離を開けて歩く二人の姿は微笑ましい。  
その隣で大人なアダルティックな二人と比べられるから余計に。

とりあえず、俺とはやてはニマニマと笑いつつ、あまりハイテンションに頭がおかしくなつて、

右手を空に掲げ、お尻を後ろへ突き出し、

「オギャンバイ！」

といってその場を後にした。  
後悔はしてない。

はやてはしらしい。

### 第三十話 「プロですから」

「むひよひよひよ！ あなたの心の鍵を開けてあげましょう！」

「鍵道化師帰れや」

### 第三十話

「ふと今回のことだと思ったんだけどさ。今度からユーノとなのはを俺たちで連れ出して、途中でいなくなれば一応擬似デートになるんじゃないかね？」

「！？ それは盲点やった。でも私は協力しない」

「！？ なんとという盲点。それじゃあなのはが呼べないじゃないか」

「私はいつまでも傍観者でいたい」

「といいつつ最終的に助けてくれるのが最近のはやり」  
「大地の四神のことかー！ー！！」

なんでそんなに新しい情報を知っているのかと小一時間問い詰めた  
い。

とりあえず待ち合わせのコーヒー屋の目玉商品を一口飲んで口を潤  
わせる。

「そう言えば今日ツンデレに会った」

「俺にどう反応しろと」

「べ、別に話が聞きたいわけやないんやから！ といえいいと思  
う」

「むしろ関西弁のツンデレがニュージャンル過ぎて目から鱗」

「お、お前のことが気になってるわけじゃないんだからな」

「わざわざ男の声に変換してくれてありがとう。でも男のツンデレ  
は最終的にボーイズラブだから却下」

「百合ならええん？」

「生産性のない行為を推奨するほど俺は悟ってない」

「ミッドではあるから大丈夫！」

ああ、そう言えばそうでしたね。

「そのうちネコ型ロボットができそうな科学力に僕びつくり」

「そしてレインボーブリッジから蹴落とされるんですねわかります」

「あかん。それ怒羅江門や。そんな大量生産される未来は見とう  
ない」

「なんという世紀末」

「ぶつちやけ廃棄地区があるミッドは一步手前やと思っ」

「つまり左右にわれるモヒカンがいるわけだ」

「ぎゃっつび」。あのCMは斬新やった。思わずザフィーラで挑戦

したのはいい思い出」

なん……だと。

すぐ見たかったじゃないか。

「そんなどうでもいいことより今日の要件キボンヌ」

「ネット用語を実際に話す男は女性にひかれるランキング第二位」

「狸がいつちよ前に言葉を話してるんだがいくらで売れるのだろうか」

「こんなかわいい子を風呂屋に沈めると申すか。この鬼畜！ 外道

！ 鬼！」

「一応できなくもない」

「あかん、今までお世話になりました。ちゃんと自首しような」

「未遂でつかまりそうな俺涙目」

どこからともなく出てきた手錠に冷や汗。

とりあえず仕舞わせてはやてとまじめに向き合う。

「そんなどうでもいいことより今日の要件キボンヌ」

「あれをどうでもいいことと言える総一さんにしびれる憧れるうう！」

「そんなどうでもいいことより今日の要件キボンヌ」

「いつの間にか世界が二度ループしとった。神父さんが覚醒したみたいやな。ところで総一さん明日暇？」

質問に質問で返すなー！俺は要件と聞いているんだッ！ と思わず答えそつになった。

「社会人に突然、明日暇？ と言われて暇だよと答えられるわけがない」



「よかった。明日ちよつと人と会う約束しててな、それについてきてほしいんや」

「話を聞け……って、そう言えば課長と仲いいんだっけ」

俺の予定を把握しているはやてが本当に恐ろしい。

この前聞いた話によるとはやてはなのはやフェイトたちの予定まで知っているらしい。

「とりあえず却下で。明日は予定がある」

「……あれ？ 私そんな話聞いてないで」

「むしろ知ってたら驚きだよ」

「うーん。それってまだ今度や駄目？」

なぜかは知らないが何時になくしつこいはやて。

いつもなら俺がちゃんと断れば引くのにな。

珍しいこともあるもんだと、目を白黒させているとはやてはここが落とし所だと思ったのか下から見上げてくる。

なかなか自分の容姿を理解してる。

「この悪女め」

「ベルカの女には褒め言葉」

「まじ！？」

「パチや！」

思わずノータイムでデコピンをした俺はわるくない。

「で、誰に会いにいくんだよ」

「士郎さん」

「……いったいどこに俺が呼ばれる要素がある」

「あかん、間違えた。ほんとミゼットさん」

「なぜに間違えたし！」

「噛みました」

「無理があることに気がつく」

どうやったらついてきてくれるんや。と頭を抱えるはやて。  
ぶっちゃけ俺についていく気なんてさらさらない。  
絶対に行かないからな。とはやてに視線を向ける。

「いっかいだけでいいんや」

「かつて偉い人はいました。その一回が命取りだぞ、と」

「せつかくやし、ね」

「手取りいくら？」

「モブのくせに。金の亡者め！ そんなんやから友達少ないんや！」

「来月にはたくさんいると思うよ」

「いったいなにする気や……」

「まあ、まき割？」

「すごい。それで友達ができるのがすごい！ 小鷹くんにもみなわせなあかん」

「プロですから」

うーん。とはやはりはやてが悩む。

その姿がなかなか面白いのでじつくりと観察。

俺も子供のころはファールブルにあこがれたものだ。

過去の思い出に浸っているとはやてがなにか思いついたのか今にも  
笑いそうな顔をしていた。

…… なんとなく嫌な予感。

「ところで総一さん。さっきの会話の頭だけ読んでみると面白いこ  
とになってるんやけど、どうなってると思う？」

「あん？　ちょ、つちよつとまってな。えーつと、いつかい、かつて、せつかく、てどり、もうじゃ、らいげつ……いったい？　まきわり、すごい、ぷろ？」

「つまりまとめると明日の予定は？」

「いかせてもらいます？」

「しゃーないな。ちゃんとついてくるんやで」

おまけ。

「昨日ばかデカイサメがおそってくるパニック映画をみたんやけど」

「ああ、あの有名なあれか」

「そうあれや。あれ結構怖いやろ」

「確かに。初めて見た時はトラウマだったな」

「うん、で昨日はリインがやっぱ怖がってたな。おもしろかったで。

ベッドの近くに行ったらいきなり、ベッドのしたにサメいないですよな？　って聞いてきて」

「……………」

「あれ、総一さん？　もしかして」

「なにも聞かないでほしい。あえて言うなら俺はガ　ラV sレギオ

ンを見てる時、映画館なのに正座をしてしまう人だ」

「……………総一さん。明日の予定はやっぱりなしにして映画見に行かへん？」

「……………題名は？」

「ほの暗い 的底から」

### 第三十話 「プロですから」(後書き)

s t s から最後まで書いてあるのに……  
変更しすぎて全然違う話になってしまった。  
もう昔書きだめた話が使えないじゃないか。

第三十一話 「終着点」(前書き)

急展開。完結まで一直線

### 第三十一話 「終着点」

誰もが幸福になりたいと願う。

それはなにもおかしいことじゃない。むしろ当たり前のことだ。自分の幸せを願わない人なんていないし、いたしたらそれは異常者でしかない。

考えないことがあるか？

あの子と話してみたいとか、もっとお金がほしいとか。

欲望の欲するままにそうなりたいと考えないことがあるのだろうか。

ない。絶対にありはしない。

ちよつとした時間に、IFを考えない人なんていないのだ。

だからこそ、俺は思うんだ。

これで良かったんだ。

って。

そう、これはいつだって考えていたことなんだ。

あの雨の日、俺が誓ってからずっと、ずっと思っていたんだから。こうなればいいと思っていたんだから。

その願い IFがかなったことに俺は喜びを表すべきなんだ。

そうさ。

これが俺の物語は終着点なのさ。

### 第三十一話 「終着点」

朝。完全無欠の朝。一般的にいつて今を表すのにこれほどふさわしい言葉はないだろう。

日の出始めたばかりとか、人のざわめきが聞こえ始めるころとか、いろいろと表し方はあると思うが、そんなことは関係なく普通に今は朝だと形容するしかない。

とにかく普通に朝だった。

しかし、そんな普通の朝とし洗わせない朝だというのに、ある一人の男にとっては、全く違う朝だった。

かつてない緊張に身を包み、上気する頬が赤みをさした金髪の男は、目の前の扉を睨んでいた。

いうまでもなく、一般的な男の顔に喧嘩を売るような美貌の男の名



前は ユーノ・スクライア。

彼は震える腕を持ち上げてゆっくりとインターフォンに近づけた。どうやら彼は家の主を呼び出したいらしい。しかし彼にとってそれは十二の試練に匹敵するかもしれないようだ。

ユーノは溜まったつばを音を立てて飲んだ。

そして、ボタンを 押した。ユーノは、ああ押してしまった。もうあとには戻れない。と覚悟を決めたが、それに反比例するようにピンポンと軽い電子音が聞こえる。

すると 当たり前ではあるが、はいと声と聞き慣れた声が聞こえた。

まだ七時だというのに起きている彼女の規則正しい生活リズムに感心し、今更ながら起きていたことに安堵しながらユーノは僕だよと扉の向こうに声をかけた。

「あれ、ユーノくん？ こんな朝早くにどうしたの？」

扉が開けられると家主は顔をひょっこりとだした。

細くしなやかな茶色の髪を揺らした少女 いや、すでに少女と呼ぶのはふさわしくないかもしれない はユーノの来訪に驚きながらも嫌な顔一つのせず彼を迎えた。

ユーノはほとんど化粧をせずとも男を虜にしてみうなのはの美貌に、今日もきれいだと声に出さずに云うと、静かに微笑んだ。

「ごめんね、朝早くに。でもどうしてもなのはに伝えたいことがあったんだ」

ユーノはばくばくと音を立てる心臓の音が耳の中でうるさくなるの

を自覚しながら、精一杯の去勢を張る。

「いいたいこと？」

なのは不思議そうにユーノをみた。こんなこと今までになかったのだろう。

ユーノは首をかしげるなのはへと手を伸ばす。

大丈夫かな。

嫌われないかな。

なんども自分に問いかけて、それでも譲れない思いを胸に彼女へと手を伸ばしたのだ。

いつも彼の背中を押してくれた兄はいない。たったひとりで、ユーノは彼女のと手を前に立つ。

そして、言う。

今までの努力を結びつけるために。

これからの時間ををより良いものとするために。

なにより

なのはのそばにいるために。

「僕と、でかけないかい？」

俺は時計が七時をさしたことを確認すると、テレビをつけてニュースでも確認した。

どうやら壁にかかっている時計が狂っていないらしい。そろそろあいつもなのはと会っているころだろうか。

朝の料理を調理しながら、彼らの姿に思いをはせた。

きつとなのはがいい感じに混乱して、そんなのはにユーノも一緒になって赤面したりするんだろう。

それこそ 彼氏彼女のように。

思わず浮かんだ情景に、俺は粘着な男だなあと一人息を吐く。

……なんせ、未だに引きずってるんだもんなあ。

俺って本当に粘着質な男かもしれない。

べったべたでどろどろな粘着質な男。

あんまり考えたことはなかったけれど、今まで女の子に告白されなかったのって、うつすらとうわあっと思われていたからなのか。なんとも言えない気分だ。

ふと、換気扇を見上げた。

空気をもつもと、それこそ底なしに吸い込み続けている。

地球のものと比べて、音も小さい。

なんでも夜の間に付けているのを忘れていることも多数あるとか。

そんな換気扇が……

いや、どうでもいいか。

なぜか換気扇が気になって、哲学的な思考をしかけていたがそれを放棄。

だいたいこんな換気扇について話をしても面白くないだろう。

俺は換気扇から目を話すと携帯をひらいた。

ところで俺の携帯はスマートフォンなんだが画面を見るときは、「携帯をひらいた」でいいのだろうか。

あえて時代の流れにのって、ロック画面を開いたというべきかなかなか悩む。

指を動かし、かちやっと人工音を響かせると、ホーム画面が開いた。その中から電話帳を選択し、コールに電話をかけようとして、手が止まる。

今日は休日だ。

きつとコールはフェイトといい朝を過ごしているだろう。

なら俺がそれを邪魔するわけにもいかない。

かといって、俺がユーノにかけるわけにもいかない。

なんせ今日は           ユーノがなのはに告白するんだから。

あれは昨日の夜。

俺が一人で江戸切子のグラス（お気に入り）に梅酒を注いでいる時だった。

コンコン、と扉が音を立てた。

俺はインターフォンを押さなかったことに少々違和感を覚えたが、扉あけないわけにもいかず、チェーンをかけてから開ける。ゆっくりと開けた扉の隙間から誰だと覗き見た。

するとそこにいたのは、ユーノだった。

俺はそれだけのことに息を飲んだ。

それはあいつの雰囲気、いつもと違っていたからだ。そこにいたのは昔なさけなさに溢れていた男じゃなかった。そう、何かを決心した男のようだった。

否、あいつは決心していたのだ。

チェーンを外した俺がユーノを中に入れようと扉を開いた。

しかし、あいつは首を横に振ると、ここで、と小さく声を出した。

ユーノの背後から吹く風は夜の冷たさと鋭さで俺の頬を撫でる。

理由は今でもわからないが、ただこの時　俺はユーノに帰ってくれと言いたかった。

無意識の言葉を飲み込んで、俺は瞳に意図的に優しさを込めてユー

ノを見た。

ユーノはそんな俺をじっと見ると、一言だけ……ポツリといった。

僕は明日、告白する。

誰に？

そんなことを聞く必要ななかった。

俺にはそれだけで全部通じた。

それだけがいたかったのだろう。

それだけを俺に残して、ユーノは去っていった。

ただ扉のなかに立ちつくす俺を残して。

From ユーノ・スクライア

総一、僕はずっと言いたかったことがあるんだ。

今までありがとう。

今日僕は気がついたんだ。

今まで総一が僕のために、ずっと背中を押してくれていたことを。

……ずっと、ずっと。

気が付いたら、どうしてだろう。

今までの自分が情けなく見えたんだ。

だから僕は決めたんだよ。

明日僕は、なのはに告白するよ。

今までに教わってきたこと、使ってみるよ。

どうなるかは分からないけど。

僕は告白するよ。

ただ、総一には一言、いいたかったんだ。

僕の口から直接。

今まで、僕を応援してくれてありがとう。

無機質に文字を映し出す携帯の画面。

そこに書かれた文字を何度も何度も読み返した。

時間が過ぎて後で読み返せば黒歴史確定のなんでもないメールだ。本人が消そうと思って、人に送った分は消せないのだからがわるいが、後で話の種になる程度のメールだろう。

俺は一瞬、ぎしつと音がなるまで握ってやろうかと思ったが、スマートフォンをそこまで握ると歪むので自重する。

……実際、俺はこのメールに何も思わなかった。

いや、まあ、詳しく言えば何も思わなかったなんてことはない。

ただ　　とうとうかあ、と感慨深く思ったただけだった。

確かに、俺はなのはが好きだ。

しかしそれは昔の話、今は違う。

だから、世間一般的な物語の登場人物のようなことを思わなかったのかもしれない。

俺は出来上がった料理を皿に載せて、窓から遠くの青空を見た。

そこには久しぶりに雲ひとつない青空が広がり、気持ちのよさそうな日差しが差し込んでいた。

ああ、今日はデートびよりだな。

遠くで鳥の鳴き声が、聞こえた。



雲一つない空の下、ユーノはご機嫌な表情を隠さずに町の通りを歩いていた。

降水確率0%の空と同期するかのような笑みに町を歩くご婦人がたもニコニコと表情を柔らかくし、柔和な笑みを浮かべた。

……あらあら若いっていいわね。

彼女たちは一様に微笑ましいと瞳に言葉をこめて、彼の隣を歩く少女に視線を送った。

しかし少女は自分に向けられた視線に気がつけても、その意味を図ることはできない。

ただ純粹に注目されているなあと思い隣を歩くユーノへと疑問をぶつけるだけだった。

「ねえ、ユーノ君。なんだか見られてるけど……私どこか変かな？」

さすがに彼女も年頃の女の子。  
心配そうに髪の毛をいじりだす。

「うっん。別に変なところなんてないよ。あえて言うなら、なのは有名人だからね。もしかしたら雑誌かなにかをみんなが見たんじやないかな？」

「ええー！ そんなあ」

恥ずかしそうになのはが俯いた。

「うっう……恥ずかしいかも」

「僕もみたけどかつこ良かったよ？ 確か……大好きな魔法の力で誰かが」

「うわぁー！ー！ なんでユーノ君が知ってるのぉー！？」

なのはがユーノの胸を叩いた。

あれは黒歴史なのーと声をあげるが、ユーノは笑う。

実際なのはにとってそれは若い時に始めてのインタビューでテンションが振り切れたときのはずかしい思い出として残っている。  
散々ともだちにかかわれたのだ。

今更ながらユーノにもからかわれたくない。

なのは的には大切なことなので、

「もう忘れてえー！」

声を張り上げて抗議する。

はためから見るとなのはとユーノがいちゃついているようにしか見えないので、道を歩く男たちが視線をギラつかせた。

「ははは、ごめんごめん。ちょっと印象に残ってて……」

しかしユーノはどこ吹く風。

なのはの必死の抗議一通り聞くと、軽く流して彼女の手を引いた。

「あっ……」

なのはは自然と掴まれた手に声を漏らした。

「ん？」

「えっと……あの……っ、手が」

少しだけ驚いた。

ユーノからこういったことをするのが初めてだったからだ。

なのはは啞然と声を漏らす。

「いや？」

ユーノは足を止め、なのはの瞳をみていった。

純粹な色だった。

最近なのはをみる男たちのような背筋が冷たくなるような色はない。  
だからなのはは首を横にふった。

「で、でも」

「いいから、離れないように。ね？」

彼はゆっくりと落ち着いた声でいった。

地面に水を染み込ませるような声だった。

なのはただ、喉を一度鳴らす。

そうしておとなしくなった彼女の手を今度こそ引いて歩きだす。

そこには、どうしてだろうか。

なのはがみたことのない彼が。

いつもとは違う、力強い腕。

なのはは圧倒され、彼の半歩後ろを歩きだす。

ユーノとなのはが歩いていった先、そこは映画館だった。

まだ朝早く、人はまばらだが常に営業しているのは伊達ではないらしい。中はすでに営業を始めていた。

その映画館でユーノは一つの映画館のチケットを買う。

それは以前なのはがみたいと話した映画だった。

最近話題になった大物の映画監督が撮影したのではなく、CMすらしないアクションものの映画だった。

内容は今時珍しい仁義を重んじる男が活躍するアクションもので、どうにも日本の文化を多分に取り入れた映画らしい。

実家が古くから続いているせいで、どうにも仁義という言葉に弱いなのはは以前からみたかったのだ。

ちなみに余談ではあるが、なのははハードボイルドとか大好きだ。

そんななのはがみたがっていた映画を選択したユーノは手際よくなのはに食べたいものがあるかと聞くと、  
映画館の食べ物を買ってきた。

「はい、これ」

そういつて渡したのはポップコーンと柑橘系の飲み物。

ユーノの迷いのない行動になのはは驚いてばかりだ。

以前までのユーノならあたふたとしながら、買ってきていたのに。

どうしてだろうか。

ここにいたってなのははいつもとユーノが違うことに気がついた。  
さらに運が悪いことに　いや、この場合はいいのかもしれないが、  
なのはの耳に声が届いた。

「あそこのカップルレベル高くない？」

なのはの頬が赤く染まる。

なんとも遅いかもしれないが、なのはは今までのすれちがった人たちが自分たちをどうみていたのか漸く理解したのだ。

カップル？

私たちが？

世間一般的にみれば、まさしく今のなのはは間違いなくカップルの片割れだろう。

なのはは自分でも思った。

男の人と二人っきりで映画館。これって……

もともと熱をもっていた頬がさらに赤くなる。

そんな顔を見られたくなくて、なのははうつむいた。

しかし隣の男は実にタイミングがいいことに、

「大丈夫？」

と、声をかける。

なのはは今はそつとしてほしいと、思いつつ、大丈夫と声を返す。  
しかしとなりのエセ紳士がその程度で満足するはずもなく、なのはの頬に手をやった。

たいして親しくもない人からされれば生理的な嫌悪感が溢れてくることは間違いないが、なのはの今の心理状態からすれば、寝耳に水。

ひゃっ、と声を挙げて飛び上がった。

なんだなんだと周りが好機の視線を向ける。

その視線を受けて再びなのはは顔をうつむかせた。

……そんななのはの様子に萌えていた男たちは自分のペアに一発もらっていたのは余談だ。

さらに縮こまってしまったなのは。

ユーノは可笑しいとクスクスと笑った。

「もう！」

なのはは彼に背を向けた。

ごめんごめん、と声をかけると彼に、知らないもと声をあげる。

……すねちゃったかな？

ユーノはなのはの様子にこれはこれでいいかも、

と一人納得し、しかしそろそろ映画の時間だからかつのをやめる。

「さ、そろそろ行こっか」

高町なのはは混乱していた。

大好きな任侠映画をみて、男の生き様に感動を覚えながら、心の底の水面が揺れることを自覚していた。

……今日のユーノ君はちょっと変だよ。

いつもの気弱で、でもやさしくて、人のしてほしいことに気がついてくれるいい人。

それがなのはの中でのユーノだったのに。

今日の彼は……そう、根本的に違っていた。今までの見たことのない彼の姿になのははたじろぐ他なかった。

思えば彼との出会いは8年も前にしてなる。

なのはにとって人生を変えた出会いだと、今でも思っている。

あるときユーノと出会わなければ、自分はどうなっていたのか。そもそも闇の書の事件で死んでいたかもしれない。

だからなのは彼との出会いを感謝している。

彼との出会いがあったからこそ、今の自分があって、たくさんの幸せを生まれた。

なのはにとってユーノは親友と呼ぶだけの存在ではない。

彼はなのはにとって兄弟であり幼馴染であり、一番近くにいた異性なのだ。

なのはは自分から誰かの思いに気がつくほど敏感な性格をしていない。

むしろ愚直なまでにまっすぐ進むことしかできない不器用な少女だ。しかしここまでお膳立てをされて気がつかないほど鈍感でもなかった。

……ユーノくんは私を……デートに誘った？ それって、つまり

なのはの混乱とは逆に物語は襲いくる混乱をバツバツとなぎ倒して終着へと進んでいた。

なのは自身の思いもそうやって快刀乱麻のごとく解決できればいいのに、彼女は本気でそう思った。

いや、そもそも自分はなにを悩んでいるのか。

ユーノが自分のことをーだとして、それからどうなるというのか。



自分はどうなって欲しいと思っているのか。  
そして、どうあってほしいと思っているのか。

その果てを思い描いて自分は何を悩むというのだろうか。

なのはは映画に集中しているふりをして隣を見る。

ユーノもこういった映画に好きらしく、子供のように手に汗を握って映画を楽しんでいた。

どうして自分は彼はように楽しむことができないのか。  
それは

だめだよ。

なのははその先を考えまいと首をふった。  
水面がざわめく。

違う。違うよ。

自分の心が精一杯の悲鳴を上げた。

……もう、なのはにだってわかつてる。

このまま一緒にいれば、夜にでも彼に告白されることくらい。  
今の彼はなのはでもわかるくらいに、決意を周りに発していたのだから。

なんで？ そうなってもいいんじゃないの？

誰だろうか。

なのはの中で誰かがいった。

……ユーノ君はかっこいいし、仕事だってすごい仕事だってしてる。それに優しいし、ずっと昔から一緒にいて、なんでも知ってる。彼からの　を受け取ることに文句の一つだってつけられないじゃないか。

ふと、肘たてにおいたなのは手に何かが近づいてくるような気がした。

視線をずらして、みる。

ユーノの、手だ。

そつとなのはの手を握ろうと動いていた。

しかし　なのはは自分の手を静かに横にずらして、飲み物をとった。

心臓がうるさいくらいに音を立てた。

どうしよう。ユーノくんに避けられたと思われてないかな？

自分でも意図しない動きだった。

なのははユーノの顔を見るのが怖くて、まっすぐ映画だけを視界に収め続けた。だが、肝心の映画だけを内容は少しも入ってこない。

心臓は音を鳴らし続ける。

ここにいたって、なのははどうしてユーノに　告白されるかもしれないことが怖いのか、わかってしまった。

要するに、彼が怖いのだ。

いや、そうじゃない。

誰かが付き合うということが、怖いのだ。

今までの友達とたくさん思い出を作ってきた。

職場での思い出もたくさんある。

もちろんそのなかに男性だったたくさんいた。

けれど、なのはは早期から社会にでたことで、そういった情緒的な成長をする機会が少なかった。

だからだろうか。

なのはは 異性と付き合う、そんなことが怖かったのだ。

誰々と仲良かったのに、喧嘩した。

別れてから仲が悪くなった。

相性がわるかった。

彼氏にひどいことをされた。

付き合ったせいで嫌な思いをした人は、それこそ星の数ほどいる。

それに、付き合ったとして、今の生活はどうなるのだろうか。

なのはには夢がある。

教導隊で働いて、未来の魔導師たちに技術を教えていきたい、と。

それは付き合ったらどうなるのか。

付き合ったら今まで通りの時間を仕事には使えない。

そんな話だってよく聞くではないか。

なのはは……怖かった。

ユーノが自分をそういう目でみていることが、そして 告白されることが。

なのははぎゅっと目をつぶって、信じてもない神様に祈った。

この考えが勘違いでありますように。  
ユーノくんが私に　告白しませんように。

二人は道を歩く。

そしてなのははいつもよりも、笑う。

それはいつもより硬い笑みだった。

どこか無理のある笑みだった。

ユーノはそれに気がついていた。

自分がしたいことを悟られたこともわかっていた。

だから彼女がそうやって無理に笑ったということもわかっていた。

しかし、それでも彼は止まらない。

自分の想いを彼女に伝えるために、彼は止まることをしなかった。  
否、止まることが怖かった。

ゆえに、ユーノはなのはへと思いを伝える。

心身に突き刺すような寒さが満ちた夜。

うつすらとして光を放つ電柱のしたでユーノはなのはと向き合った。

「なのは……もうわかってると思うけど……僕、なのはに言いたいことがあるんだ」

「……それって、聞かなくちゃだめなことなの？　今までみたいに、友達じゃ駄目なの？」

ユーノは静かに首を横にふった。

「それじゃあ、駄目なんだ。……僕はずっとこの時のために過ごしてきたんだ。　たくさんの人に背中を押されて、僕はここまできたんだ。多分、僕一人じゃ、ここにはいなかったと思う。背中を押されて前に進んだからには、戻れない……僕は決めたんだ。なのはに　僕の想いを伝えるって」

なのはが怯えるように一歩後ろへ下がる。

ユーノはなのはの下がった分だけ前に足を進め、さらに一歩近づいた。

「わたしは……」

ユーノはなのはへと手を伸ばす。

「わたしは……！」

伸ばした腕がなのはへと触れると同時に、ユーノは彼女を体ごと引き寄せた。

勢いよく引き寄せられたなのはの体が、ユーノの腕の中に収まる。

「あ……」

なのは決して彼を突き飛ばして離れようとか、逃げようと行動しなかった。

ただ茫然と息を漏らすだけだ。

ユーノの腕の中で、彼から伝わる体温が心地よくて、離れようと思えなかったから。

なのはの脳裏に過去の情景が浮かぶ。

辛くて仕方なかった病室、意識のない自分のために、ずっと手をにぎっていてくれた人。

……そういえばユーノ君はわたしは手を握ってくれてたんだよね。

冷たくなにもない病室で目が覚めたとき、手の中に残っていた暖かさは今でも覚えてる。

だから

なのはは彼を腕の中で、彼の顔を見上げみた。  
視線が、合う。

彼は恥ずかしそうに頬を染めて微笑んだ。

「……あ」

知らずなのはの唇から熱い吐息が漏れる。

「なのは……」

ユーノはそれをどう受け取ったのか。なのはにはわからないが、彼はなのはの首元に顔を埋めると、吐息を首にかける。

「あつ……」

なのはの背筋が知らず、震えた。

ユーノはそれだけでなく、なのはの体を力任せに抱きしめた。

さすがのなのはもこれには眉をひそめて、痛い小さくつぶやいた。

だが、ユーノはすこし緩めるだけで、止めるつもりはないようだ。

それは離したくないと駄々をこねる子供のようにだった。

なのはは、仕方ないなあと、小さく笑みを作り、彼は体を抱きしめ変えず。

「……僕は、なのはのことが、好きだ」

ユーノがいった。

突然の宣告。

なのはの体が一瞬だけ硬くなる。

「好きなんだ。ずっとずっと昔から」

「ユーノくん……わたしは……」

わたしは

その続きをなんというつもりなのか。

なのはにもわからない。

ただ、続くことばはきつと大切で、言わなくてはいけないことなのだ、なのはは思っている。

けれど、それを遮るようにユーノは声をかぶせた。

「僕と　付き合ってください」

息を、飲む。

だれよりも今、近くにいたい男性 ユーノの力強い体が、

なのはを誘う。

それを前にしてなのはは暑くなっていく体を抑えるほかできることはなかった。

なのはは彼になにも言えない。

彼のことばが体にしみ込むのを待ち、

「僕と 付き合ってください。絶対に僕を 好きにさせて  
みせるから」



第三十一話 「終着点」(後書き)

あと二話。次は土曜日。

### 第三十二話 「kugiri」

太陽は沈みきった。俺の気分も沈みきった。どうにもやけになり  
そんな思考をしまいと布団にもぐりこんだ今は11時。ユーノの告  
白の件で傷心な俺だったが、どうやら神様は俺が嫌いらしい。

プルルル、プルルル。

よくある着信音が俺の耳元で鳴り響く。うるさいくらいに鳴り響  
く音が鼓膜を揺らし脳を揺らす。俺はそのうざったい振動に眉をひ  
そめて、もぞつと布団を頭までかぶった。

プルル……………

しばらくすると音は途切れ、聞こえなくなった。俺はやつと止ま  
った音に胸をなでおろし、より深い睡眠へと落ちていこうと意識を  
沈めていく。が、電話の主は俺に恨みでもあるのだろうか。もう一  
度うざったい音をならし、それどころか留守電になるたびに何度も  
何度もかけ直す作業をしてくれた。

いったいどこの誰だろうか。こんなたちの悪いストーカー行為に  
精をだす馬鹿ものは。俺は傷んで浸っていた気分なんだ、放ってお  
いてくれ。と虚空に語ってみるが、電話の向こうにいる相手がテ  
レパシーを使えるわけでもないらしい。電話は止まらない。

しかし本当に誰だろうか。俺は眠さに負けそんな思考のまま、こ

ここまで必死になって俺の携帯履歴に名前を貫いていく猛者が気になった。そこまで俺の携帯履歴を自分の名前で埋めたいのだろうか。もしそうならそいつは立派なストーカーから進化した病んでレではないだろうか。思わず背筋に走った悪寒に従って携帯を手にとって開く。決して悪寒に負けたわけではなく、これほどの熱意を見せる人と距離をとりたかったからである。

さて、名前は……………

「……………あん？」

ぴっ。

スマートフォンの弊害が発生。別に電話に出る気もなかったのに肌が触れたせいで着信が応答へ変わる。ああ、なんてことだろうか。固まった俺をよそに電話の向こうで安堵の声が聞こえた。

「……………あ、あの！ わ、わたし……………」

高町なのはです」

ユーノの恋愛を本気で応援してみた。

「 k u g i r i 」

街灯が照らす公園。端に遊具が並び、芝生が生えそろったここはきつと子供たちに人気の遊び場なんじゃないだろうか。街灯のおかげで夜には大学生くらいの人が遊ぶ場所としてもそれなりにやさそうだ。一応ユーノがそのうち使うかもしれないデートスポットの一つとして覚えておいた場所なので、ロケーションもいい。なにより周囲には道路がないため静かでムードも作りやすい。当時見つけた時はパチンと指をはじいて喜びを表したものだ。

俺は公園に踏みいると目的の人を探して視線を巡らせた。いた。すぐに見つかる。公園の街灯の一本が照らす真下、きいっと音を響かせるブランコに少女が一人座っている。彼女の目の前に立つと、わざと気取ったように、

「今日はいいい夜だね。こんなにきれいな月が出てるよ」

投げかけた言葉に彼女　高町なのはは俺を見ず、首を横に振る。

「私には見えません。見るものが全部、暗いんです」

大仰に俺は肩をすくめた。

「それはどうして？ 君の見るものと僕の見るものに違いなんてないじゃないか」

「違います。例え見たものが同じでも、私とあなたは違います」

なるほど。小さく頷きを返し、彼女の隣に座った。不安定につりさげられた椅子がいきいきと音を掻きならす。

「そうかもしれない。それでも 月は綺麗だ。黒色の絵具をたっぷり吸い込んだ夜空に、黄色はよく映える」

なのは顔を上げて月を見た。そして顔をくしゃりとゆがめる。

「ええ、そうです。月は綺麗です。でも、暗いんです。俯いていたからじゃないんです」

ああ、となのは息を吐いた。

「わかったんです。ああ、そうです。暗いのはきっと私が暗いからなんです。私は」

空に、手を伸ばす。けれどその手は月に伸びていなかった。ただ虚無の黒を掴もうともがく。

「君はどうして手を伸ばすんだい？」

「ほしいんです」

彼女が答えた。その瞳に俺はもう映っていない。

「何が？」

「何かを、です」

俺は手を伸ばすなのはの横顔を見た。虚ろで、そして迷っていた。

「それはどこに？」

掴む。開いていた手をぎゅっと握りしめた。そして彼女は初めて、俺を見て　瞳に俺を写した。

「ここに。私はそれを見つげにきたんです

総一さん」

「私は探しに来たんです」

「何を、と聞くのは無粋かい？」

いいえ、となのははいった。月明かりと街灯が照らす中で俺に罪を告白するような姿だった。

「私にはわからないんです。どうして　人は誰かに思いを伝えるんでしょうか？」

なのははぎゅっと自分の手を強く握った。強く、強く。そうでもない彼女がきつと言葉を吐き出すことができなかったから。捕まる物がないから、自分にしがみついた。

「さあ、それはその人にしかわからないよ。少なくとも俺が持つ解がすべてを満たす解ではないことはわかるけど」

「ええ、きつとそうなんです」

彼女が笑った。しかしそれは一瞬で、少しだけ堅い表情を見せて、俺に体ごと向き合った。

「私　ユーノくんに告白されました」

なのはの目をじっと見た。そこにはただ何の色も写していない俺の瞳が映るだけで、俺はなのはの心の底を見れない。

「……そう。それで、なのははどうするの？」

「まだ、返事はしてません。だから、探しにきたんです。私の答えを」

ふっと空気が抜けるような笑みだった。すると抜けたのは空気だけではなかったらしい。力の抜けた笑みと共に不思議そうな顔をする。

「ユーノくんはどうして私を好きになったのかな？」

「それこそ 分からない、だ」

第一、君はそれで満足できるのかい？

暗にそう問いかけた時、なのははそうだね、と頷いた。

「私はユーノくんが好きなのかな？」

「それは 君しだいだ」

ブランコがきい、と小さく音を立てた。誰が揺れたのだろうか。それを皮切りになのはは目を閉じる。無音が流れる。しんと冷たい空気が俺たちを包み、星空の光が淡くなのはを照らした。

「  
」

「……やっぱり、わからないんです。私がユーノくんをどう思ってるのか……ううん。そうじゃない。私はわからないんです。

誰かを好きになるってことが」

なのはは俺から目を外し、再び夜空を見上げ、まるで懺悔をするように息を吐く。

「私は楽しいってことを知ってます。悲しいってことも知ってます。怖いってことも、辛いつても、私は知ってます。でも、好きってことは知らないんです。いったいどう感じれば好きなんですか？  
どんなふうに思えれば好きなんですか？」

俺は口もとに笑みを作って、君は不器用だなと笑った。なのはもそうかもしれませんが笑った。

「でも、分からないと進めない。そんな気がするんです。だから探



しているんです」

「なのははその答えを俺が持つてると思ってるんだ？」

なのはは首を横に振って、

「いいえ、感じたんです。漠然と」

だから俺は笑みを作った。

「それはうれしい。けれど、その答えは決してあげられないよ」

どうして、となのはが問う。俺はなににも答えずただ沈黙を保った。

「なら、どうして何も言わないんですか？」

もう一度沈黙を。それこそ君には言えない。だって、どんなことをいっても それは俺の感情だから。きっととなのはを迷わせる。

「ユーノくんは待つてるんです」

「そう。きつとあいつはずつと待つだろうね」

「そうですよね。でも私は待たせたくないんです」

「どうして？」

さあ、となのはがいった。自分でもわからないと。

「確かに、俺は君のいう『好き』を知ってる」

「教えては、くれないんですよね」

「そうだよ。ここは君に踏み込む資格がないんだ。だって、ここは俺のすべてがあるから」

「すべて……それが総一さんの『好き』の位置ですか？」

いいや、そうじゃない。

「ここも『好き』の位置さ」

「やっぱり、私は探さないといけないんですね。私の『好き』の位置を」

「」

はぁ、と何度目かの息を吐いた。寒さが息を白く染める。なのは冬が近くなってきた、と零す。

「私は、ユーノくんをどう思ってるのかな」

俺はブランコから降りると彼女の隣に立って空を見上げた。忌々しいことに星空は満天。天の川が自己主張を繰り返す。

「俺にはわからないよ」

「私にもわからないんです」

地球では見られない星空に目を奪われたのはいつが最後だっただろうか。今はこれが普通のこととして思う。慣れ、とは悲しいものだ。そう、俺がなのはの隣に立つことも、こうして彼女の口からユニノのことを聞くのも 慣れてしまった。痛みに耐えるように立ちつくす俺をよそに、なのはは意思に火をともし。

「けど」

なのはは両手を広げて、

「分からないから、そのままにはできない。分からないけれど、分かるうとしないわけにはいかないから」

「それが君のいいところだよ」

ええ、と彼女は微笑んだ。

「不屈の心は、どんなときでも諦めないんです」

ああ、今わかった。俺がここにいる理由を。ただ漠然と何かに背中を押され、ここに来たその理由を。きっと俺は　なのはの背中を押すために来たんだ。

「ねえ、なのは」

君は、

「フエイトと一緒に」ご飯を食べててどう思う？」「……？」

君は、

「はやてとご飯を食べててどう思う？」「……楽しいって、思います」

君は、

「ユーノと一緒に」ご飯を食べててどう思った？」「」

君は、俺と食べてどう思った？

言いたくて、でも絶対に言えない言葉。俺は静かに続く言葉を飲み込んで、なのはの手を握る。

「それだけのことなんだ、きっと単純なことだったんじゃないかな」

彼女が目を見開く。

「　　」

「きっと、ユーノは待ってるよ」

もう十分だろう？ 君が今思った思いだけで十分だろう？ 分かったんじゃないのかい？ そんな言葉、声にしない。彼女にはきつと手をつなぐだけで伝わる。

「さあ」

もう手をつなぐこともないだろう。これで十分だ。名残惜しい気持ちも何もかもを振り払って、俺はなのはに背中を向けた。かわりに言葉で彼女の背中を押す。

「答えがでたならば、ここにはいてはいけないよ。君を待ってるんだろう？」

これ以上向こうへ踏みこんでいいのは、なのはが想いを伝えた誰かだけだ。

「今思っていることはなにも言わずに行ってくれないか？」

きつと、今の彼女はユーノのことを思い出して 病室で俺にユーノのことを言ったときと同じ顔をしてるだろう。そんな幸せそうな顔 俺は見たくないんだ。

「　　私は、」

もう後ろをみない。そう決めていた俺の背にふと何かが触れる感触が伝わった。

「　　ありがとう、ございました。私はもう、決めたんです。今、決めたんです」

「なら、やることはわかってるんじゃないかな」

ええ、と背中ごしに声が届いた。

「知ってますか？　私、決めたことは絶対にやり遂げるんですよ」

知っているさ、誰よりも。何も言わずに言葉を飲み込んで、空へと顔を向ける。そつと背中からなのはの手が離れた。ああ、これで終わりだ。

「　　」

なのはが小さく呟いた。それは小さすぎて聞こえない。でも、俺はもうよかった。

「　　行ってきます」

彼女が離れていく。俺は振り向かない。　　なにも言わない。

こうして、俺の初恋は完全に終わりを告げた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3285t/>

---

ユーノの恋愛を本気で応援してみた

2011年11月13日19時30分発行